

配するナヨウ心配しても仕様がねへ、おれが手紙を書くが今から松右衛門の處まで行つて
 吳んねへ吉原へ情死があつて品川溜へ下るのだからおれが少し諱があつて天龍院様の法事の
 ことで往かゝるくつちやアあらねへから手前往つて吳んねへ 喜 へい 重 チャア往つて来て
 とオート立て隔の襖をピツマリ建切ました時の喜三郎の兩眼小涙を隠し暫く泣いて居りま
 すが馳て外へ出ましてからさま／＼考て驚きましたのこのまが表向になれば島村の家
 沢所にあるとんだ事を致したと急ぎ一つ目の森田屋へ参つてお嬢さん是非逢ひなれば
 あらんから何うか女中衆へ迎ふやつて呉れぬかといふとハイと云つて出りけます、喜三郎
 の氣になつてあらんから急ぎ品川へ往き用を達して歸りますとあろくといふ娘の二階に参
 つて居りまして ろく 喜三さんお出なさい 喜 よく早く出られましたね ろく 喜三さんの
 方々ら用があるから来いと仰しやるは今まで無い事だから是非往かうと春と相談して今
 日の恰どよい塩梅よお稻荷様だから飾物が有るから見物小参りまると云つて出まいたら
 少し位遅くつても阿兄は阿られる氣遣かひないから宜いので何か汚用ですか 喜 少し
 改まつたお話しがあるので私ハ誠におもうもとんと事をしましたお前さんの公儀の汚用達の

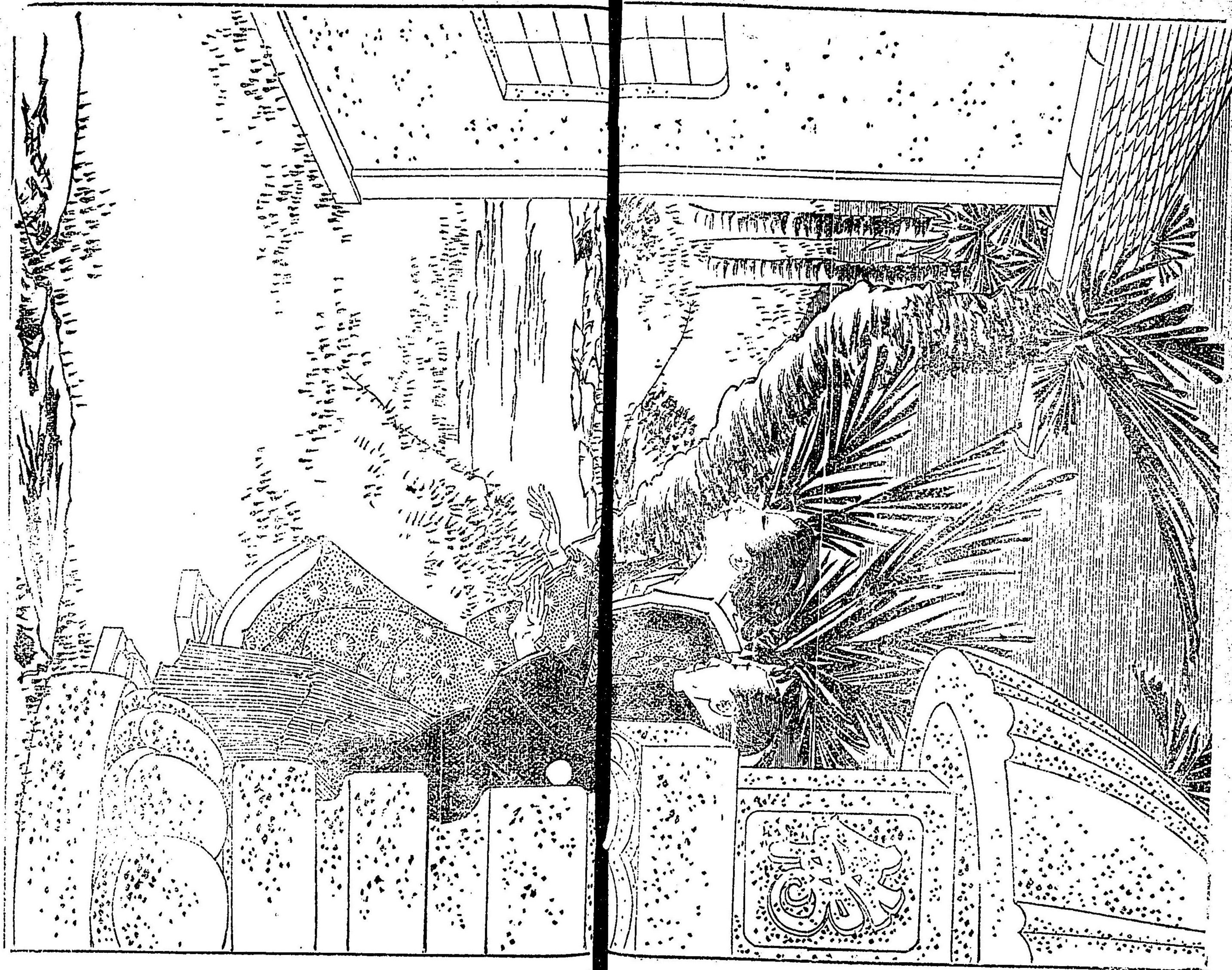
お嬢さん其の家は疵の付之様な事をして誠に濟ません、實に私ハ遠い處へ往かおれをな
 りません諱だから今までの事ハ皆水の泡として急い何處かへ縁付てハ呉れまいかさうして
 縁付て何處から何んと云つて来ても去年縁付たとか三年跡縁付たとか阿兄さん何處
 までも云ひ張て仕まへを知られる氣遣ひが無いが私ハ主人は知れて面目をくつて居られない
 悪い事をなました ろく 誰れが何とかいひましたか 喜 誰れとなく知れたので仕方がな
 いのサ ろく 妾ゆゑそんなお貴郎は汚苦勞うけてハ濟ませんがどうかお前さんの身の立や
 う妾が参つてお詫ことをしませうか 喜 そんな事をすると伺いけない大事になるから何う
 か是までの事ハ夢と思つて何うしても私ハ夫婦小なることハ出来なない體で ろく あせ出来
 ませんお前さん年季が明けく獨身になれば何うか来て話をきて嫁に貰つて女房に生涯しそ
 遣うと仰しやつたことが有ませう 喜 ソレハチおろくさん嘘で ろく へエー 喜 夫婦みな
 らうといつたハ嘘で私の身の上うちあげて話しハ出来なないが實に私ハ穢れ多いと云ふ身
 の上 ろく 穢れ多いと云ふのハ 喜 私の子實はもうも實に小屋者ですワ ろく 小屋者でエ
 れの何アよ 喜 小屋者でエのハデーくやさア ろく デーくを申しませと 喜 そんなよ

聞いての困りまをねへ私ハ谷中道灌山の重助といふ小屋者の配下で雪駄直しよも出る乞食の身の上だから「うー」喜「悔りおまかへ外でも無い實ハ地震の時通りかゝって命を助けられた恩義があるので私ハ情を立てゝお呉れだから私もお前の深切まほざされ斯う成ったが以前の體ハ疵を付たくもないうらへし隠しよして居て斯う深い中よありましたが是が表向にされば島村様ハ決所と、お前の家ハ潰れ私も幼少ハ時分から恩に成た頭ハ義理が濟まないから何處かへ身を隠さうと思ふが逃げて果せない身の上他の事なら何んな悪るい事をして大名の屋敷へ隠れて仕まへば濟むが仲間の者から若し雪駄直しと斯うした中よなつたのが知れると家柄ハ係ハ決所となつて土臺の土まで入かへる程厭がられる私の身の上お前さんハ難義をかけたハ濟ませんから急いで兄さんハ嫁ハ遣つて呉れ〜といつて早く縁付き何處から何を云つて來てもそんな事ハなら三年跡ハ縁付いたと阿兄さんが云ひ張って仕まへば大丈夫だらう子……………」ろく「ハイ……………」と云つたがろくの懐ろ手をきて暫と考へるハ胸小迫つて膝へばらく落る涙を繻絆の袖で拭きながら「ろく」喜三さんさう打明けて、云つて下さつたからよハ妻ハ外へ縁付氣ハ有ません何處へも連れて往つて下さい 喜「何處でも連れて往けば私と一緒なるぞ女太夫よなるのだヨ」ろく「女太夫でもなよでも出ます 喜「女太夫よハ出られませんお前が一緒ハ往けば益々お前の體を穢すから是も人知れ他へ縁付けておくんさい」ろく「だけれども喜三さん妻ハ他へ縁付けても其の家もよい身柄だからお嬢さまと云ハれても妻の體とも穢れ居ませう 喜「さうで、穢れ居るからねへそこハ穢さる積りにして」ろく「つもとどいつとも一端穢れと妻の體お前さんとも斯うあてて見れば他へ縁付氣ハ有ませんまへ他へ縁付きませと妻がこれら生涯配偶夫と一つ寐をすれば其ハ夫の體を穢えてハ濟ません尙々罪になりませうかと妻ハ思ひませ必き妻ハお前さんの側を離れる氣ハ有ません貴郎が厭でも何事も前ハ世から定まる惡縁と思つて連れて往つて下さいいなモウ斯うなれお前さん三日も夫婦ハ成つた上での殺してもよいから連れて往つて下さい 喜「何うあつても他へ縁付氣ハないか」ろく「ハイ 喜「本統ろへ」ろく「ハイ妻ハ死んでも貴郎さんと離れる氣ハ有ません、といふ言葉も胸よ迫つと思ふやうハ口もきけません

第九回

喜三郎のろくの眞實なほだされ情として捨かね 喜、ア、能く云って呉んなすつた左ういふお前が心なら大恩受けた頭よの濟まねへが前を連れせう實のお前もつこん惚れて小屋者といふ事をかくしてめたから斯う成つたのだと、さ、夫ぢやア私も覺悟をしてお前を連れて逃やうが私ハ路金が無いが前小遣ひの貰つたのでも些と計りでもないかへ ちうく「ハイ實のお母さんや父親さまが御達者の時分別に貰つたお金も有ましたが夫もモウ些との遣ひまゝがチャア斯うなせう春と相談して……イ、エ春へはいひませんがお金を拵へませうとさうして此處へ來ませう 喜、此處も目立つから明日の晩、板橋の先の石神井橋を渡るど左り側の美濃屋といふ茶屋がある、あそこへ奥深くって知れぬへ家だから彼家へ往つて待つ居る此處まで駕籠か何かで來て彼處うら駕籠を返して別し立て山籠で往ませう ちうく」いつ時分 喜、斯うして呉んねへ早く出られ、お宜いが矢張り遅くなるから藤泊りとして宜い、川さへ越せをもうい、から何うか五ツ時分まで往つて ちうく「ハイそんなら妾ハ急度お金を拵へて來ますよ、と互ひも示合まして其日の別れ翌日になりますと娘ハ入らん物のお春に工風をさせて賣拂ひ金の才覺を致しました、たんとお出來ませんが共

頃五十兩からの金の大金で、着替へもの、包をかへて板橋へ參ると喜三郎の先へ來て待つ居りましたから共木曾路をさして逃げましたことと此方ハ重助がサア跡で奮忽のふくらんので有ません不届極な奴だ是まで目をかけて遣るふ恩を忘れ欠落をせるとい良し、最上此上に向ふの島村も殊に寄たらぐるだらうと重助の故意と穢をい扮装をして出かけ全休門は敷居の跨がないのだが構の幸仲の口へかへて、重、お頼み申升、傍免なさい 取次、どうれ、何だナ此處へ這入て來ての往かん何ぞ 重、島村孝兵衛様の此方様で 取次「當家の島村が手前乞食で無いら 重、手前の谷中道灌山の小屋者重助と申者でござり升 取次」怪しからん、門の土嚢を跨いで這入ることならんで無いか此處へ這入て來て玄關口へかへつての往かん、身柄をも知らんもの怪しからぬ奴だなア 重、身柄も辨まへて居り升ソレを顧りみずお玄關へ出升ののよく、な事とさうり旦那様へお目通りを致したう存を升る取次を願ひ升 取次、誰らん事を云つての往かんお目通りと云つて怪しからん、身分をも考へず 重、小屋者と心得申升のでござり升 取次、何の願ひか其處で申が宜い、全休堂所口で云ふのだが取次で遣るが何んだ 重、貴方様への解りなならぬへことぞ 取次」



已れで解らん事無いのサ、取次の役で、只今の留守であるからか歸りなつとら申が
 何んぞういへと申すよ 重 ナニ貴方様へ直ぐ申す譯よ、往きませんエヘ………なか
 くもちまして小屋者の身柄をもじきまへてお立關へ出ます位でよくくの儀が有て參ッ
 たのでエヘエヘこれのあかしく外の事とも違ひ世間へパツとして御當家へ疵も出来
 ると能く無へことなんでエへとんだチ一件が有てナ、エヘ……… 取次「厭ふ笑ふナこれ
 御當家へ疵の出来るど何んだ向う云ふ譯だ 重」エヘ………さやうでござり升から御家
 來様のね耳入れる事の出來ないど申のでどうしても仕方が無いお目も掛つてお話しをし
 たいのぞエヘ………どうも取次を願ひ升エヘ 取次「私の内々此事も取次ぐ役だから世
 間へ知れんやうに内分に言ふから云へよ 重」どう致しまえ貴方様も申上られるもとなら
 御門の土臺を跨いで這入らねへ私玄のこれでも三十六人の束をするものを少しの心得有
 ッて出ましたのぞエヘ……… 取次「心得有と云ッても無暗よお逢ひと無いヨ、とかれ
 れと云ッて居る處へ、お歸りく」と聲がかゝり升と縁取の袴をはきまして小長い脇差をさ
 して島村孝兵衛が奥へ通ると右の通り取次が申升ら孝兵衛と何事かは知らんが心よか、

り升から 孝 庭へ廻はせ、と云ふから 取次「此方等へ通るが宣い、と申升ら小屋者重助
 は島村の庭先へ廻るこれら掛合に相成り升が一と息吐きまして申升

第十回

引續きまして蝦夷錦古郷の家土産と申す外題ハ則ち北海道土産のお咄で小屋者の喜三郎の
 島村の娘お録を連れて逃げましたが小屋頭の重助ハ心掛の宜い者でござい升から往々の
 喜三郎を一人娘のお竹と娶合せる積り其上喜三郎にも種々意見もし成るたけ双方の爲まな
 る様に心配もした處突然逃げてしまひまじさから腹も立たぬでございませんが物の束
 もして居るだけ道理も能く分りませから事を穩便に計らふ積りで島村へ參りましたら兎も
 角も庭へ通せとの事で案内に連れて庭へ通り沓脱石の處へ手を突き飼犬の如く小さく成て
 居り升と島村孝兵衛ハ椽側へ坐布團を敷かせて其上へ坐はり桐胴の火鉢は釣瓶形の烟草盆
 を扣へ重助を眼下に見まして 孝「コレ重助とやら申のの手前か 重」エイ谷中の道灌山は居
 ると申す重助といふ不調法もの身分違ひも願ひみず旦那様よか目通りを願ひました處早速お
 聞願ひでエイ難有う存じ升 孝「家來共が斷つたを達て逢ねばならぬ、モシ逢ねば島村の家

よ拘へるとか中たさうだが大公儀の汚用を達する島村憲兵衛玄關の高張に御用の二字の有
 るのが眼よの這入らぬか 重「エイ仰せが無くとも旦那様のお身分を能く辨へて居り升夫故
 達ッそお逢ひを願ひましたも御家を大事と存じ升也るモシに取次比衆などへ浮かり申上ま
 したら御家が断絶致さうと氣遣ひまして 孝「コリヤ重助家が断絶致すなど、以の外の
 事を申す奴ぢや仕儀よ依てハ聞捨にハ致さんぞ 重「エイ断絶致す程の事でござい升から能
 々お目通りを願ひました、是ハ他聞を憚り升事也る人拂ひを願ひ升 孝「ウ、吉次勝藏
 何事か知らぬが次へ往け」 重「アレふ土藏と家の下見が見え升が宅れをござり升か 孝
 「アレハ綿新といふ道具屋の藏と油屋の物置の下見を誰も人の居ぬから遠慮ハ入らぬ、此
 時重助ハ沓脱石へ腰をかけたまじと 重「何んとも申さう様は無いのハ私ハ配下の喜三郎とい
 ふ者とお妹子のお録様と不義を致し、其上欠落をした事を御存をござり升 孝「黙々妹
 か小屋者と不義を致して逃げたなど、以の外の事を申す奴ぢや何を目當ふ右様な事を申
 す左様な馬鹿氣た事を聞く耳ハ持ぬハ」 重「エイ目當や証據の無い事で身分の違ふ小屋者
 が態々お目通りハ願ひません私ハ方ハ象眼入と銀金物の腕守りとお妹子のお録さまか
 ら喜三郎へ遣ハすつた文が二本ござり升實ハ私ハ驚愕致しました今日斯うして出ましたの
 ハ旦那様へ迷惑も掛けず世間へもパツとせせお名前前の出させぬ様小穩便ハ取計らふ心得
 でござり升 孝「腕守りや名當の無い文と証據ハならぬ録と申す名の女も世間ハ幾干も
 有らう恰と妹の名か録といふので當推量の門違ひと申譯なら夫まで左も無くハ島村の家名
 へ傷でも附く様に訝しく言掛りをして金をゆする心底ぢやナ 重「怪しからぬ事を云ひなさ
 る三十六人の束を致す重助ゆすり編術にハ参りませぬ配下此者が嬖様と不義をして逃げま
 したのを表向き八州かお町の手先衆の手で捕ると、お氣の毒様でゴスが汚當家ハ欠所よな
 り升 孝「何んで當家が欠所よなる、手前が中様な事の會て覺えハ無いがヨシ有たよもせよ
 不所存な妹ならば勘當致せば夫まで、ハ無いか夫で悪くも勝手小致せ 重「勝手よしろな
 ら勝手よも致しませうが、エモシ旦那へ、谷と中てハお分りよもなり升まいが彈左衛門の
 手で探し升れば假令大名の屋敷ハ匿れて居ても直きハ知れるのが仲間の法、さうなり升と
 汚當家ハ云ハすと知れた欠所で楳の下の土までも入替へる始末小な升、憚りながら嬖様
 を私しよれ任せなさりやア世間へハ知せぬ様に取り計からひませう 孝「ナニ任かせろと、

ら喜三郎へ遣ハすつた文が二本ござり升實ハ私ハ驚愕致しました今日斯うして出ましたの
 ハ旦那様へ迷惑も掛けず世間へもパツとせせお名前前の出させぬ様小穩便ハ取計らふ心得
 でござり升 孝「腕守りや名當の無い文と証據ハならぬ録と申す名の女も世間ハ幾干も
 有らう恰と妹の名か録といふので當推量の門違ひと申譯なら夫まで左も無くハ島村の家名
 へ傷でも附く様に訝しく言掛りをして金をゆする心底ぢやナ 重「怪しからぬ事を云ひなさ
 る三十六人の束を致す重助ゆすり編術にハ参りませぬ配下此者が嬖様と不義をして逃げま
 したのを表向き八州かお町の手先衆の手で捕ると、お氣の毒様でゴスが汚當家ハ欠所よな
 り升 孝「何んで當家が欠所よなる、手前が中様な事の會て覺えハ無いがヨシ有たよもせよ
 不所存な妹ならば勘當致せば夫まで、ハ無いか夫で悪くも勝手小致せ 重「勝手よしろな
 ら勝手よも致しませうが、エモシ旦那へ、谷と中てハお分りよもなり升まいが彈左衛門の
 手で探し升れば假令大名の屋敷ハ匿れて居ても直きハ知れるのが仲間の法、さうなり升と
 汚當家ハ云ハすと知れた欠所で楳の下の土までも入替へる始末小な升、憚りながら嬖様
 を私しよれ任せなさりやア世間へハ知せぬ様に取り計からひませう 孝「ナニ任かせろと、

「コリヤ手前の小屋頭と申すはコリヤ何か有様な難題を申掛け金にする心得とらうが今も
 甲通り勘當致せを少しも難儀の掛る道理の無ければ手前の世話の世話ならぬへ」重「仮合勘
 當をなさましても御當家の欠所でござりませせ」孝「何故當家が欠所なる」重「私達の云
 ひ立て様で欠所ふなりませすソコを旦那様が重助頼む向うか内々探して呉れろと仰しやれを
 密と二人を引戻し、嬢様をお歸へし申升喜三郎も今年二十七でござい升が小屋者似合
 ねへ柔和な生れ足を洗やア立派な素人、どがその出来ないので、喜三郎の腹からの穢多
 で親父のデイ、母親の私の長家居ましたたが二人共喜三郎が幼少の時死亡まえて我子
 のやうに育てや、さうら實の憫然でござり升、いま仰しやる通り嬢様を御勘當なさるなら
 私へ下さへま！左様いすと田舎人別致して配偶してやりさうござへやせ

第十一回

重助が編術で無いといふ事少孝兵衛を分りまして、孝「さうして貴様頼むに金と
 幾千程入るノウ」重「金と仰えやるが金の四文も入りません此方ふ身分がありやア金を
 上げた位ト申すの嫁入り前の人の娘を疵物よしたれたから金を出しと詫にやアならぬ道
 理でござへ升併し身分が違ふら金を上る譯よの往きませんが何しろお貰ひ申ませう」孝「
 成程コリヤア感心實感心だ如何にも詞ふあまへてお任せ申さう……コリヤ誰か茶を上
 げぬか、と手を叩き」孝「布蒲を敷いて失禮で有た、と布蒲を取り去り升」重「モン旦那、人
 を呼んぢやいけません」孝「お程さうで有た……コリヤ茶の入らぬ持て参るよの及むん
 此處への誰も来るな」重「左様ふお頼みをござり升まば何處までも穩便に取計らひ升其手續
 の筒様いたす心得で、失禮ながら他聞を憚りませゆゑお耳を拜借」孝「宜しいズット様側へ
 掛らな……」重「御免を蒙り升、と孝兵衛の耳に口を寄せて呟やき升と」孝「ウンなる程、妙
 と……」流石……夫の厭はん、敬服、感心、重「分り次第は御左右を申上げ升、と重助の歸
 り升、此方の二人の欠落をして木曾路を差して参りましたが傍存じの通り道中での寺院に
 洗朱院地と穢多町に里敷の外に成て處々にござりませソコ番太の有處の若しも小屋
 頭から觸れが廻つて居へせぬかと廻り道をして往き升から思ひの外小日敷が掛り漸々信州
 の諏訪を越え名代の鹽尻峠を越えまして洗馬の宿の花屋傳次郎といふ宿屋へ泊り升と旅の
 勞れといろく心配で氣を遣つたのが一度打て出ましてドツと床に就きまして凡そ三ヶ

月むかしの間枕も上らぬ大病となり食の僅かゝ飯湯を吸ふ程であつて升が薬と云つての熊膽より外への飲みませんから日増し重るばかり宿の亭主も始めから欠落者と眼へ着ました。追手も掛らそ其上年齢も往かぬ娘が病人の看病をやるのを見て感心して居り升、或る夜お録が病人の枕元へ来て「ろく」モシ喜三さんお薬の二番が出来ましたからお飲んさい、病ほうけた喜三郎の樂書だらけな行燈の傍へ起上り「喜」ア、死たい〜「ろく」また其んな心細い事はッかりお言ひだ子妾が朝晩一心願掛を―て居ますから其涉利益でもお前様をモウ一遍壯健に仕ないで置あぬから弱い心を出さないで何うぞ氣を長く養生をまゝ下さい「喜」飯合私がお死んでもお前の深切の忘れない、お合宿の衆へまだ皆さんがお在宿かろく」イ、お隣りに居た強い顔の修行者も立ッてお仕舞で誰も居りません「喜」お録さん私がお知ぬ土地で死ぬのも自分で招いと天の罰だ「ろく」何故其んな事を云ッてお憐れだヨ氣を揉んでお憐れいどりそらの病よの大毒だからモウ其んあつまらない事を云ッて氣を揉むれでない「喜」穢れの多い小屋者が御用達の様さんと不義をしてお負ふ二人で欠落をしたのさうら嘸ぐお前の阿兄さんの憎い奴だと御立腹で有まえたらう……私シア早く親父よ



別れ又尤才の時母親も死なれ夫から斯うして人並に育てられ、頭と思、其上の前を斯う成た事が知れても腹も立ちきいろ、深切云って下きった心ざえを無よし恩を仇よ小屋を出て仕舞ったから八ッ裂にしても足らぬ程腹が立ったで有らう此に番太ノへ廻交を出さずに下さる頭の情け頭ハ罰を當ぬ氣でも皇天様が赦さない私が死んでさへ仕舞へば前ハ家へ歸られるから人を頼んぞ詫を去て、左様して家へ歸ったら喜三郎ハ阿兄さんハ濟ぬ、と云ひ死よ死まーと云って、お呉れ荒い風も當らぬ前が私の爲よ苦勞をきるのを見よつけ一日も早く死とい、と枕を顔を押して、チイノと泣いて居り升

第十二回

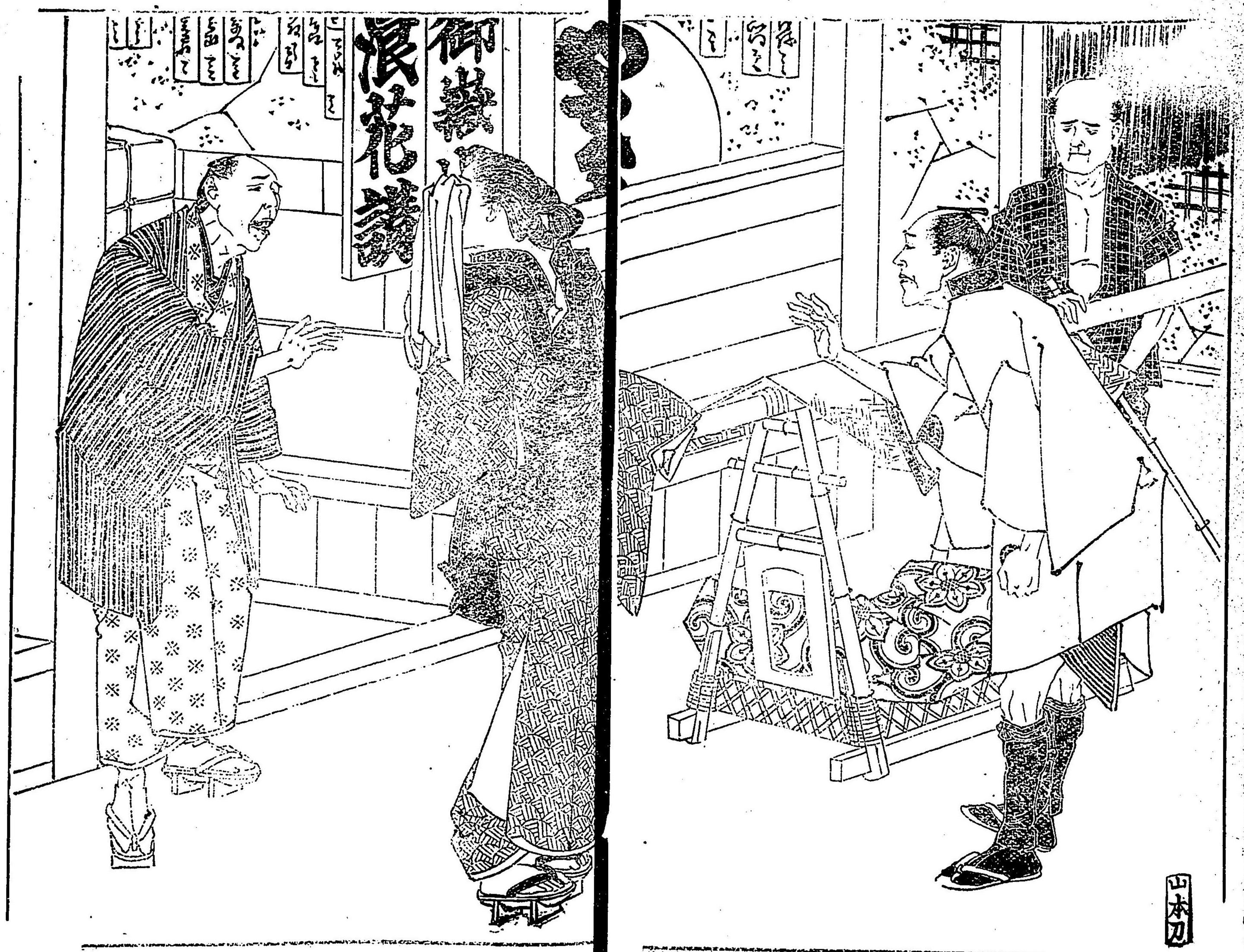
其時お録も共小泣きふし、まじとが襦袢の袖で涙を拭ひ、ろと、また其んな事をかりお前さんが悪いので、有りません妾が惚て家出をしたので有ますから罰が當れを妾に當つてお前も當る譯ハない、假令此うへお貰ひよ歩行ましてもお前を困らせる様な事の仕ません、アノ此間この向ふの物置を毀した時下見の板を剝しまし、さら一頭の壁虎が太以釘で柱へ打附られて居ましたノ、皆赤が斯んな打附られても活て居るのハ不思議だ、と云ひ升から妾

も一寸往て覗いて見ると体の半分上の方へ能く肥つて下の方へ疲ひかけて居ます。其處に居た人達が此の物置へ何でも十年前に建たのだが其時から大工が知らず壁虎を釘附ましたのだらう其れにしても何ういふ譯で活て居るかと思議がッて居ますと子、まあお聞上其傍は又一頭の壁虎が居ます、するど傍を見て居た老人が此りやア此傍は居る壁虎の釘附は成つた壁虎の女房で亭主の壁虎が体を動かす事が出来なから長い月日の間出や何かの食物を運んで養つたのだらう出けらでさへも夫婦となれど此通り況して人間の夫の爲は女房へ何れやうな苦勞でも爲なければ成らぬと云ひまゝに妾やア其話を聞いて眞實に感心しましたヨ、ダカラ妾やアお前の爲小何様な心配でもする積りどが子喜三さん、と云ひ掛けて口閉り何やら云ひ出しかねて居りましたがヤットの思ひで云ひ出しまさよ、ろく「云つたらお前が尙ほ氣を揉だらうと存て申さず居りまゝさかモツ持て出たる金もなくなましましし此家の御亭主も深切に心配をし或る御醫者様はお前の病氣の容体を云つて相談を下さすつたら其御醫者様仰しやるよの迎も並大體な藥で全快むづかしい朝鮮の大人參を飲まなければ癒らんが其人參を飲よの二十五兩の金が入るとの事、今此

の中を二十五兩れる金の出来様も有ませんからお前が不自由でお困りでも有ませうが妾を女郎又賣つて下さい左様して其の金で大人參を飲つてお前が壯健よさへ成つてお呉れなら其先の何をも成りませうから左様して下さい、ヨウ、喜三さん、と兩の眼は涙を一杯含んで申それを喜三郎が聞きまして細い疲ひかけた手を出してお録の手をシツと握り、喜よく云つてお呉れお録さん誠よ忝けない其深切ばかりで澤山だ何してお前を賣つて賣其れこそ私しが前前の兄に猶々濟まない私しが斯ういふ態なるも天の罰、決してお前などよ身を賣せて私しの爲よ此上の苦勞をさせるよ及ばぬ、といろ／＼云ひましたけれどもお録は猶もさま／＼云ひ拵らへまして花屋の主人に頼みまして元山宿の丸屋といふ遊女屋へ三十兩の身の代で身を賣りました

第十三回

お録はどの標致を持って三十兩の身代と申すと大層安いやうでござい升けれども又其頃此邊の旅女郎などいふものハカラお咄し小もならぬ下等なもので一晩六百文位の揚代金でありまして其驛中れお客を取つても平氣だといふ悪達者の領元と鼻の先の白い化物見た



山本

懐るものでござい升が其中へ無地生娘然も美人の録が出たのでおから流行ます、晝夜
 絶間もない程もある客を馴ぬながら何か角りとり廻して夜に其客を寐せつけ升とソツと秘
 け出して元山から洗馬まで三十町もある處をセッセと參つて、喜三郎は看病をいた一夜
 頃又歸つて往くといふ程丹精を盡しく介抱しました、其甲斐もあらず其年五月の二十日
 の日は喜三郎のトウ、息を引取りました、お録は歎きの申許りのございませぬ主人の丸
 屋は理由を咄し暇を買つて花屋の主人傳三郎と相談の上喜三郎の亡骸を洗馬宿の裏手の或
 る寺院へ葬むり心計りの墓標を立て吊ひました、其跡は録の氣が變になつて人さへ見る
 とメソメソ泣いてばかり居り升から話ら無いアノ女の顔貌の好いが面白くない女郎とい
 ふ評判がパツと立ち升とパンマリ客の落、丸屋の主人も折角の玉を脊負ひ込で、溜らない
 といろゝ意見をして見ますがお録は何うしても泣き止まない、持餘して居り升とこ
 ろへ參りました、旅の判人半助といふ者で此話しを聞いて、旦那私しは三十兩で賣て下
 いと曰く者を承知で買取つた山女街の半助が録を引取つて上州屋玉村の玉齋方へ賣込ま
 した、此處でお録の小玉と名を改ためて店へ出ますと大層な評判、お録の小玉も此時ハモ
 う運生しまして、斯うおツちやア何せ仕方が無い親方は骨を折らせたり人へ憎まれたり仕
 やうよりも寧ろ神妙小勤めて此身の業を果えて仕舞へふともう追ふは旅馴て客を取に骨も
 折れませぬ泥水に染込んで參つたから左様と覺悟を極めましたのでサア夫からの流行と申
 ましたら實は夥多しい事で兎角するうち安政六年から万延となり万延の一年限で文久と代
 り其三年まで足掛五年の勤め奉公、十一月廿三日の日で少し雪催一の寒い天氣風のヒュー
 ーと吹て居る、昨夜から居續けの客の金田金二郎といふ年の頃二十四五位大して學問の
 ないが少々漢籍を捻くり廻して先づ申せを半可通の方で洋行なごし、事無いたが外國の咄
 しを西洋から歸つて来た人、聞嚙つて直に黄色い聲で歐羅巴でいなどいひ出し、さがる人
 ら咄しをする時、ハ變う反身になつて刀豆の烟管を無暗小振り廻せ、四邊の脂だらけの
 近處迷惑といふ質此日、四五回目、の馴染と見なして、金「小玉さん何んぞ籠棒、寒いぢや
 ないか露西亞の先の北極地方の年中冬の様、寒い土地だ、正逆此の日本が急な寒帯へ宿替
 して、エのでも有るめへ、小玉「寒帯とか万歳だ、知らないが斯う毎日赤城嵐だ、どうもヒエ
 ー、吹いちやア私達のやうな他國者やア誠にお寒ういひけると、眞實に溜らねへヨ、と

ふるくとしながら其處へ蹲がんで桐は長火鉢の火をかッばぢる

第十四回

金 君は賢い惜しい婦人だ年は幾歳だへ、ナニ二十三だと若いねへ誰でも二十を漸之一つ越した位ぬふしきやア見ないぜ一体が奇麗で小作で取廻しが優しいうら若く見へるヨ 小玉 大増お太鼓が好いねへお前さんも斯な田舎よやア置れねへヨ 金 イヤ第一君と旅女郎などよやア無へ茶の湯といふ事を知て居るソレ先度川俣の堀越が来た時ソレ那の男は變う高尙な事の好きな男だが、君が、那りやア遠州流かへ、花がコー踊を踊ッてる様なコンナ風よ活るのは、那りよウ斯う活た時よやア實驚いたよソレよ投入どかいふ箆を直したやうな花生よ黄菊を一技ポンド投り込んだ手際をばなかくなものだ那りやア何の雜作もない様よ見えても頗る六つかしいもれたと子、ソレよサ今いッて茶の湯が是がサ又君の腕前は勝れたものだテ、コー小人島の行器の様なものを持ッて出ッて……へ、エそれか素かへ、夫れから役者繪で見る助六の鉢巻の裁落しとでもいふ様な紫の服紗を、コー、ポンドやッて其れで上をクルリと拭ッて手つきをどて實よ旨いもの子、何か又た小人島……、イへサ總ッて小

人島づくしだから可笑しい小人島は竹箆の様なもの、たしか茶筌とかはふ子、那物を茶碗の中を變な手勢で押ッて上へあげてグルリと廻してカチンと落ッて工合などハ實よ妙サ炭をついそも水をさえても道具を持たながらチャンと坐ッて又立つ襦袢き萬端實に無いよ真に君ハ此邊な處へ來て居る人で無へ本場ものだ 小玉 結城紬ぢやア有るまいし本場も場違ひも有るものか子其りやア妾も子供は時親父が稽しくッて些と計り習ッた事も有ッて升ッホンの間に合せ眞似事ばかりサ 金 イヤ君ハいづれ身柄の人の果と見ゆるがいつまも斯んな商賣をして居るれた 小玉 妾も好き好んで斯な事をやるでも無いが誰も受出して女房にして呉れる人も無しサいづれ果ハ足利あたりの機織女が横濱の茶烘を婆アが落だらうヨ 金 ソンナ詰らん事を云ッて、何も女だとして立身出世の出來ん事は無い智慧せへありやア男勝りの事業も幾らも出来るサ一体人間といふものハ天然に智慧と情合といふが有るもんを誰が目も赤い物を見れば赤く黒い物を見れば黒く悪人を見れば憎く惘然な物を見れば救ひたくあるが人情といふものど僕も君とコー馴染よなッたからハ飽までも力よなッて上げるつもりど、一體日本人ハ男女小限らず智慧が無いれよ勇氣が足りない、其りやア君歐羅巴れ

婦人などいふ者の女ごの云へ皆智慧が有て其中にも英國の女王レオリサベスもいふ婦人の廣大な智慧者も女れ身でも國王の冠を戴いて一國の政事を執ツ人だが或る時其臣下の中にも智慧者といはれるリーストル候と裁判の仕競をして智慧競べをしたといふ事と民間の女でも智慧の有る者の電信局や郵便局へ勤めて相應の給金を貰つて自分一人の亭主や子供の厄介ならせよ十分暮らして往くといふ咄したソレは何ぞや君ハソレ丈けの智慧も有り器量もあるに西洋での人間の中は齒ひせんといふ斯ん牛馬業コリヤア、失敬、旅女郎などをそるといふの惜い事ご今内はまだ日本も開けないから女郎や藝妓を受出して細君ふして大丸鬚やアロリとした着物を着せん涎を垂し居る人もあるが今も國が開けて來ると女郎あををして居る者も誰も振向いて見るもの無いやうもある夫だから女れ方でも女郎や藝妓もある人外は放逐される様も心得、大變な恥のやうと思つて死でも斯んを賤しい業ハ爲まい何をも正業を身を立て様と心掛けるやうもあるだ、と云ひながら刀豆の烟管をポントハたく

第十五回

金ソレニサ西洋でと第一娘が手堅い日本の様な不檢束な事ご無い、娘の中は情男を拵らへて逃げ隠れする杯の事は決して無い、殊も其衣装も日本の娘ツ子の様にアベノした身装は決して爲ない尤も宴會などいふ時と立派な形もぞるが平日學校などへ往之時は極粗末な体で金持の子でも貧乏人の娘でも左のみ違ふ様も見ゆるといふ事だソレを日本でと平日から紗綾縮緬の立派な形をさせて學校へ往とんだか客も往くんだか分らぬ様な体をさせソレで兩親が喜んで居るがアレは強かち娘れ罪ばうりぢやア無い兩親の心得が悪いんだ此れご其兩親が子を躰ける術を知らんからは是非もないとが始終其料見どうら家での敵へも宜しくない事計り先づ娘子供に聞かせても見せても悪い事ごを時々やらかすんどダカラ娘ツ子も自然と其風は倣つて肩揚が取れる頃には兎角色氣が附きたがる、處が外國もやア其んな事ご無い第一兩親の躰が殿しく禮義が正しく教育が十分だから西洋の娘ご十八九の妙齡小なつても色氣なソレア丸でなくつてカラ無地の温拵女サ若し又た其處女の中に不義淫奔でもして男でも拵らへて逃げ隠れでもすると世の中の人畜生同様と思つて交際ハ當人ハ一生埋木なつて世も出る瀬ハ無へから庭ハソレ女でも學問して智慧があり善惡の

事をチヤンと胸に疊んで置くから決して横外方へ心の駒を狂ひ出させる様な事無へ尤も君も斯ういふ身よなッて但誘にも苦界といふも落ちて斯んな浅猿しい商賣をやるやア何れナニカ其理由も仔細も有らう、ダが今の中だよ、足を洗って眞人間よなる、此の處だよ、と機よ掛ッてべろく、饒舌立てる金二郎の辞が一々録(小玉)の胸よヒシく、と當り、ア恥か、い妾の身の上大地震の時命を助けられ嬉しい人と思ッて居る處へ其後フト出會て段々咄しをして見ると又懐かしい人よあり小屏者の身分を聞いても切も切られず兄様を捨て、駈落しトウ、上州くだりまで流れて来て男の爲と云ひながら恥づしい旅女郎れ勤め奉公もし兄様がお聞なすッたら何の様よ惜いと思召さう残念にお思ひなさらう、情けないと思ふよッつけて胸が一ぱいに塞がりまして思はずホロリ 金「ヤア君の感じたチ、へ、泣き子、ヤ感心く其處が僕の目で睨んど並の旅女郎と違ふ處だ頼母しい、今の咄しい聞いて泣く様でなければ往かんどうも見上げたよ 小玉「金田さん面目ない同じ女よ産れても奥様よなる人もあり旅女郎よなッて居る妾の様な者もあり何たる因果の身は果かど歎いて見ても悔んで見ても、是も皆んお妾が身から出した鍔サ眞實よ思へば思ふ程ッ、我身よ愛想が盡き死で仕舞くあるヨ、金「馬鹿アいひたまへ愛想か盡さるの死ぬのトッて話らねへ其れより早く容に頼んで受出して貰ひなせへ君を受け出して女房よしやうといふ若ア幾らも有るワ 小玉「ナニサ妾の体へ受出される事も出来ねへからソレで猶々厭よあるのサ金「へ、エ其んなら約束の男でもあると云ふのか子 小玉「其んを譯ぢやア無いが自分の心得違ひうら尋常の人の處へ往く事の出来ねへ身だらうサ 金「役者か 小玉「イ、エ 金「役者あら仔細ねへ昔の河原者だとか乞食だとか云ッたは今の立派な人を教導する程に地位に居るものだ 小玉「ナニサ左うぢやア無いがどうも妾は体汚れて居るうらサ、モウ身の上此穿鑿止てお呉せ 金「其んなら聞くめへがコウ小玉さんお前ダソレ程此の商賣を厭がるなら己が好い事を教へてやらう、と金田の紙入の間うらピラとした一枚の紙よ何か版で刷つあるものを出しました

第十六回

金「小玉さん君に好い事を教へてやらうと云ふのは此れだ常陸の筑波下は神郡村といふ村が有て其處に石井文左衛門といふ大百姓が有るが何ういふ譯ぞかサ 此家よ三代續いて盲

目の女の子が出来るといふので今の文左衛門といふ人は名代に慈善者で至って慈悲深い人
 であるが斯う代々盲目の子が出来るといふのも佛道でいふ前世の宿業といふでも有らう此
 の宿業を果すよと貧乏人や難澁人を救ふのが第一だといふ處で行暮した修行者でも來ると
 此方から求めて宿を貸し又取分け盲人を憐れを替者が門へでも立つと家へ入れて立派な座
 敷へ泊て風呂も入れて其盲目の娘に脊中を流させ又之飯の給仕などをさせて専ら罪障消滅
 するやうにと心掛けたが今度また世の中の難儀な病人を救はふと思ひ付て病院を建てたい
 といふ處が幸ひ其近村の高道祖村の觀音院といふ元と相應る大寺とつたが今と荒果て無住
 同様にあつて居る此寺を病院に取立て行倒れや宿無の乞食などの松原をどよ倒れて苦しむ
 奴を引張て來て療治をしてやるといふ其院長の鳥居丹波守の抱醫者で柳原養庵といふ人で
 此りやア江戸の大醫松本 良順 先生の弟子で高名な人だ其處で社長右の石井文左衛門其
 外世話方も荒増極つて同愛社といふ名も附いたが爰に困るといふのア看病婦だ此れが田舎
 者の氣の利ない荒ッばい女ぢやア往けずト云つて江戸ッ子の無暗に前尻ばかり撫て紅白粉
 でもくッ附けたがる様な者でも困るンどうか其江戸の女を極深切な氣の利て居るといふの

を欲しい其代り三年辛抱して勤めればドンナ貧乏人でも衣類の勿論筆筒長持櫛笄まで立
 派に揃へて支度をさせて其石井が里方よあつて相應る家へ縁附るといふのでドウか其志
 しのある婦人の來て呉れろといふ此りやア其の廣告だが何ふだ君此處へ往つて看病婦に
 なつてハ小玉「オやまアさうかへ其りやアまア嬉しいマア金田さん有難い好い事を教へて
 下さつたねヘッソんあら妾ハ其の高道祖村とかへ往つて病院の看病婦小なますヨ、眞實よ
 嬉しい」と小玉ハ涙を醸して喜びました小玉「マア何しろ好い事を教へて呉れだから今
 日ハ妾がハ禮を奢らうと此れから小玉ハ酒肴を取り寄せて金田ハ馳走をいたしまを金田も
 一人の善人を拵へたと自分も快よく飲んで面白く遊んで歸りま一た、小玉は此れから主人
 の玉齋ハ決心の次第を咄しまして高道祖村の病院へ參つてどうか看病婦になりといふ
 事を云ひ出しますと主人の玉齋も殊れ外小玉ハ心入れを感心志まして素より解つて居る人
 だから其志一は愛をまして小玉の證文を悉いてやりませ小玉ハまご今まその自分の持物
 から道具類を残らず朋輩の女郎ややりま一て、お前達もいつまでも斯んを商賣をし居る
 のハ恥だから早之足を洗つて素人よおあり妾の身ふつくく覺わら有るから異見をするの

だヨと申しまして主人から賂用の金を呉れましたれどソレをも受けず故と着れ身着のまゝの汚ない姿になりまして名前も元のお録とあり人々も別れて此れから観音院の病院に参りました此院でお録のまゝ圖らぬ人よ出會まして又一條のお物語りの有りませぬ事と一息ついと又た申あげます

第十七回

引續きまゝしてお録の傳記で御坐り升、お録が若い時分よ不圖心得違ひを致しまして小屋者の喜三郎と逃げまして旅寐の難儀を致し終つ喜三郎の爲に旅女郎となり住替を致して上州玉村の玉齋かゝり足かけ四年の間勤め奉公を致して居りましたが悪い事よ染み易く次第々々旅女郎の風染みまゝしてお客よ世辞をいひ氣安めを云ふ事も出来さう々々末に無心を云ふ事まで馴れ参りますと根が發明な性質で御坐の升から前申上げと買ひ馴染のお客にいらした事から不圖改心致しまして玉齋も右れ話をすると此玉齋も勇氣な主人を大きまる録の心よ感心致してまゝ前借の金も年期も残つて居るがスツパリ証文を巻てやらうと云ふ深切な言葉を録も喜びまして ちく「まことありかた 誠よ有難う存じまする私が眞人間よ成なす

れば必ず旦那様へ此御恩返しを致しますすモウさうなれば妾の身も何一つ入ら無い物まで
ざい升から朋輩衆も妾の着物や手道具や櫛笄を分けそやり度いと存じますといふれでは
から銘々小自分の物を分けて遣りますす ろく」アノさうか前さんも永くこんな勤めをし
ない様も能い容も受出さまで早之素人よ成りよ私ハモウ病院の看病女も成る位どか
ら前さんも能く考へて涉覽なさいと心切も朋輩小意見をいひまして自分ハ是から粗糲
姿の結び髪、黄掲の小櫛で直も常陸筑波下の高道祖村もある同愛社へ参り社長願ひませ
ると社長も大感心致して 長」ソソなら三ヶ年の間 此病院も勤めて深切に病人の看護を
するか ろく」ハイ私ハ心願がござい升から何の様も苦んで病人の爲になる様に致し升
夫あらといふので是から先づお録ハ同愛社の看病女もなりました處が録ハ通常の者と
違ひ、向うか人交りをしてい今までの穢らさし心洗って眞人間になりたいと全く罪滅
ばしの爲で有るうら見せ知らずの他人を親身の兄弟の様も大切に致しませので院長初め大
小感心致して居りませ、儲其年も暮れて翌年相なり元治元年の三月が閏で改元あつて慶
應元年と相成升其の年五月は涉案内は通り水戸の浪上田丸稻之右衛門が筑波山と太平山

楯籠たてこもッて近國きんこくの諸藩しよはんへ軍資金ぐんしんきんを借用しやくじゆうをたいとか或あるひの武器ぶきを借受かかひをたいといふ強談かうだんでござい
いま一いって大おほ諸藩しよはんも心配しんぱい致いたしましたが其頃そのころはまだ徳川家とくがわの勢いきほひが盛さかんで御坐ござい升しやうからそ
れを憚はやる處ところから致いたして此この筑波つくは勢せいは同盟どうめいをる者ものも少すくないが中なかへ浪人らうじん博徒はくた等らが何なにか近傍きんぱうの
豪家かうか或あるひの寺院じやういんなどへ押おし込み軍資金ぐんしんきんと云いッて若干そくばくの金子きんしを強談かうだん致いたます是これは今更いまさら申まうさん
でも皆様みなさま御案内ごあんないで御坐ござい升しやうから委あづかしく申上まうさせぬが實じつは彼の近傍きんぱうの者もの勿論もちろん近國きんこくの者もの
一通りひとはならぬ心配しんぱいを致いたしました事ことが此この事ことが水戸みづとへ聞きにますると水戸みづとの方かたで市川いちがわ三左衛門さんざゑもん
朝比奈あさひな彌太郎やたろうが一手ひとてを以もつて追捕つうはの儀ぎを徳川將軍とくがわしやうぐんへ訴うへよりました、すると徳川家とくがわから
近國きんこくの諸大名しよだいめいへ追捕つうはの命めいを下くだしましたから是これから彼の戦争せんそうは仕度しどは相あひります是これが彼の時
分の戦争せんそうの初めはじで私共わたくしどもは東京とうきやうに居ゐて其話そのはなを聞きいても餘あまり宜よろひ心持こころもちの致いたしませんとござい
ました愈いよ永見貞之丞ながみていのじやう、小出順之助こいでじゆんのすけの兩人りやうにんが監察使かんさつしで三兵隊へいたいを向むけるといふ大騒動おほさわうどうは
相成あひなりますると田丸稻之右衛門たまるいねのゑもんの筑波つくはと太平山たいへいざんと両山りやうざんは分わかれて居ゐて其中そのなかを断たれて通路つうろが無な
さッて不都合ふつがよといふので忽たちまち五月ごがつの朔日つひちは大平たいへいを引拂ひきほッて六月六日ごくとくろくにちは朽木くちぎの戸田公とだこうの陣屋ぢんや
へ押入おしこり警備けいゑいなして火ひをうけて焼拂やほらうれより残のこらず筑波山つくはざんは楯籠たてこもります此この田丸稻之右衛門たまるいねのゑもん

門といふ人を初めとして本陣ふり紫絹より白く葵の紋を染出したる幕を張って浪士の面々の諸方へ手配りを致しました田丸稻之右衛門千種太郎川崎忠兵衛竹内万太郎藤田小四郎大久保七郎左衛門高橋上總之助長谷川庄助水田鎌八山田一郎須藤健之進朝倉與七郎北畠軍七川俣茂七郎小林幸七飯田軍藏田中源藏正木將監大幡外記根本新平などいふ皆名のある人たちが夫々手配を定めまして皆筑波山の峠と其絶所へには柵を打ちこれへ丸の内へ水といふ字を染出したる幕張りを致して番兵を置いて出入を改めする、なれども其軍律の厳かでございまして兵士が夜中無沙汰に關門を出入する事を入釜しく云ひ中に狼藉をして若い女などを連れて来る様な乱暴狼藉を致す士卒の忽ち切て捨るといふので彼の邊の百姓でも商人でも皆な老人子供を他へ逃がすといふ大騒動も成たし付きまして十度高道祝村に病院のある幸ひの事だから若し兵士が怪我をした時に此の病院で療治をせるといふので筑波の勢が大寶八幡まで一手の兵を繰出したといふので官軍の方でも其近傍へ押へて兵を置き是へ營所を構へましたから院長榊原養庵先生と佐宮元秀といふ弟子が參つて鐵砲の爲に傷を受けたもの、療治を致して居り升夫ゆゑ病院への病人は少なうござい升が

醫者もまだ出拂ッて居りません恰も七月六日の事で筑波の賊兵が斥候も来升と之も向ッて
 鐵砲を打ち掛る者が有て戦争もある斯様な畏い中でのござい升が病人が何か食べたいと云
 ふから一生物命でる録が洞下村へ其買物に参り升と鉦波勢の者も若い者でござい升からコ
 レ何處へ往くれとなどいからかい升「ろく」ハイ妾の病院の看病女でござい升が病人の頼
 みで洞下村まで買物も参り升「兵」ウンさうか歸りに寄れよ、ナンブといふ助兵衛の兵士が
 有て色々からかう中を彼方此方と潜り潜ッて買物をして来ますと丁度日のくまの事で
 寺子村の松原も掛りまをと松の根ごとよ女が一人伏してウン〜と身をもがひて苦しさを
 よ呻吟て居りました

第十八回

元來お録の深切でござい升から「ろく」モシあまた何うか被成ましたか何うか被成ましたら
 へ「女」ハイ有難う存じます瘰癧が起りました「ろく」お瘰癧ですと、嘸マアお困でございませ
 うソウシテ斯な處へ倒れて入ッしやると蚊が食べたり毒虫が螫したりしていけません、ソ
 ウシテ蛇も出ますし嘸マア汚難儀でございませう子「女」ハイ有難う存じますやう子家の

醫者もまた出拂ッて居りません恰も七月六日の事で筑波の賊兵が斥候よ來升と之に向ッて
 鐵砲を打ち掛る者が有て戦争よある斯様な畏い中でのござい升が病人が何か食べたいと云
 ふから一生物命でお録が洞下村へ其買物に參り升と鉦波勢の者も若い者でござい升からコ
 レ何處へ往くれとなどいからかい升「ろく」ハイ妾の病院の看病女でござい升が病人の頼
 みで洞下村まで買物よ參り升「兵」ウンさうか歸りに寄れよ、ナンゾといふ助兵衛の兵士が
 有て色々からかう中を彼方此方と潜り潜ッて買物をして來ますと丁度日のくまの事で
 寺子村の松原よ掛りませと松の根ごとよ女が一人伏してウンと身をもちひて苦しさを
 よ呻吟て居りました

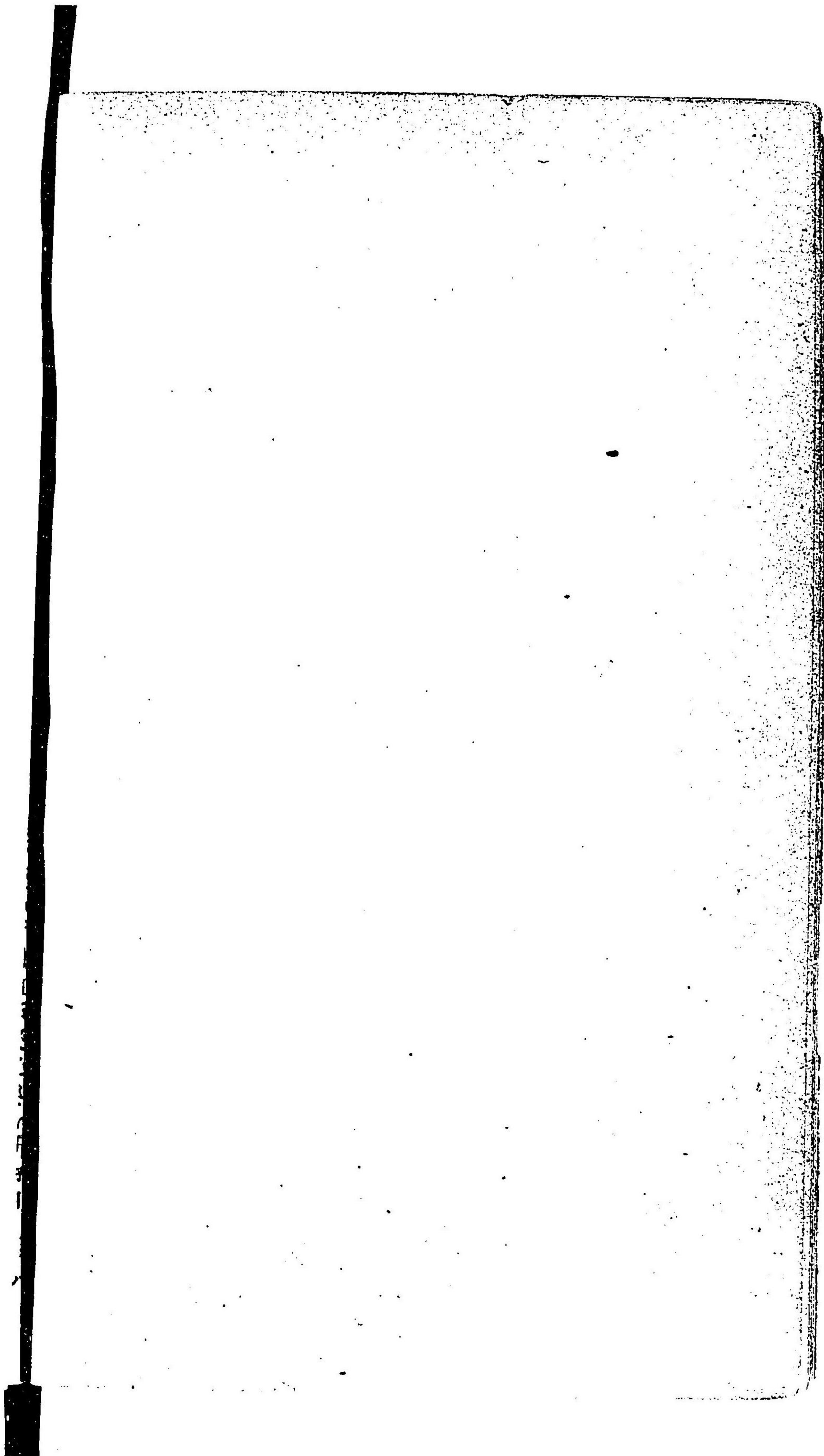
第十八回

元來お録の深切でござい升から「ろく」モシあなた何うか被成ましたか何うか被成ましたら
 へ「女」ハイ有難う存じます瘡が起りました「ろく」お瘡氣ですと、嘸マアお困でございませ
 うソウシテ斯な處へ倒れて入ッしやると蚊が食べたり毒虫が螫したりしていけません、ソ
 ウシテ蛇も出ますし嘸マア御難儀でございませうチー「女」ハイ有難う存じますやうが家の

有る處まで参りたうござい升が戦争の中を行って畏れなくと思ふので段々胸が支へて
来まし持病の癪に成ましたどうぞお構ひなく 女「貴嬢お構ひなくと云つても一人
の仕方が有ませんお連れ無いでござい升か 女「ハイ 女「一人で何處へお出なさる
の 女「相州の方へ 女「マア貴嬢遠いぢやア有ませんか長い旅を抱えて、さうしてマア立
派なお身形で貴嬢一人をいなか行われや任せせんヨ、妾が通つても兵士が色々な事
を中てからかいまそから貴嬢がたが入ッしやッての尙の事をござい升直き此の五六町先
病院がございまして妾は其處に居り升、ソレの同愛社と申しまして施しの薬を呉れ升ヨま
と診察の立派な先生が有て子見て下さい升ヨ 飯令見せ知らずの者も難儀の病人が有た
ら連れて来ても宜いとかねへ云ひ渡されて居り升から貴嬢一緒にお出なさいませヨ 女「ハ
イ誠にお難う存じますお何分にも切當うございまして立つ事も出来ませんから 女「立つ
事は出来あいで貴嬢我慢して妾もつらまって入ッしやませ 女「有難う存じます貴嬢
もつらまる事も出来ません 女「マアお困りでございませう何うかして推して上げませ
るか 女「有難う存じます、どうぞ此の左りの脇の下に下筋を 女「下筋といッて何處

とが知まません 女「此處を ろく」此處をござい升か 女「ア、有難う存じます、此處を斯う
 といひながら身体を捻りまして松れ根がたへ胸をおツ附ける ろく」それをも冷えますヨ、
 斯う被成まり、と手を取て抱く機みよ向ふの方をポンくくくくくく」と續いて聞か
 る砲聲に恟りして ろく「サア妻よおぶさって、と驚いたのづみよ彼の娘を背負まえたが其
 側よ小さな包が有るから之を抱いて漂流くまながら唯だ畏いば一ばいで病院まで来まし
 たが醫者の戦地へ参って一人も居りませんから ろく」貴嬢何か持合せのお薬の有ません
 か……女「有ません ろく」左様なら温まる様お湯でも飲つて淨遊ばせ之が善らう、と蕎
 麥湯や葛湯を飲せて種々手當を致した處へ佐宮元秀先生が歸つて診察をすゑと全く瘴氣を
 有ませからこれを飲めば治りませといふので薬を下さいましたから早速こまを飲ませませ
 と處一に看病二も薬といふ壁の通り眞實なる録が介抱致しましたら僅か三日ばかりで大
 よ病が治つて参りました恰ど七月八日の蕭々雨が降つて参りました此頃の村雨の折くが
 いる時候で殊に山の中をござい升からあたりハシンと致して外の病人もタント居りません
 小使も陣中で醫者の手傳ひを致して居つて誠は病院ハ静かでございます升





其時お録の旅の女を病室へ連れて参りまして「ろく」アノーお嬢さま貴嬢子一妾の氣が付き
 ませんでしたが其召物の膝と裾小尻が附いて居るまをから一寸摘み洗ひをしてお上げ申
 せうツイ妾が急がまいものだから氣が付きませんでした貴嬢お氣味がお悪うございませうが
 妾の此れと着替へて人ツしやいまま是れアノ妾の着物でござい升、是の院長さまから揃ひで
 貰ったのでござい升が洗濯を致しましたから穢ない事の有ません、サア貴嬢是れをお召遊
 ばせ「女」有難う存じませ貴嬢のお蔭で追々妾の全快になりますと存じて夫れを樂み致
 して居ります「ろく」マア此戦争の中で危険うござい申すうら寛くり癒ッてから入ッしやい
 まー此の戦争も長い事ないと申すもござい升か「マア」寛くして入ッしやい此節の
 戦争の鉄砲でござい升から危険う渉座い升よポン「〜」と云ふ音を聞くと妾なぞの
 身が慄と致しませが多分公方様の方が勝になつて戦争も治まると云つてお百姓衆が悦ん
 で居り升から「マア」落附て入ッしやいまし、サア此れをお着換へ遊ませ帯も仕様が有ません
 が此の着物も薩摩の紺飛白といふと能く物の様でござい升が是れは偽物で渉座い升院長様

から看病女へ揃へて拵へて下すたので、此帯の細縹子と細太織の腹合せで氣が利いて
 居る様で有りませが物が悪いので仕方が有ませんがマア此れを召なさいまし 女「左様な
 らる言葉は甘へまして ろく」 傍遠遊はえてはいけません摘み洗ひを致しまして、と是か
 ら娘の着て居る白糸で縫紋をした縮緬の單衣物を脱がせて自分の着物を着せて置いて摘み
 洗ひを致しましたが天氣が悪くして干き事が出来ませんから病室の内よ衣紋竿に掛け置
 ました ろく」 此處は梨子の貰ったのござい升がる醫者様は仰しやるよは梨子の食の後で
 食べる消化が宜いとや事でござい升貴嬢食をませあら剥て上げませう貴嬢が食り悪いと
 いけませんから大きいのハ叉を入れて上げませう、と梨子を剥いて細くにして娘の傍へ持
 て来ませう ろく」 サア貴嬢も食り遊ばせ 女「ハイ有難う ろく」 ナト擦って上げませうか 女
 「ハイ有難う、と彼の娘がる録の顔をシートと見て居りなれど如何にも深切な優しい女
 中で顔色容貌舉動物のいひ様も上品で何うして斯んな優しい人が病院の看病女をきて居
 るかと餘念もなく録の事を事見惚て居りました

啓「お前さん 鎌ハイ 啓」貴婦のドウモ言葉の様子で元は江戸でござい升子一鎌ハ
イ江戸でござい升よ貴嬢も言葉の汚様子でハナンデござい升か矢張江戸の様と思られる
と考へ升が聞かせば慥う水戸の方から入ッしやツたの 啓「ハイ 妾ハ笠間から参りました
のでござい升本當は貴婦のやうな親切な方ハ見た事も御座いません妾ハ一人の姉がござい
ました丁度三年前は失なりました其姉が妾の塩梅の悪い時ハ介抱をして呉れましたが親
身の兄弟でも迎も貴婦の様に優一く看病ハ出来ませんがマア貴婦ハどう云ふ方かと存
てソウシテ貴婦ハ失なつた姉ハ能く似て人ッしやツて自分がいふと訝しうございませが妾
の姉ハ美貌も評判の女でございませが實によく似て居らッしやいますよさうしと人柄
といひ汚嬢貌といひ物のいひ様といひ裾捌きと中ドウモ汚様子を見ると元ハ立派な嬢様
なごさいませしやうが汚運が悪くツて斯いふ處へ這入て看病をなさる様な身ハ成りなまッ
たかと存じまして貴婦のお身の上を子一妾ハ察し申すノ ちく「イ、エ 妾ハ元から身分
も何も有りハ致しません誠ハ賤しい身の上で人様とお交際も出来せんヤクザ者でござい
ます 啓「イエー 何して貴婦の様ハ何かを持ちたり御道具の持ち運びもチヨイト持ッた形

ぞら立ちよな御様子の中々教へらんで出来るものぞございませぬ妻の元ナニデござい
 い升江戸の麻布の谷町で高山元貞と申まき有馬れお抱えの醫者の娘でござい升が少し譯が
 有ま一親父が江戸から笠間の方へ引込む時丁度妻の六才の時でございした笠間へ
 參つて程なく母も失ありま三年前姉が失なりまして誠心細い處へこの五月廿六日
 よ又親父が失ありま一て只今での身寄兄弟も無い身でござい升が貴婦の御兄弟が有り升か
 録「ハイ妾の兄が有りましたけれど是も七年計りサツパリ音信を致しませぬから只今で
 の死だか生て居り升か分りませんで妾も身寄兄弟も無い心細い身の上でござい升 啓「左様
 でござい升か妾の貴婦は御深切の御恩返の仕様が有ませんからドウカ妾が身が立たら御
 恩返しも致しませうが貴婦も御兄弟が無ければドウカ未始終兄弟なつてお互ひも力ふな
 り合ふ様を事仕たいと存じますが貴婦の厭もございませうが妾と兄弟も成て下さる様
 に、さうすれば妾の身の上を明しますから貴婦の御身の上も明一遊を下さりませし 録
 ナニ妾の何も申事の出事無い身でございませうから 啓「うんな事を仰しやらずよ、妾の子
 伯母と申者の相州足柄郡の山田村に居りますので妾の親父が失なると升る臨終の前よ今日が
 死んでの手前他身寄便りもなし迎も此處小居られないから後で困らぬ様に金を遣り
 さいが多分の持合せも無いが此家を賣拂へば二百金位よ成らうからソレで葬送を出した
 上で此の元貞の墓碑を立て跡の餘りを路川にし相州の伯母の處へ便つて往くが宜い手
 前の伯母の相州足柄郡山田村に曾根惣右衛門といふ者の家内で此の惣右衛門といふもの
 音響いと大盡で金と齒が生へるといふ位其家へ伯母が縁付てから最早二十八年も成るが
 何うてもこれまで子が出来ない處が其連合が三年前失なつてから他も相續をすゑ者が
 無から二人の娘のうちを何方か一人よこせといふ手紙は度たび來たが其うち姉が死んでか
 ら終に夫なをして返事も遣なかつたがモウ今での養子をしたかも知れぬが現在其手紙を
 証據も持て往けば養子が極らなければ必ず娘もあられるに相違ないサウなれば何一つ不自
 由の無いと利かない身体で臨終の際手紙を書いて妾も呉れま一た是が伯母への証據の文
 をござい升是も有まそのの備前盛景と申短刀妾の存じませんが此の合口を持て往けば其
 方の顔の知るまいが此れを出して伯母も逢て私の遺言を云へば飯令娘よのなれんまでも相
 當の處へ縁付て貰へるといふ遺言を残して失なりまし、と云ひさしてホロリと涙を流し

死んでの手前他身寄便りもなし迎も此處小居られないから後で困らぬ様に金を遣り
 さいが多分の持合せも無いが此家を賣拂へば二百金位よ成らうからソレで葬送を出した
 上で此の元貞の墓碑を立て跡の餘りを路川にし相州の伯母の處へ便つて往くが宜い手
 前の伯母の相州足柄郡山田村に曾根惣右衛門といふ者の家内で此の惣右衛門といふもの
 音響いと大盡で金と齒が生へるといふ位其家へ伯母が縁付てから最早二十八年も成るが
 何うてもこれまで子が出来ない處が其連合が三年前失なつてから他も相續をすゑ者が
 無から二人の娘のうちを何方か一人よこせといふ手紙は度たび來たが其うち姉が死んでか
 ら終に夫なをして返事も遣なかつたがモウ今での養子をしたかも知れぬが現在其手紙を
 証據も持て往けば養子が極らなければ必ず娘もあられるに相違ないサウなれば何一つ不自
 由の無いと利かない身体で臨終の際手紙を書いて妾も呉れま一た是が伯母への証據の文
 をござい升是も有まそのの備前盛景と申短刀妾の存じませんが此の合口を持て往けば其
 方の顔の知るまいが此れを出して伯母も逢て私の遺言を云へば飯令娘よのなれんまでも相
 當の處へ縁付て貰へるといふ遺言を残して失なりまし、と云ひさしてホロリと涙を流し

第二十一回

桂の涙を拭ひまして 桂「それから妾の遺言の通り親父の葬式を出し墓碑を立てまゝて
 相州へ参りまゐる道でコンナ戦争に逢ひまじつ實は山へ逃げたり島へ駆け込んだり種々心
 配一とコンナ病氣が起りまたそれは親父の看病疲れで落膽して病氣が起りましたのもご
 さいませうが若し貴婦が無いと妾は知らずに戦争に逢つて殺されるか那處で倒れた切りに
 成る處ナンともお禮の中様がございせんから妾が伯母の處へ参りまして身が立ちますれ
 ば貴婦をコンナ處に置きせん直小引取てお姉エさんよして涉恩返しを致しますからド
 カ貴婦のお身の上をサア、妾が是まで身の上を打明けましたからサア、貴婦 録「ハイ、ど
 の云つたがお録の、妾の小屋者喜三郎と密通をし遂に旅女郎も成て元玉村の玉齋方で小
 玉といふ悪商賣をして居つた者との云ひかねて胸のうちで苦しみましたして思ひきホロリ
 と涙を落します 桂「貴婦ナンでお泣なされるの 録「ハイ妾の實は辛い事ございませから桂
 妾の一旦姉妹よなるると云ましたから何處までも其の言を反古に致しませぬ姉妹よ成て見

れば愛い事も辛い事も共よしおければ成せんからドウ云ふ事だか打明けて下さいよ妾の
 身は適のぬ事あら伯母を頼んで其辛い事の無い様致しませう、サア其辛い事を包まずよ
 仰しやう下さいヨ 録「實は有難うござい升がお嬢さまは貴嬢勿体ない事を仰しやいます妾
 の身の上をお聞きなすつての困り升、打明けて妾の身の上をこれ／＼とやましたらオー飛
 んだ事だソレでの側に置くも厭やだと云つてサアとお逃げなされる様な身の上、此病院で看
 病婦をして居ればこそ貴嬢の様なお身分のお嬢様の側に坐つて居られる譯でございませ
 實は申すに申されぬ程の辛い悲しい事ございませが皆な是も妾の心得違ひから親や兄に
 不孝をした罰だと思へて辛い事も辛い事有ませんが貴嬢が身の上を明かせと仰しやると妾
 の實は辛くつて貴嬢のお側に居る事も出来ない譯でござい升から 桂「アラマア其辛い事を
 どういふ譯か仰えやうても宜いぢやア有りませんか、エー、貴婦、妾が斯うやう親父の
 手紙も証據のし首も戒名も涉覽に入れませす是通り伯翁祖庭居士といふ戒名まで持て参る位
 でござい升決して虚偽の云ひませんからどうか貴婦の身の上を仰しやう下さいませしそ
 れども妾の様な者と姉妹よなるのの涉意は入らないのござい升か妾がこれ程に涉恩返し

の爲めに身の上を明かすは仰しやッて下さらないの餘りさびやア有ませんか姉妹よある
 のゝ厭でござい升か何か外は約束でも有て入ッまやる譯か夫だッて姉妹よなるよ何も仔
 細と無で有ませんか、ヨ、貴婦明かして下さらんのゝ恨みさございませすの、と手
 を延してゐ録の膝を頻りよコト動揺りませから 録「マア、そんな事を仰しやッてハ
 往けません 桂、ナゼ、貴婦仰しやらない妾ハ桂と申す貴婦ハさしかる録さんと仰しやッ
 てチー 録「ハイ妾ハ録と申す貴婦が折角多親切ハ仰しやッて下さるのよ中さんのも濟ま
 せんから身の上を明しませ、けれども貴婦決して他人ハ仰しやッて下さい升なよ 桂「ハ
 イ妾ハ決して云ひません 録「ソナラ身の上を明して話話を致しませう、と録ハ桂
 の深切に隠し食せぬ事も出事を、實ハ妾ハこれ、此れ、コウ云ふ譯が有て喜三郎とい
 ふ者と家出をしまして最初ハ喜三郎ハ大地震の時危ふい處を助けられた恩義もあり眞實な
 男と存じまして小屋者と知らせよ不義淫奔を致し、たれが身ハ誤り終ハ旅で喜三郎小
 別れて旅女郎を致して居りました處不圖人ハ聞た事が有て我身ながら不義の悪業を恥じ夫
 からこれ病院へ參りまして看病を致すのも責てハことまでの罪滅ばしを致し積りて此通と

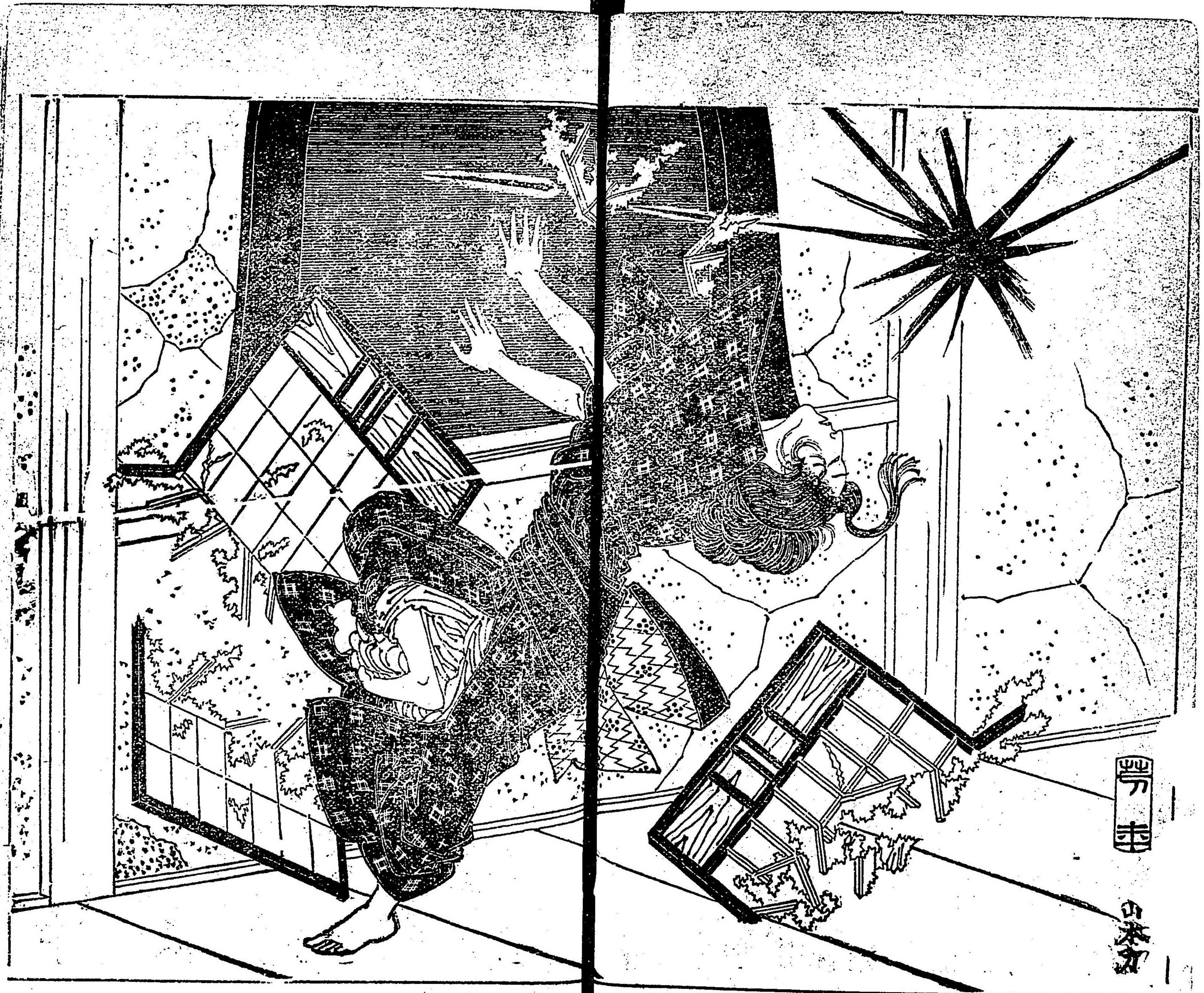
看病婦をして居りませる、と始め終りを細かよ桂ハ話ま升るとか桂ハ暫く考へて居りま
 した 桂「マア貴婦、實に貴婦ハ感心な方本當にマア喫驚致しましたチエ、どうも左
 ハ出來さい事をござい升ナンも賤しい事も穢らハない事も無いぢやア有ませんか元ハ御
 用達の嬢様で全ク親切ハ引うされて共者が小屋者と知らず親切を盡くし合て遂にさう
 いふことよ成させッ今でハ悪いと思ッてどういふ辛い勤めをなさるのハなかく外の
 人ハ出來ない事をござい升モ一打明けて懺悔をなすッたらナンも罪な事も賤しい事も
 有りません妾どもハ分りませんけれども何んか方でも心の穢れた人なら決して高位の身
 分れある方でも賤しんを側へも宜らぬ様もしろ飯令身分ハどうでも心の清ららる人ならば
 慕ッて近づくもれといふ事を豫て親父から聞て居りました貴婦ハ賤しいと仰しやッても妾
 ハ決して賤しいと思ひませんコト明かして下されハ猶更の事早く足を洗ッてくだされば
 何處迄も姉妹よなり升貴婦姉妹よなッて下さるか 録「ハイ、ハイ、お嬢様有難う、誠有難
 うござい升、妾の身の上を聞なすッて愛想もつかさず姉妹よならうと仰まやッて下され
 ば飯令姉妹よハ成らせとも其心ばかりで澤山でござい升誠有難う存ませす 桂「有難い

のちんのと仰えやッての却ッて妾が困り升、と話しをして居る處へ表からバラ〜と
駈け込んで来ましもの、病院の小使でござい升

第廿二回

表らバラ〜駈込んで參ッた病院の小使の門口から大聲を上げまして 小使「サア〜
〜看病の女共も外へ出ちやアならんよ今小貝川の向ふから打出して高道祖で始ッたから鉄
砲や大砲の流丸が来るかも知れぬへ病人を能く氣を附け外へ出しちやアならんよ少し快
い病人の外へ出る事があるが流丸で怪我をしちやアならんから氣を附らる此處迄のり込
んで来まいけれども血だらけな兵士や何か、来て病人の氣を騒がして往けぬ氣を附
けろ宜か己の直ま行くら皆な氣を附ける宜か病人を能く氣を附ける〜と云ッ放して又
バラ〜〜と駈け出して往て仕舞ました 録「マア厭ぢやアございませんか又戦
争が始ッたノ眞實マアポン〜鉄砲の音がきると氣が氣じやア有ません外の病人が驚き
ませうから一寸と……アラ鉄砲の音が聞えませ貴嬢お心を落附けて入ッしやいよ又決心配
なされるとブリ返しますうら落附いて人ッしやいよ、とる桂の病室を飛んで出て外の病室よ

居る病人へ右の事を知らせよ參ります、跡は残ッたお桂の飛だ處へ通り合せたがドウカ早
く鎮まれば宜いがもえや表へ兵士でも来やアしないかと怖々窓の戸を明けと見ると元此病
院の寺でござい升から瓦燈口が有て其外は格子がはまつて在る其格子の外の方を一寸とさ
し覗き升る突端は何いふ外丸で有たり大砲がドーンと一つ彼の格子を打破ッて坐敷の壁を
打貫いてツーン、プル〜と夥多しに震動でございまして其の大砲の丸は丁度彼の
お桂の頭をかすッて行きなまたから未だ病上りの事でのあましウーンと悶絶〜虚空を掴
み齒を食切り仰のけ様ドーンと倒れました此丸の響きよ病人を始め看 病女も一同仰天
いたして皆な其場へ俯伏して仕舞ました暫く立て不圖お録が氣が附きまして 録「ア、あの
お桂さんといふお嬢さんの嘸驚いた事であらう何でも今の大砲丸の表の方から這入た様
だがお桂さん何ういふ事よなッたら知らん、と心配いたしてお桂の病室よ来てからり明
けて見ると齒を食切り虚空を掴んで倒れて居り升るので吃驚いたして 録「お嬢さん〜し
かりおしなさいヨ〜お嬢さん、と耳よ口を寄せて一生懸命ふ呼びましたお中々お桂
は氣のつく様な容子の有りません醫者をお思へども皆な出張して生憎誰も居りませんから



山本

山本

先側は有た水を口よ入れまして其處等あさり何か薬の無いかと彼方此方を探しても別り
 ませんから種々とやッて見たら水も通らぬ様子、總身の冷え通りまして些しも温氣のござ
 いません 録「ア、ア、妾の來やうが遅かッこ小因るお嬢様の此限よ成りなざるのう命數
 の尽るといふ仕方の無いもので、能く先生もさう仰えやるが幾ら療治をしても病氣の治
 すが壽命の延す事が出来無いと仰じやる、ア、人間の果敢ないもの併し何う薬が有りさう
 なもの此方にお醫者様のお嬢様だといふ事だらう何か時へが有るうも知れぬ、と側は有り
 ました小包を開いて見ますると先程お桂の話に聞きました備前盛景の匕首ソレから親父か
 臨終の際に書たといふ伯母への書状と戒名とかが何にも薬の見えませぬ 録「お嬢様が此
 證據の書附や短刀を持って入ッしやれば相州の伯母さん處へ往て立派なる嬢さまよ成られ
 るれだドウモ金も齒が生ねるといふ程の大盡の家をお繼ぎなさる方でも運が悪ければ此病
 院の病室の汚なれで此切りに成りなさるが、ダガお嬢様が死と云ッても相州の伯母
 さんへ存じあるまじし此丈の證據は無駄なッて仕舞ふとハア、お氣の毒を事だ、と思
 ッて不圖お桂の死骸を見ました

第廿三回

お録は證據の品々を手よ持ちながら不圖お桂の死骸に目が附くと自分が前よ貸しました薩
 摩擬ひの紺飛白の單衣よ綿繻子と紫太織の腹合せの帯をけたなりは倒れて居るフト向ふを
 見ると先刻摘み洗ひをしたなりふ成て居りまするお桂の着た縮緬よ白糸の縫紋をいた單
 衣と其側は帯が掛けてありませず此れを見ると不圖此お録は悪念が發りまして 録「此お桂さ
 んは衣類を妾が着て此の證據の短刀や手紙を持って相州山田村の伯母さんの處へ行ッて妾が
 高山元貞の娘だと云ッて往けば六歳の時別れた切りで向ふも顔を能く知らぬといふから
 ヨモ虚偽といふ思召をまい先刻の話の容子で此お桂さんの姉さんに妾がよく似て居ると云
 ひました事も有るうら年ハ少し違ッても何處までも妾が此お嬢さんの積りになッて相州へ往
 ヲて曾根の娘よ成らう首尾よく成りおふせて仕舞へバ今迄の悪名も消え人中へ出て人交際
 の出来る身の上妾の衣類を着て此處よ此娘が倒れて居れば院長さんでも妾の顔を碌にも知
 らず又た死骸の相の變るものといふし殊よ此衣類のお揃ひで間違ふと往けなれど云ふので
 裏襟よ白の巾をつれて録と名が書いて有るゑ夫是を看病女の録が死んで居ると云か誰も思

ふまに妻が高山元貞の娘を桂と以つて相州の山田村へ往つて曾根の娘に成ても誰知る者も有まは此リヤア此處で看病女をえて苦しんだる蔭を神佛のお助け天から授かる証據物、とフラ／＼と録の心が變りましと實人の量見はど變り易い恐しものはございませぬ録の速かよ其處に掛つて居つと縞縮緬の單衣を着て帯を直して側に有る証據ものゝ小包を抱へまして人を見附られて成らんとはふので直に草履ばきで病院を抜出しまして、此處から高道祝へ出やうとする小貝の方の戦争を以ふから周章で寺子原を越えて北條へ出やうと云ふのを北條へ参ると此處に柵を打つと關門が出来居りまして劔附鉄砲を網代に組んで兵士が箭を焚て居り升る、處へ來ると番兵が「兵」何者だア、と聲を掛ける、聲を掛けられて録のハット驚きましたが大ッ呑込んで「録」空問から参つた者でござい升高山元貞と申す醫者の娘でござい升が此五月二十六日親父が亡なり外は身寄もございませぬので一人の伯母が相州の山田村の曾根總右衛門と申す者の方へ縁附いて居り升から其伯母を尋ねて参る者を決して胡亂な廻し者でございませぬ此處に儲を証據も持て居り升からモシ胡亂と思召きたら見せ申す全く妻の高山と申す醫者の娘でござい升とぞお

通まなきて下さいましといふのを聞くと兼て桂から聞て居りましてからステ／＼と前後が合ひませ番兵の箭の光りも能く／＼見ると稀なる別嬪でございすから「甲」ドウいふものだナ「乙」サウさ何も仔細あるまい敵の間者でも無いやうだ「丙」宜からう通れ、と兵士の中にも少しの助平根性の人も居り升から「兵」サッサと通れ、といひ升ので「録」有難う存をます、と通つ掛ると傍の幕をクルリと上へ上げなえて覗いた人がツカ／＼と録の側へ來ました、唯見ると脊の高い眼中の鋭い立派な武士、萌黄緞子の義經袴は白羅紗の陣羽織を着まして白檀磨の脛當銀釘打つる鉢巻を締め大身の鎧を片手小提げましたる天晴れ此手の隊長とも見える人が「士」コリヤ暫く／＼暫くお待ちなさい「録」ハイ、折角通らうと思ふ處へ暫く待とといひれたから脛に傷持つ者の笹原を通り悪いといふ處でお録の思はずハット後ろへ下りしました

第廿四回

「士」お前の高山元貞殿の娘か「録」ハイ、妻の高山元貞殿の娘で桂と申す者で「士」ソレでハ水戸の上町に居て夫ら笠間へ御出な成と元江戶麻布の谷町に御出の高山元貞殿の娘か

かへ録「左様でございます」ソレハ、手前の大幡外記で暫く貴嬢のお幼少の時分は目
 掛つたがサツパリお見忘れ申した承へまを御尊父の御死去かへ……、其れハ、御壯健
 有方で有たが嘸御愁傷で、手前仔細有て此處に居ります上町よお出の時よ種々御尊
 父に御懇命を蒙りました何うもお身成長くおなりで中々知れませんが……
 ソレに往けませんか一人の危ないから駕籠をいひ附けて番兵を附けて上げませうマア
 御飯を上ッて入ッしやい斯ういふ處で何も無いが只空腹塞げ丈の事で、といふのでお録
 の幸ひな事で駕籠を誂らへて貰ひ其上隊長の命令で番兵が兩人附添ひまして途中を送ッて
 呉れまじとから先づ無難に土浦まで参りまして夫から江戸へ着致します丁度七年振で古郷
 へ参りましたから神田に容子の向で有るか一寸と寄て見たいと思ひまえたが何分足が向
 けられませんか直ぐに築地の方から芝へ出て是から段々東海道を参りましたが其頃の
 事でまだ車といふものもなし道中不便の時節でございます漸くに泊り、を重ねて相州足
 柄上郡へ乗り込を山田村へ参つて曾根惣右衛門の宅へ行つて伯母へ面會を致し親父の死
 去の事な少細かにお桂に聞た道と話しまして証據の手紙や短刀戒名を差出ししますると伯母

の大悦びでございまして 伯「どうもア能く尋ねて来てお呉れた子エ兄さんがお死去の事ハ
 少しも知らなかつたが實に外よハ兄弟もなし一人お兄さんが死なつてハ力が落るがソレで
 もお前が来たのハ大きき力を得又た斯んな嬉しい事ハ無い妾も此處へ来て二十八年の間
 うしても子供が出来ないで旦那が死去とから丁度三年田地畑も澤山で妾一人では勘定も
 出来ないうやうな譯だから小前のおれを呼んぞり作番頭なども有から夫よいひ附けて仕たが
 今お前が来たのハ子實を儲けたやうで此文の資産を赤の他人に譲るのも厭だと思つて居た
 が斯うやつてお前が来ればモウ安心三年跡に死なつた惣右衛門さまも草葉に蔭で嘸悦ませ
 う此村内丈ハ一寸廣めをしてソウして郡奉行へ届けをすれと宜い一寸見なよ庭ハコレ、
 だよ此藏の酒を造る藏此の醬油藏だよ此庭に一枚石ハ八疊敷も有てこれを先代が曾我山か
 ら曳た時よハ二千人も掛つて山から下しと石、ソレから湯治に往けと千両づゝも入用掛
 り誠よ贅澤好きで有たが旦那が早く死なつたのもお酒や肴が過ぎた所爲サ妾ハ冥利を考へ
 てそんな贅澤ハ仕せんマアいまお前が来て呉れば誠よ妾も安心だよ又たお前も仕合せだ
 よ此櫛笄の妾の若い時だからお前よ上げやう是の何々と段々出て見せてハ皆んる此

廣のふ桂は、讀る事も成りまゝに倦つよらないの、眞實たる桂で思ひ掛る大砲の音も驚い
 と氣絶してツレなり息が絶えました事をごさい升が、大き小戦争も治つたから襟掛のまゝで
 病院へ歸つたの、彼の柳原養庵先生、元々鳥居丹波守様の抱醫者で、其頃、年三十八で實
 に盛んで、歳頃で勇氣が有り升から戦地を働いて、鐵砲傷を受けた者の介抱を致しまして小使
 を連れ歸つて來ました。養「コレ、病人は變り、無いか此方へ軍人の來やア仕まはの、
 ……ウシ宜しい、ツレでの、ナニ病人が驚き、せんかの、若し驚いて病が重つてい
 たらんが、驚いた容子を無い。小使、ドウいふ事をごさいましたか、私の大砲の方へ参りま
 したが、モン鐵砲の流れ丸でも來ると往かせんから一寸知らせました。養「ヤア此窓の何ぞ
 らう。小使、ハ、ア此りやア大砲の丸でも這入たのでございませう。養「さうだ、此
 りもア大砲の通つた痕と、コレが碎ける様子の病人は、怪我が有りせんか……、チ、ア
 の壁が貫けて居る病人は、怪我が、といふので、椽側から這入て來ました、ムルト病室の戸が
 明ッ放し小成り居る此れ、其等が録が逃げ仕舞たから、誰も入る者へ有ません、内を覗い
 て見ると誰か倒れて居るから驚いて。養「コレ、此れから此れへ大砲が貫けたから何でも
 氣絶えたので有らう……ヤア婦人……、ム、捕いの着物を着て居るから、看病婦だ、裏襟に名
 前を見ろ……ナニろくと誓いてある、ム、緑が飛だ事と有と、脈を取ると見るとモウ絶て
 居るし口を閉じ齒を食切め、虚空を掴んで居る肉の柔かくして色の青ざめまして、トント温氣
 びとござません

第廿五回

柳原養庵先生、倒れて居る看病婦を抱き起して、脈を取て見よ、またければ、脈も絶へ、身体は
 温氣も去り、惣身が軟かになりまして、殆んど死んだやうであら、升から
 養「ハテ、迎も助からぬ
 か困つたものだ、と云たが何處か見處がある、と見えて是から機械を取り出して、聴胸器を
 左の乳の下、の心動と肺臓の作用を窺ふと、僅も動があるやうですから。養「殊も寄たら助かる
 まいものでも無いが先づ六づかしい方が九分だ、ハテ困つたものだ、コレ蠟燭を一本持て來
 い、暗くして能く分らん、コレ蠟燭を早く持て來い、瞳孔を見るのだ。小使「銅壺で湯を沸ませ
 か。養「さうぢやア無い、瞳孔を見るのだ。小使「臺所へ行つて銅壺を見よ、と仰まやるので、すか
 養「籠の銅壺で無い、瞳を見るのだ、と目を開けて蠟燭火を近づけて暫く見て居ると少

しく縮張の氣味が有ります。養「好い塩梅だどうかしたら助かどうだ何う行くか知らぬが呼吸を窺って見やうこれより髪の毛が宜い、コレ手が塞がって居るうら巳の毛は長いのを一本抜け……アー痛い一本で宜いといふのに一掴み抜き居つとな、と其の毛で女の鼻に當て窺って居ると毛が少く動くやうだから。養「コレ……冷水を持て来い冷水を。小使「へー荔枝でございませかあのブラ……垣根も下つて居る。養「荔枝で無い冷たい水を持て来いと云ふのだ早く持て来い、冷たい水で頭部を冷やせの。小使「豆腐を冷して奴豆腐で一杯やり升で。養「奴豆腐ぢやアない頭を冷すのだ……冷たい、コレ已の頭ぢやア無い病人の頭へ注げろ……此りやア大きに好い鹽梅だ、コレ燈火を出せ、モット出せ……ソレ眞を切れ大分宜い工合だ、と立上つて今度の礮砂精を以つて鼻小宛行ひ暫らく呼吸を測つて居ると礮砂精に少しづつ曇りが掛る様になつたから。養「活た、ソた、と是から劇烈の藥を以て瀝腸を行ひそれより種々の手當を致しました暫くすると彼の死人が手足を動かす様になりアハト聲を發して遂にパツチリ目を明きまーと。養「コレ心を慥に持てよ氣を慥に持てよ氣丈しう何も仔細ないぞモ一宜いぞ。桂「ハイ有難う存じます。養「大砲の音に驚いて氣絶したので

有らう……ナニ流弾は驚いさか。桂「ハイ不圖窓を明けて覗きます途端に頭の上へ大砲が響りましたかと思ひますと夫から先ハ夢の様でございしと。養「ハ、ア是ハ大砲が腦上を過ぎた爲に震蕩する事甚だしくして此れ如く悶絶したのでな。小使「門跡様がどう仕ましたか。門跡様ぢやア無い分らぬ事を云ふな、コレ女心を静よ持てよ。桂「有難う存じます。養「ドーモ命強かつたなア。桂「ハイ、お録さんは何方へか入つしやいましてうアノお録さんハ、お録さんハコレ……心を慥にしろ貴様が録だよ。桂「イーエ看病婦のお録さんと云ふお方ハ。養「ナニサ貴様が其のお録だよ。桂「イーエ妾ハ桂と申ませもれで。養「ナニ貴様がお録だよ……其形を見ろ。桂「ハイ、と自分の形を見ますと緋飛白の單衣を借りて着て居りますので。桂「妾のハ其處に掛つて居ります、と見ると掛つて居りませんからハッど氣が附いて見ると自分の包も無い。桂「チャ妾の包れ中ハ備前盛景の短刀と少々計り巾着の中ハ小遣が。養「どうしたのかサツパリ分らぬ心を慥に持て。桂「ハイ……ア飛だ事を致しました親切らしく見えますから迂濶妾の身の上を打明けましたがドウかお録といふ女をお尋ねをサツて下さいまし。養「コレお録を呼んで来い、とゆふれで小使が方を探しとが居

りません何處を探しても居ないとなるときは桂の聲を上げて泣き身を振りまわらういふ聲だと聞くと桂「お録といふ女の誠小親切な女と思ひましたから妾は身の上を明すと妾が氣絶したのを幸ひは証據の短刀も親父に戒名も路銀も持て誠小衣類までも着換へて逃げたのもございませう、アノ録といふ女が此病院を逃げれば妾の名を騙って相州の山田村へ参つて妾の伯母を欺して曾根の娘も成りの致しませんが伯母が欺されはせぬかと案じられませ、アノ云ふ大膽女と知らずは打明けて云つたのの残念と、身を慄かして騒ぎませから養」アノ心を溶附るが宜い又病氣も障ると思ひから、そして今行かふと云つても往かれぬから兎も角も靜に養生をしなければならぬ殊に此戰爭中女一人で迎も行けないから、といふのは是から養庵先生が親切に介抱を致します、なれども桂の一途は悔しく思ひませから猶更身体も障つて中々病氣が全快しません其内戰爭も大きき静まり、九月の月末うらゝ桂の病氣も少一づ、快い方へ赴き其上先生から少々の路銀までも恵んで下さつたから桂は大きき悦びまして薩摩擬の紺飛白の單衣の上は看病女の着た緋太の半天を引掛け細竹の杖をついて病院を立出なされたが澤山は路銀もございせんから安泊や木賃宿泊つて

漸くの事で相州足柄上郡山田村へ参りましたの十月の二日でございます

第二十六回

扱ふ話一變りなまゝて相州足柄上郡山田の郷山田村と申すは好い村でございますして殊に曾根惣右衛門の相州小田原大久保加賀守様と伊分家大久保出雲守様と両家の御用を達して槍を頂戴致し伊紋附の羽織を頂戴致したる代々名主でございますして其頃の噂に曾根の家で金小助が生ねるといふ噂をございませ又其頃の事を聞き升ると湯治も参りまするも湯本の福住ら七湯を廻つて一度に千兩づゝも費つたといふ養澤の暮一を致した者でござい升が桂の伯母の夫惣右衛門が死なつてから三年の間嬾婦を立て居ると思ひ掛なと姪が來ましたら大きき悦んで直に娘もそろといふので村方へ廣めを致し村の年寄世話役を呼んで小前の者へ披露を致し郡奉行へも其事を届けまして是から本當の姪と思つて可愛がりまするお録もどうか此伯母さんへ孝行を尽さんければ高道祖村の病院で死だお桂さんの追善よならんと眞實の母と心得て眞に孝行に勤めますることゆゑ伯母も感心致しまして伯何たる心掛の好い姪であるか實は容色といひ物のいひ様と云ひ起居振舞の何處へ出して



派あるもの妾の眞に仕合せ、と猶更眞の娘の様も可愛がりますから世間でも此の偽る桂を
 嬪様々々ト立ちます伯母のどうか早く好い婿を貰つてお桂の身を固めたいと思つて居りま
 そがどうも早速好い婿も有りません、處が此家へ折々來る者が有てそれの伯母の爲に眞
 實の甥も當る者で、大久保出雲守様の家來小綾川信之進と中人が有て高の漸く五十石で
 さい升が此人の次男は信次郎と申す者がござい升此の信次郎の幼少の時、劍難の相が有る
 といふので了義寺と申寺へ參つて出家を遂げ學問をして見ると素より穎敏實で能く出來ま
 すから觀海和尚が信次郎を悟して考案を授けると云ふと一つ道が開いと處へ漢學が有りま
 すから佛學と漢學の二つの力で深き考へを起しましてナニも頭髪を剃らんでも出家の遂げ
 られるもの又女房を持たぬと云ても女人の斷つ事の中々大善智識も容易に出來ん事
 有る夫よりも俗に還つて衆人を教へ何も分らぬ百姓を悟して心掛を善くすれば此上ない事
 を有ると云ふので是から又た還俗致しまして了義寺の用部屋もなつて百姓や商人が來ると
 惡者に向つて佛の教を説き又漢學の方で人の精神の斯様々々と説き聞かせて論じませ左
 様あると百姓など信次郎さんと和尚様より手重でないから却つて信さんの方が有難いと

いふので煩い尊敬いたします是から信次郎の信夫と名を替へまして丁度二十九歳まで了
 義寺に居りましたが此の信夫の男振が好く何となく品が有極沈落て其上段々學問で腹が
 出來たから何事も穩やかで人と應對するも貴賤上下の區別を立す誰を見ても大人し
 く交際ますから皆んな信夫を立て、和尚よりも尊い百姓なども慕ひませるくらゐ、折々
 伯母の所へ來て長物語の中の一々云ふ事が此の録の肝も當る事ばかりございすうら
 録
 ア、有難い事を仰えやる信夫さんの仰えやる事、聞く毎小妾の實も憤みなる事を
 り親切に仰しやつて下さる傍自分の爲め、いふ妾を従弟と見てア、やつて意見を仰しやつて
 下さる恥しい事だが何うもコウいふ人を亭主として側を離れず附いて居ら日々浮ぶ心得
 違ひな妾の曲つた心が直るで有らう此御方が此家の養子となつたら伯母の血筋で宜からう
 と男振や妾で無いが何と無之信夫が慕ひきて偽の心掛の心底此信夫も惚まて居るが信夫
 の方ハサッパリしたもので偶も來ても伯母が居ない時は茶も飲ませも歸るくらゐで女はか
 りの時に話しを居らんから 録
 ア、此方で慕ふ人の情ない素振で歸つて仕舞ふ本當
 に思ふ事ハ少しも通らん、と思ふと是と違つてお録の厭がる澤邊作右衛門の次男作彌が

ナヨコ〜

ナヨコ〜

九十

ない處へ来るので五月蠅いと思ひまするが其頃澤邊の郡奉行を勤めて居て大分權が有るか
ら餘儀も床の間附の座敷へ通し蓆を敷いたり火鉢を出したりして 録 御機嫌さま宜しう

第廿七回

作

ヤ誠は御無沙汰、時よ此間ハドーモ思ひ長居をして歸つてうら大さ親父は叱られ

た先方の忙がーいのよ長居をえて宜く無いと叱られたがツイチー此方へ来る口が合ふ

ものだから他所より面白いで存なながら御厄介に成て濟みません 録 ドー致しまして伯

母も大層悦びまして御身柄の御重役が入ッしやるのハ此家にとつて誠ハ外聞で鼻が高い何

となく肩身が廣いと申て悦んを居ます 作 イヤさうでもあるまいが就てドーモなんだ子

ーお掛さんお前の本當に感心な婦人だ子 録 ドー致しまして 作 いつも蔭を云つて居る

が伯母に孝行の様子ハ實ハ感心だ子 器量といひ裾捌きの様子といひ物の云ひ様といひ實

にお前の様な婦人の世よ少ないと云つてイツモ噂を致しますよ 録 恐れ入ります、いつで

もお世辞の好い事を 作 お世辞で無い母親へも話したらドーカ一度來て見たいが間が無

なくつて来る事が出来んと云つて居るよ親父ハ二度ばかり來た事も有るが……アト實よ

そんな事をいふとお前の器量は惚れていゑと思へれるか知らぬが決してさうで無いよ、さ

うでハ無いダ子 手前ハドーモ何處かへ養子へ行かなければならぬが武士の家へ行くのハ

誠ハ究届で子 殊にドーモ武士の家ハ嫌ひだ子 成べくも武士を止たいと思ふ位で百姓

でも町人でも宜いから氣樂な處へ行きたいと云つて親父ハ話をした事も有るが親父も武

士ハ厭と云ふ事なら無理ハ勧め難い行かぬから縁が有らば百姓でも町人でも望みの處

へ行くだ宜いと親父が得心を居るから一寸重役へ話しをすれば夫を濟むのだが併し百姓

が宜いと云つて自から鋤鋤を持って農業をする事ハ出来ぬから一寸役を勤めて槍を立てる事

の出来る門構への處へ縁付うと思ふので、當家ハ何れ養子を養るからといふ譯で……ナン

だ子 實ハお前と感心と子 録 ナニ少しも感心も何もございませぬ誠ハ不束おもれで 作

イヤさうで無い伯母への孝行ハ眞實見抜いて居るがキー……實ハ子……其子……誠ハ

中悪い譯だけれども、お前が容貌が悪ければ強ても養子ハ成たいと云つて伯母ハ話しも

出来るがお前の其通りの美人あり當家ハ斯んな家ななりドーモ養子ハ成たいといふ云ひ悪い

か實の子一當家の様な處へ来たいと思ふので、**録**「アラ、マア、そんな事を涉意遊ばして、本
 當に貴公勿体ない事でございませう、貴公の様な役柄の若旦那様がこんな百姓風情の養子
 などを勿体ない事を涉意遊ばして、**作**「お前の勿体ないといふがさうでもない事サ今もいふ通
 り武士の勤めの究屈で病が起りそうでもドウモ氣が閉ぢて仕様がなから箱根へ湯治にでも
 行きたいと思ふ、モシお前が厭といふ事なら仕方が無いが實のお前が美しから云ひ悪い
 がド一か伯母さんの處へのお前から相談来て夫を伯母さんがさう云ふ事ならといふ話しに
 なれば手前でも誠に幸ひだがお前の厭うエ甚だ不躰で濟まるはゞ **録**「マア勿体至極も無
 い事を仰しやつてお賜でございませう **作**「賜るれで無い全くだヨ **録**「ソナナ事を仰しや
 ツツッて屹度虚偽でございませう **作**「虚偽で無い虚偽で堪らん全休人を以て話しをする
 處を自ら云ふのだから能くくと思つて呉んあさい **録**「妾はまだ参りたて、何うでも宜
 うございませう伯母さんへ得心なら厭と申せませぬ伯母の心よ任せますから **作**「伯母さんが得
 心なら宜いと **録**「ハイ **作**「へー宜いから、屹度宜いから、 **録**「ハイ伯母が得心なら **作**「伯母
 が斯うしい彼アしろと云ふ事のお前の屹度脊かゝると、夫の孝行だ子一實も感心、といッ

が斯うしい彼アしろと云ふ事のお前の屹度脊かゝると、夫の孝行だ子一實も感心、といッ

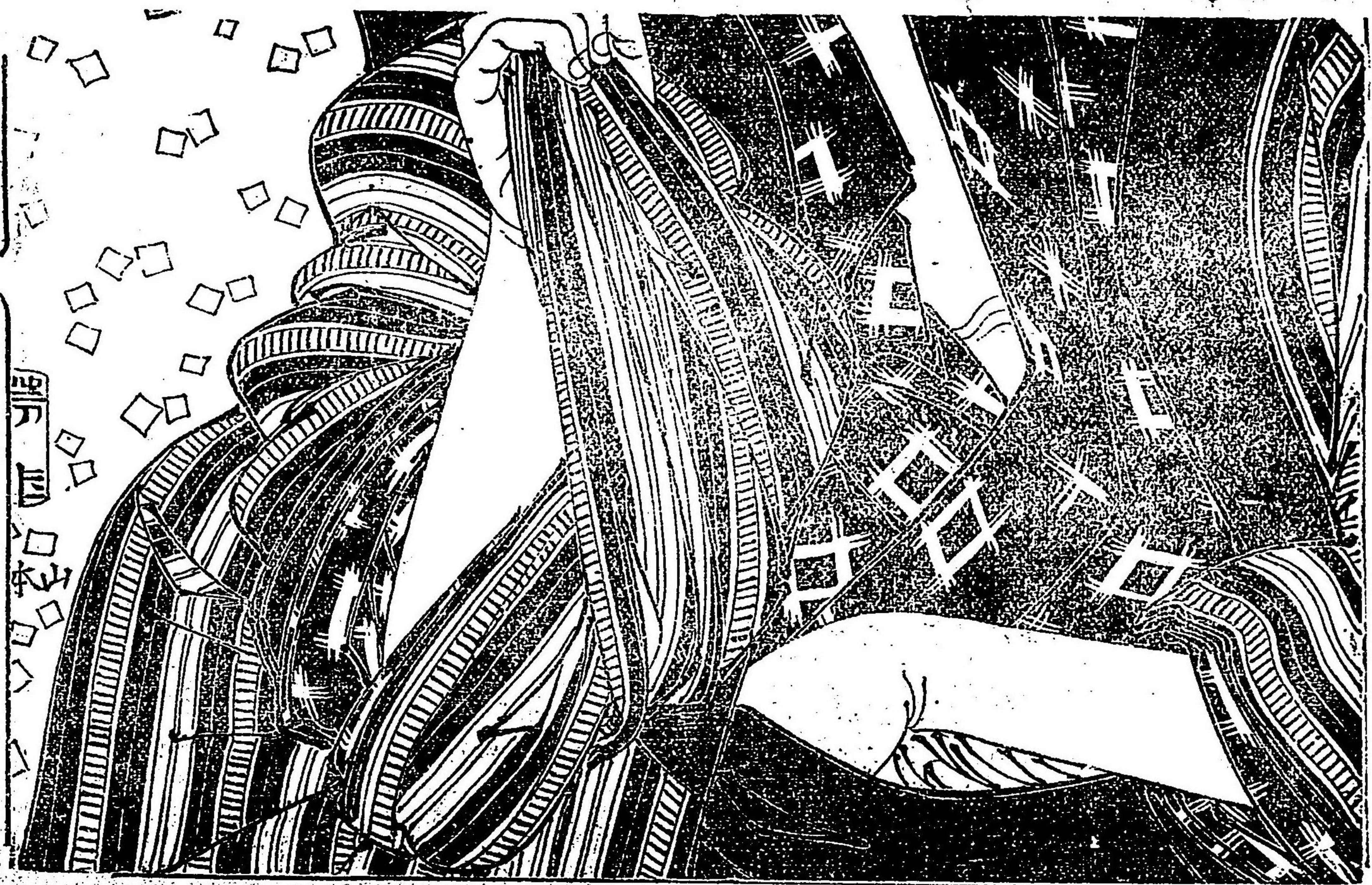
てる處へ丁度伯母が歸つて來ました、お桂の伯母が歸りましたからソコノ一ふして伯母の
着換る着物を次は間の方へ持て行きました、さうすると作彌の心嬉しいからツカ〜と出
て來て 作「オヤお歸りあさい 伯「オヤ入ッしやいまし能え入ら〜ッて 作「此間の種々御馳
走を頂戴致しまして今日の一寸の禮も上りました 伯「只今外から歸りまえたをかりで取散
ろッて居りました 作「ドー致しましてお留守も上ッて結構な茶とお菓子をお戴きました、
嘸御用多で 伯「仕方なしに一寸行て参りました、大儀も用が有りまして御承知の通り主の
無い家をございしますら役よの立ちませんが據なく妾が参りました 作「お前ぐらゐ感心な
人の無いと親父もさう云ッて居るヨ 伯「どう致しまして感心な事少しもありません 作「
ドーモ子一惣右衛門殿が没せられてから女一人では是丈に田地畑や子一造り酒や何や彼や
小前の者を使ひこなして此家が亂れぬの誠は賢女です本當よる前の男勝りで 伯「マア大
層世辞の好いことを仰しやいます 作「お世辞が能くなッとのぢやア無い、就て子一伯母さ
んよ折入て子一中度い事が 伯「何で傍坐いますか 作「オカ……何で、宜い鹽梅も天氣よ
伯「ハイ左様でございします宜い鹽梅に天氣も成りました 作「晝の内少し汗をむくらぬ

是が本當に小春ですちや 伯 左様でござい升 作 附てチー……、貴婦に恐れ入居るの
 でスどうも其心達といふもの少な以てチー夫ふる娘が絶美しいエライチー 伯 アレが來く
 から妾も大き話し相手が出來まいて 作 付てチー……其れ、是ら養子を仕様といふ思
 し召でせう 伯 ハイどうか早く好い養子をと思ッて居りませ、アレも最う二十を越して居
 りませから何うか早くと思ひます貴公の方々様へ入ッしやいますから相當な汚縁がござい
 ましたら何うかお世話を願ひませ 作 お世話といへば……ドーモ貴婦感心ですチー 伯 大
 層お世辞の好いこと何だか氣味の悪い様でございませ

第廿八回

作 貴婦マア申悪い事たがチー、實にチー……手前がチー、武士の勤めが厭でチー、内々
 重役も話して親父も得心で夫々話しをした處がさう云ふ事なら聞いてやらうと家老も云
 ツて居るが何うか斯ういふ處へ來さいが手前の所存どがチー當家と云ツてもコチラが大家
 過るし金満家を有るらう慾目目かくれて來る様でもあり或ひは桂さんが美人とから器量
 惚れて來るといふやうと思はれり如何にも残念な、さう云ふ譯で無いがあるおさんの
 くら思はし、白髪と、……

心の正しい處でお桂さんの孝行を見抜いて居るのだが手前を當家の養子にして下さらんか
エ 伯「マア勿体至極も無いトンダ事を仰ーやいなま 作「トンダ事で無いよ 伯「斯んち百姓
の家へ貴公の様な身柄の方が 作「ア同じ事を云て、往けないナア 伯「ダツテも餘り釣合
ぬのの不縁の本といふ事もございませうから 作「高ぶらないうら斯ういふ豪家の處への釣合
ふまいが 伯「イ、エそんな事ハ宜うござい升が丸で身柄が違ひますからソコが釣合ぬと申
のるござい升、誠は冥加至極と思召でございませがマア〜 此縁談の事ハ妾一存で
ハ出来せんうら篤とお桂も話しを致しての事ハ致ままして 作「父ガ、チー、お桂さんハ
お前のいふ事と背かんからマア話しハ宜いぢやアないか 伯「デモ、チー、此事ばかりハ親一
存よと参りませんから 作「お桂さんと伯母が得心なら宜いと荒増得心で先刻一寸直接ハ
下話一をしたらさういふ事だから 伯「オヤマア大層手廻しの宜いお桂ハ何と申ましたか 作
「お桂さんハ伯母さんが得心ち手前ハ厭とハ申さんといふ事だつた 伯「アレハ、ぢやまよ、
さう云ふ事を云ひませ自分ハ厭と断り悪いから苦しい時ハ親を出せとの諭へで妾ハさうで
も伯母さんハ得心ならと云ひませう、けれども心の違つて居りませヨ 作「へー違つて居るま



せか、女が今 伯「今が今宜いと云ても年の往かぬ娘がソナラ来て下さいといふ云われませ
 ん氣長に娘の心を聞いて見ませう思召の誠は有難う存じます 作「デモ早く極めたいもので
 善い急げといふから 伯「能くマア、貴公、外の事との違ひ生涯の事でお互ひは死水を取合
 へなければならぬ長壽をすれば八十九百までも添ふ事とございませうら二年や三年延び
 たつても宜いぢやア有りませんか 作「延びて困ります 伯「篤くり考へましてから 作「ソ
 レで今日の出來ませんか 伯「今日と申すは往きません 作「夫ぢやア伯母さん一寸母よ
 も話しを下さいが今日お桂さんを貸して下さらんか 伯「何か御用でござい升か 作「用ぢや
 アあはが豫て手前が桂さんの事を母に話そのさう云ふ孝行を人なら逢ひたいと云ういふ
 お嬢さんか見たいといふから見せたいと思ふので手前足が早いから一寸親父に話し
 をして駕籠を持って來るから何うか貸して下さい夫から一泊ぐらぬの宜いでせう 伯「アレハ
 是までお屋敷への出馴れませんから突窟がって往きませんヨ 作「大丈夫、泊めると云ったッ
 一泊の事で何も仔細あるまい 伯「ナント申やら知れませんが旦那様の仰せを致し方が
 ございませんから上る様は致ませうと桂一人での上げません女中を附けて、そきであ

なければ 作「イ、とも幾人でも附て 伯「夫での上る様は致しませが何うか泊めずよ返
 下さいまし 作「マア泊る積りで、左様なら、と云て歸りまゝと暫くすると駕籠を持って迎
 ひまわりました、先重役の那奉行の權が有りますから據なく行かなければなりません
 録「伯母さん妾の氣味が悪くって成りませんドンナ事でヒヨット、先刻も是れ〜の事で
 ござい升から、ト心配しませから 伯「ナニ心配の無以幾と丸を付けてやる、といふので相
 州生れでデク〜肥ったお幾丸といふ女中で大概の男でも投付る程の三人力あるといふ
 女中を兩人と外は男一人附けて遣りまして此兩人がお桂に兩方居れば宜からうと申升か
 らこれならば安心と申して居りました

第廿九回

緒其頃の浪人者が度々強談は参りますので曾根の家でも女世帯で浪人者が怖から村の百
 姓を頼んで毎夜十八位づゝ夜番をまて居ります 百「コレ〜コレ嘉四郎ハア此頃の太
 きよハア穩かになつたツけが常陸の戦争のエラーかッてナンター水戸もエラへ者が出
 て彼是千人も集まつといふが徳川様から押して行たからと云ツてもコレ公儀のお役人も

向ふがエラへから魂消たナ一夫でも此頃の強借が能程来なくなつたが五人で槍を持って来た
 時ハ怖かつたナ一桂「ハイ御免なさいまし」百「誰だか」桂「エー曾根惣右衛門様の御宅
 ハ此方でございます升か」迂濶開けないが宜いヨ此間ハ迂濶門を開けて誰方といふと槍を出
 さま魂消て腰が抜けたから、エー誰だかチー誰だか桂「ハイ妾ハ高山元貞の娘の桂とい
 ふ者でございます升と伯母も仰えや下さいまし、高山元貞の娘と仰しやッて」百「エー女の
 聲だからッて迂濶開けるな仮聲かも知れチーッ、迂濶開けろ、エーサ初まりよ女を出して開
 けさして男が這入て来たら魂消るぢやア無エか、エー全之女リチー」桂「ハイ妾でございます升
 當家の家内の姪でございます升」百「へてナア當家の家内の姪とど一」百「ヨセヤ何だかいふ事が
 強借でねへと化物か狸か云ふ事が判然分ら無へ、狸かア桂「妾ハ笠間から参りました者で
 ござい升モット早之参るのでございまして日敷を追ッて遅くなりましてござい升」百「ナン
 だか聞か無ないナ一桂「笠間から日敷を追ッて参りました」百「ナンだ頭から鹽を付て食て仕
 舞へ一」百「さうぢやア無へ、外い廻つて見やう」と云ひながら百姓衆ハ怖いから裏の方か
 らソウツト一町ばかり廻つて往て見ると見影も無い粗糲の姿、まるで女乞食で細竹の杖を

突いて居りますから」百「誰だか」桂「ハイ妾でございます升」百「なんだか」桂「妾ハ此家の家
 内の姪でございます升とど一」百「高山元貞の娘の桂といふ者とど伯母にげんも仰しやッて下さいま
 し」百「ハテナ一桂様と聞いているが二人も桂の有る筈ハ無いわつかないナア」百「かつ
 かない夫だら已れが云ハ無へもッちやア無い何でも化物ハ相違ねへ打殺せ殺したら烟よ
 なつて消えるだらう」百「モシ娘が狐や狸なら股へ食ひ附くから迂濶打て無へチー」百「だろ
 御新造ハ此話をして見やうぢやア無へか是から奥へ往て右の事を源に申すするど夫
 ハ以ての外のことと全く騙りて、兄が死ぬ時遺言を立聞し者ソレも雇人がお掛が前
 に来て居るのを知らせ騙つて来たので有らうから追ッ拂ひあ、事なく夜中小門を開けて
 入れる事ハ出来あゝ兎や角く云つたら奉行所へ引ッ立てろ、と鶴の一聲で直ッ門へ参ッて
 寄せ居る事ハ出来あゝ、譯をいふと打ち殺せといふ權幕をござい升から桂ハ泣く一杖を
 突いて山田村をナダレ下がりて又上らうとすると右の方ハ大きな自然石があり升、其の
 面ハ堅平地神尊天と彫付ある其處の五六段石坂上ハ大門が有ましと天神の社と小さい
 神樂堂が有ますから掛ハ其下へ来まして、何を云ッても聞入れぬのハ事ハ依ッたら看病

母のふ録が妻の名を騙って来ての居あいらど一も様子が怪しい何うか妻が眞實の姪といふ事を知らせたいものだ伯母に逢へば直に分るが何分も逢ひせて呉ないどうしたら宜からう、と其夜の寐もやらせ泣き伏して居りました其うち鴉が啼き夜はしらくと明けの時分よフト氣が付いたのハ親父さんが臨終の時、外に身寄りの無いが貴様のため一人の従弟があるそれハ少い内よ出家して飛龍山了義寺の僧になつて居ると仰しやつたが夫が達者なら其所へ行って話しをせよより外よ仕方無いト是から桂ハ同村の了義寺といふ禪寺へ参つて信雄は廻り合ひませるといふ御話しでござい升

第三十回

引續きましてお録の傳記を、お録ハ桂の名を騙り曾根惣右衛門の娘よなり澤邊方へ招かれましと大した變應を受けませる事よ引換へまして高山元貞の娘ハ桂ハ病院を出まえても旅費ハ無し又悔しいのと悲しいのと日々忘れる暇も無く思ひ重つてハ病となり木賃宿で病が發してハ一夜二夜と逗留せる事がござい升から忽ち貰つた僅かの旅費ハ遣ひ果し人の軒よ立て合力を頼み誠小見る影もない有様よありました諸相州足柄上郡山田村へ参るにハ酒

匂れ手前から、這入るといふ事を知りませんがら小田原まで来て聞きますと青物町の處から北へ廻れと云ふことでございますから酒勾の上流を渡りまして飯泉觀音から成田村へ出て下大井上大井を通つて是から山田村へ参りますと坂の上り口よ一寸した掛茶屋がある其處で聞きますと此坂を登ると松の木が有て松に有る處で道が二つに分れ右の方へ行けば山田村で有ると聞て漸うの事で十月の二日は山田村へ参り夜に入らから曾根惣右衛門の門へ来て案内を乞ひますと前中上げました通り見る影も無い乞食に姿で有りませうら夜番のお百姓衆よ情なく追ひ拂はれ致し方なくて堅牢地神尊天といふ天神の神樂堂へ参つて一夜野宿を致して其明方よフト心付たのハ綾川信夫といふ者でお桂の爲め小促弟を幼名ハ信次郎と云つたが少さい時分に出家して飛龍山了義寺といふ山田村の寺院に居るといふ事を聞いて居りましたから夜が明けて村の者よ聞きますとソレハ直き近處と云ふ成程斯う見ると木の間から寺院の家根が見えますから段々曾根惣右衛門の家の垣根を傳ハツて山手の方へナダレよ上つて行くと大門が有りませう右の方よハ萬靈燈があり左の方よハ觀音塚がある、又是から小坂を登ると正面が本堂で右の方の蔭よ辨天堂が有て其脇よチ

立こして置いただ 信「夫れいかない夫だから常々云つて置くのだ形が穢ない」と云つて換
 撥を遣へるといふ事いふ 與「ハア 信」たとへ形が清麗でも何様を悪い事ををる者かも知
 れない形が穢ない」と云つても人よの違ひあいうら形が穢ない乞食の様だつて決して穢末に
 てる譯の無い直此方へた通し申せ早く呼せ 與「夫れおやア椽側へでも掛けさせませ
 うか 信」椽側へ寒いから此方へた上げせ 與「上げろつても上げられ無い既足で穢ないか
 ら 信」イ、ヨ既足でも流へと清麗にある 與「洗ふこつて着物を洗濯する事ハ出来なは 信」
 向でも宜い洗足の水でも汲んで上げろ早く呼せ 與「へ、呼んで来ますよ 信」早く
 通りなさいと云へ 與「ハ、コレへ 桂」ハ、信治郎さんといふのが居たの
 夫でお前を上げでも宜いのだがさう云ふ何だから廻つて来るサ、コー〜〜〜廻つて彼所の
 椽側まで 信「オイ〜〜〜與助どん其方の手を引てお連れ申せ 與」手を引けつて穢なくて
 引かれやアしなは、私に附いて来るが宜いサア来ささい、と與助が連れて参りませ信夫ハ
 何様な人かと障子を明けて待て居りませると 桂「御免遊ばしませ 與」此人だアよ 信「サア
 〜〜掛のせか這入りなさい、與助どん臺所へ行つて、茶を持って来な、サア此方へ〜、始

めてお目よ掛るが貴嬢ハ何方の方で私ハ元信治郎と云つて只今ハ信夫と改名を致して居り
 ませ、貴嬢ハ何方の方で 桂「ハ、妾ハ高山元貞の娘挂でございませ 信」ハ、彼の高山元
 貞といふハ私の伯父ハ當る人で水戸の笠間へ行きましたがお前さんの彼の高山のお娘かへ
 桂「ハ、此五月二十六日小亡となりませる折ハ親が遺言を致しました其方ハ外ハ親族兄弟
 ハ無いがコレ〜の甥があつて手前の爲ハ従弟なる其人ハ今ハ相洲山田村の了義寺と
 いふ寺院ハ御出家ハ成つて入つしやると聞きましてお尋ね申して参りました 信」ハ、左様
 カナ……、マア此方へお上りなさい 桂「イ、エ穢なうございませ 信」足を洗つてお上
 りなさい宜しい何でも穢ない事ハ無い、與助どんや水を汲んで来てお呉れテ汲置ハ冷たい
 から汲たての暖かいのを汲きて来て足を洗つてお上げヨ 與「へー今汲んで上げませがマア待
 てお出なさいヨ、と水を盛ま汲んで来ましたから 桂「誠ハ恐れ入りました、と足を洗い
 て恐る〜椽側へ上りませ 信」椽側へ寒いから中へお這入りなさい障子をソめましよ
 桂「有難う存じます 信」其火鉢の所へ、どうも此山國ハ寒くつて火が無くつてハ居らませ
 せん、儲どうもお前さんの仰しやる事ハ少し私の心ハ落附かぬ事があるから深くお聞き申

まよふが私伯父様と少さい時に別れて能く顔も知らず前さんの固よりの事であるか
ら只従弟と高山の娘と仰しやつても顔を知らぬから直に信じ難い何か確の書付をもあ
ります又確な証據が有りませか 桂「ハイ其のあなた証據の残念でござい升たが悪漢よ
盗まれて仕舞ました 信「ナニ取られたと夫れいどう云譯 桂「ハイ親父が亡くあります時ふ
手前の伯母の相州の山田村に居る曾根惣右衛門といふ名主れ方へ縁付と居るが一人の兄弟
であるから折々手紙の往復もする其の伯母れ夫が亡くなつて跡よ子が無いから跡目相續の
爲め已れ方娘が二人あるから何方か一人越せ子に貰ひたいと云ふ頼みれ手紙もあるけ
まども姉が死んで手前計りも成たから遣るといふ返事も送らなかつたが已れの無い後よ手
前の此處よは居られまいから相州の山田村へ行つて伯母よ頼んで娘よなゑとも又外へ縁付
とも身の立つ様にして貰へ併し顔を知るまいから証據の手紙をやるといふので亡くなる前
の日は其れ手紙を書きまして又伯母への証據よ此家よ傳へる備前盛景の脇差と已の戒名
を持って行けといふ遺言でございまして夫から親父が亡くありましてから跡を片付け石塔を
立てまして此方へ尋ねて参りませうと思つて常陸の筑波下へ掛ると戦争が始まりましてご

ちらへも逃げの事が出来ません妾の喫驚致しましたので持病の癩が起つて前後も知らず寺
子原の松乃並木に倒れて居りましたと丁度其處を通り掛つたの若い女でございませ、妾を
介抱して應難儀で有らう此先よ病院があるから其處へ行けと申すと親切ら妾を連れて
行た者其病院の賄ひ女でございまして病人の看護を致しまする様子といひ容色といひ誠
小親切な者と妾が鑑定違ひを致しまして此思返しよ妾が相州へ行けば屹度呼んで姉妹よ
なり相當な處へ縁付けよう妾はコレコレの身の上とツイ身の上を打明け証據物を見
せまじこれが妾の過りでございませ 信「へー、成程、へー 桂「ソー致しませると又戦争が
初まりまして病院へ大砲を打込まれます其大砲が妾の頭の上をカスつて通ります音で妾
が氣絶致しましたのでございませ其間よ妾の衣類から証據の書付備前盛景の脇差戒名路銀
まで残らず其の看病婦のお録といふが盗みまして其ま、病院を逐電致しましたのでござ
います 信「成程……ウん夫でお前の証據の取らされたから無に云ふのか 桂「ハイ

第三十二回

信「夫れハトんだ災難を残念な事を致しましたな 桂「ハイ誠よ残念でございませ跡でお

醫者様は御丹精を受けまして漸々蘇生の致まじとけれども肝腎の証據物の無し其看病女に着せられと此單物一枚で此の半天の可憐然と云つて外の者が呉れました、院長様や舎長様も貰つた僅の小遣を降参りなまそ参りなしたたが途中で煩ひまして思ひの外日數も掛り遂に乞食に成り下りまして昨晚やうくは事を伯母の所へ尋ねて参りなまそと門は百姓が居りなまそで騙りだとか乞食だとか中して妾を鉄を以て追ひ掛けますから怪我をしてはあらぬと思ひまして妾の天神様の神樂堂で一晩野宿を致しまして夫から妾は此方へ歸をお話しなまそ上つたのでございませ、さうぞ貴公様から伯母の方へ妾が参つたと仰しやつて下さいませする様よ、殊よ依つたらば其お録といふ女が妾の名を騙つて伯母を欺しに参り仕ないかと夫をツクリが案じられます 信「成程宜しい伯母さんの所へ行って篤くりと前さんの來た事を話させよう、何しろ証據の無し顔も知らず何うも私に眞の從弟は桂さんと思へねませんがいふ事の一々道理に聞えませ昨晚往つた時よ百姓……がウん宜まいさう云ふ身形とから眞と心得ず盗賊と思つて追拂つたので有らう嘸も困となすつたらう、宜しめく直に私が近いから伯母の處へ往て話しをして來ませう少くも此處に待てお山なさい 桂「有難

う存じます 信「お腹が空減かア無いか……未と食ぬと、コレ與助さんやる膳を拵らへて汁が熱くなつたらち膳を此方よ上げな 與「アレ此方だつて乞食の様な者を 信「マア、宜いヨこれの私の親族の者だ 與「貴公の親族カーチー 信「マア、私の從弟だ 與「ソレへ知ませんとつた、コレ、貴公は乞食様ですか 信「乞食様と云ふものが有るものか一寸曾根へ往つて來るから 與「うれぢやア飯を食せさせませが何よも甘い物の 信「ナニ甘い物の無くつても宜いから有合を上げろ、と是ら信夫の小短いのを一本差して石坂を下つて半丁ばかりしかありません能く曾根に勝手も存じて居りませから裏口から上つて居間の處へ來ると今お茶を入れて膳立の出來るところ 信「伯母さんお早うございませ 伯「チャ大層お早く 信「能くお早うお目覺め 伯「妾もモウ年を取て何だか早く起きられませんでツイねへ朝寐をえそやう、今顔を洗つておかりれとこた 信「エー何ですう今日のお桂さんの「ハイお桂の子願さらうが夕夜達て越せといふ事で澤邊さんへ参りましたがアノ作彌さんよの本當に困るヨお桂を宜いとかナンとか思つて居るれを養子と來さいとかナンとか云ふ話しが有つたけれどもお桂が厭がる事知れ居るし妾も何だか落附かない方で厭だぞ

思ふけれども元が郡奉行の次男だから其權を振って小前あどの難澁も成ていならんと思ふから体能く断りのいふもの、腹を立つと怖いからヨツク一晩お掛を母小見せたいから貸せ〜と云ふ事だがお掛お怖がって厭がるから内の女を連れて行くが能く幾や丸が附く往たら宜からうと云って附て遣た處がどう〜夕夜泊られて囃困つて居るだらうと思ひ妾も案考られるから是れから迎ひよ行かうと思つて居る處だヨ 信「ハ、ア左様ですか、伯母さん又一人お掛が参りましたモウ一人お掛が参つたそれで昨晚此方へ参りの致しませんが魚「サ、〜ツ〜夕夜乞食の様な女がお掛だと云つて来ると云ふ事を夜番の衆からさう云つて来たから夫れお飛でモ無いと〜機が者だと聞いたらユレ〜の女だと云ふから夫れお屹度乞食に違ひなから追ッ拂へと云つた所が、百姓衆が鋤鋤を持って威嚇たら其女お驚て轉げる様よして逃げたと云ふからな〜油断は出来ませんよ 信「へーそれが今朝私の所へ参つたのも 伯「お前の所へ行たと 信「へー見る影も無い姿で参りました私の高山元貞お娘お桂お中ず者昨晚伯母さんの所を尋ね中さら騙りどと盗賊だとか云つて追つて探らなく天神社お野宿をして参りましたどうか伯母さんお逢ひして貰ひさへといふ

のでどうも私も顔を知りませんし伯母さんも知るまいが全く高山元貞の娘から何ぞ証據があるかど中たら証據の無い皆んな盗まれて仕舞て誠は是といふ証據の無へと云ふ事だが笠間で死んだ親父の遺言といふ私の幼名まで存じて居るから一々云ふ事が尤も聞きます夫で私お掛さんが来て居るといふ云ひませんで向ふの様子を探らうと思つて種々聞いて見ましたけどどうも全くの様でまがどうしたものでせう 伯「お前さんの本當は正直だらうに往けるいヨ何でも人の云ふ事を本當よして懸然と云つて此前の何よ困つたヨ親子三人がぞろ〜捕つて来てサ食べられ無いからサ旨い事を云つて来るので本當の心が善いか悪るいか分りやアしあいアンナ者を連れて来て困らえたが彼の時の少〜をりお金を恵んで立しおたけれどもアンナ者に騙され〜いけなないヨ 信「イ、エ 伯「アノ其まが子妾の考へるも親父が死ぬ時には屹度お掛を呼で遺言を致しませう其時よ雇人が臺所を聞け居たか庭先で立間をした乞食も有てお掛の積りよ成つて行けば此方お是丈の家だからどうよかし〜呉まるといふ考へで来た騙り違無いから決してお構ひでない此方お困るからヨ 信「をまが、實の尤もな處があるといふのそ此方へ来る途中を戦争お逢つて驚いて瘡が起つて苦んで居

處へ病院の看病女が通り掛って厚之介抱して呉まる其親切は引かされて身の上を明し証
 據の物まで見せて相州へ往つたら恩返しの爲めに引取るぞやた處が大砲が飛んで来て頭れ
 上をカスツたので目を廻して倒れ氣が付くと看病女の居なくって証據の手紙も路銀も脇差
 もないうら誠な残念だが仕方ないから院長うら小遣を貰つて乞食になつて參つたと云ふ
 事で其看病女のお録といふ者がモシヤ妾の積りも成る来て居ないか夫が案じられると
 いひませ

第三十三回

伯 以ひませつたつて其様な事を眞受れて往けませんヨ能く考へて傍覽、嘘であるか
 ないか彼の通りお掛が私に孝行を尽そのを知つてるぢやア無いか 信 存じて居りませ
 彼の本當の血筋を無くつて出来ませかへ伯母様の間でも眞實に親子の様で妾の本當も掛
 が可愛くつゝあらぬ妾の本當も仕合だと思つて何うか前を養子に仕たいと思ふ處が前
 の和尚様の教へを守つて生涯一人で暮すといふうら仕方が無いけれども何うか前が掛
 と夫婦なれば従弟同士だから誠宜いと思つて居るので彼の眞實の孝行が廣の娘で出来

ある考へて御覽屹度向ふが廣に違ひ無いヨ 信 さう云へば何うもそうらしうございませ
 ア 伯 そうらしうございませぢやアありませんそんな事を云つてお出でまいヨ 信 デモそ
 う云へられたものだからチー使ひだせしければならんダガマア一寸其掛といふのを連
 れて来て見ますが伯母さん一寸逢つて御覽をさいませんか 伯 厭でございませ何んな奴か
 知らないが逢ふ處でハ無門から内へ入れてハなりませんサッサとお歸しなさい本當に夫
 だから往けないヨ情けなくと云つても情けが仇になつて身を苦しめるのでダカラお前ハ貧
 乏をするのだヨ 信 さうも至極汚尤も仰せの如くだチー夫ぢやア歸しませう……困つたる
 ア 伯 何も困つと事ハありませんヨ早く歸れとお云ひ 信 へー云つて參ませう……貴婦
 今日ハお宅にお出でせうチー 伯 イ、エ是から小田原まで往きます 信 さうですか夫でハ
 お家へ居らつしやいませんか 伯 お掛が留られて厭がつてらうから早く行つと連れて
 歸つて来やうと思つて居ります 信 夫ぢやア少しの間お留守でせうチー……ダガ伯母さん貴
 婦此家へ入れる事が厭なら一寸寺まで来て見ませんか 伯 厭ですヨー乞食の様なもの
 往つて見ても詰ら無餘計な心配をなしで無いヨ早く歸して居仕舞ヨ 信 ぢやア従て来ま

せう、困ッたなア 伯「まだ何か云ッて居る子エ、サッサとお歸りヨー 信「へー歸りませよ、ト何うも致し方が無いから外へ出考へたが 信「なかく伯母の機子取ても附けあい又お桂が眞實孝行を尽せ機材が本當の血筋で無クツてハ出來るもので無し、と云ッて今日尋ねて來た彼の女の云ふ事も至極尤もな何うして宜いか分らぬが何うも致し方が無い、と考へながら石坂を上ッて寺院へ歸りまするとお桂の待ちに待ッて居て 桂「お歸り遊ばせ御飯を頂戴致しまして有難う存じませ 信「ハイ……お前さん眞のお桂さんだ子ー 桂「ハイ 信「何うもお桂さんに相違あるまはが伯母は話しを致した處が何分証據が無ければ採用られないと云ふ事で私にして見ても顔を知らぬから矢張そうだ子ー、全く高山元貞の娘と相違ないと云ッても証據が無ければ誠まどうも伯母は話しも仕悪いが何か証據の有ませせんか 桂「ハイ其証據の先刻中まざる通りお録といふ看病女は盗まれましたので夫ゆゑは斯様お乞食となりましたのでございませ 信「誠にお氣の毒だが証據が無クツてハ私も信じらま無い又伯母は話しをした處が証據が有るなら連れて來い左もなくば逢はぬと云ふ事だから桂「モシヤ其のお録といふ女が妾の名を騙ッて參ッてハ居りませんか 信「エー、エー夫ハ

ア何うだか其處と今答へが出來ない飯令お前さんが眞のお桂さんをも物を取らまて証據が無ければ採用ぬといふ事だから全くお前さんの運の悪いのだ是も前世の約束と諦めてお仕舞なさい立派の人でも証據を取られて生涯乞食で暮らさ因縁の人もあると誥らぬ身分れものでも幸ひを得て結構な家の娘になるものも有る是ハ皆な宿業といふものだ私が寺院に居るが斯な事をいふのでハ無いけれども因縁と云ふ事もあるから時節が來ればお前さん証據を手に入れて伯母は逢ふ事もございませう 桂「ハイ証據が無ければ伯母さんの何うでもお逢ひ遊ばさないと仰えやいませうか 信「ハイ 桂「貴方も妾の云ふ事を本當に遊ばしませんか 信「何うも証據が無いから子ー！ 証據が無クツてハ本當に出來ませんで子ー 桂「ハイどうございませうかエー残念でございませう、と身を振ハして其場は泣き倒れ聲を惜ま泣いて居りませから信夫も是を見て氣に毒に思ひまゝて 信「そう泣いては往けませんモシ發狂でもするを往けませんヨ困つた子ー何うもお桂さん少しお待ちなさい最う一度往て來るから併え伯母が用達へ行くと云つたから今往ッてハ家小居まいから少し落付てお待ちなさいお前さんを追拂ふと云ふ譯でハ無いが女を寺に置く譯ハ往かぬから愈よ伯母が採用をければ何

處へ往きなさる積りだへ、桂、何處と申す處もござりませぬ身寄便りの無い妾でございませ
 から矢張乞食をするよと外へ致し方ひございませぬが乞食を致しませる位なら寧ろ海川
 へ身を投げて死なせ、信「そんな輕擧げに往けません、借困つたもれたなア少しお待ちなさい
 最う一邊一寸曾根へ往て來ませうから、と又た出掛ました曾根の家へ往つて櫛子を聞くと
 伯母の最う出で仕舞たといふから、信「ハテナ困つたものだ伯母が出たと云つて歸つたら海
 へでも飛込みのしまいか何うか最う一應伯母は話を仕て見たいと思つて居ると表れ方か
 ら駕籠で送られて來たのの廣れる桂で女中が二人と供が附て立派な形容を歸つて來ました

第三十四回

信夫が考へるよ、信「此事の迂濶な桂よ云へないテ何方が本當か分らぬうら迂濶云つて立腹
 されて困るテ、マア寺へ行かう、と又歸つて來ました顔を見るとオイと泣か
 れるので又ヒョコ、寺を出て又曾根へ來て、信「ハテナ困つたなア何う仕やう……ウツ
 い事が有つたと是から寺院へ歸つて、信「お前さん私と一緒來なさい、と乞食やうなる
 桂の手を引來て曾根の家の裏口からソツト這入まして二重の建仁寺垣の開きを明けませ

ると内庭を八疊の間と長四疊の離れ座敷が御座いませ此方の方へ一寸した生垣も成て居る
 其後ろから廻してゐ桂を座敷へ入れませたが此處の客でもある時に明けるばかりで平常
 の使はぬ座敷でございませ、信「お前さん此處よど火も何も無から寒いさうが私が内証で
 入つたのだから此所よ少し待てお出なさい、と云つて是から信夫の表れ方うら這入來ま
 すると今も桂の作彌れ處うら歸つとばかり裾摸様の紋附の金縷の帯をソメフサ、とし
 る大島田を結つて化粧を致して居ませるから年と二十四でございませが小造りで立派よ
 成て居ると二十の上をやう、一つ位越えて居るかといふ美人でございませ、録「オヤ入ら
 ッしやいませ、サアお上遊ばせ、信「ハイ、録「昨宵澤邊さんへ客よ呼され誠ふ困りまし
 て妾しの厭でございませたけれども行かないと彼アいふ方で立腹されての往けませんから
 幾や丸が附いて往て呉れましたがトウ、泊められて漸々只今歸つて來ました母が妾を
 迎ひよ参りましたさうございませが途中で行き違ひに成りました、信「へー伯母さんへ行
 き違ひよ成りました、録「へー伯母さんで行き違ひよ成りましたか……ハテナ困つたもれた
 此の往けませんな、夫でい、伯母さんの矢張り澤邊さんへ往たのですな、録「ハイ、信

「ぢやア私の一寸迎ひよ往ッて来まする目も掛ッてお話を申したいが彼の離れの八畳の座敷へ少し止むを得ない客を連れて来て、直かよ表から這入られぬから八畳の座敷よ待たえて置きましよ私が伯母さんよ逢ッて一緒よ歸ッて来ませから夫まで彼所よ上げて置いと客よ構ッての往けませんヨ覗いちやア往けないヨ見られての困る譯があるから屹度見ずよ私の歸るまで只置いて下されば宜い 録」マア貴公宜ぢやア有りませんか何でございませるか茶を一つ、とゆふうちよ信夫の「オー」と出仕舞ッてから信夫の姿を見送ッて居りました是の最初来た時から掛が思ひ初めて居るので 録」綾川さんの誠よ好い人との思ひながら毎でもそッけ無い伯母が居いと妾と差向ひで居る事も無い誠よ堅い方だ今日の又伯母が居ないから匆々よして出さお仕舞だ妾が斯んなよ思ふよ些とも届かぬのか知らん……、其う〜何んあ方うお茶でも上あげればあらなひが、丸や 丸 丸 丸 綾川さんよ連れてお出のお客が八畳よ待ッて入らッしやると云ふ事だが彼處の山手で凄じさだらうかお侍か御出家か 丸」ね連れね女だッてねエ、ハイ裏口から這入たで表から這入らねエで其處エ、へー入れて置いてエ門な方から廻ッて来たッて子エ 録」お女中かエ 丸」女

な子だッて 録」マア珍らしいぢやア無いか 綾川さんが女ア連れて来ますッてねエ 録」丸や、綾川さんの誠よ堅い方でお女の見向もしまい彼いふ御方だご伯母さんがさう仰しやる信夫さんの幼さいときから御出家よ成て寺院へ入このだご何ういふ了簡か學問よ就て還俗をしたと云ふ事だが、妾の考へで今の盛りで女の嫌ひな方も無いものだから何でも約束をして女があッて伯母さんに隠して居た處が隠し終せる事が出来なくッて伯母さんと相談して其女を女房よでも仕やうといふ思召しで無からう 丸」何とも云へねへた彼いふ真練むッつりした人の奇く女が好きなものだねエとけれども綾川さんの真面で何だか怖かなへ人だア申談をいふと其う云ふ理屈斯う云ふ理合と云ふのでハア魂消と返答が出来なへが何うもハア怪しいなア知んなへ女ア連れて来て置きッばなしよして伯母さんを迎ひ行くッて何ぞか平生と違ッてソワ〜して居るヨ見ちやアならんヨ見ちやア往けあへと云ふの何も怪しいが 録」ア、何うも怪しいぢやア無いか……、好ゆ〜妾の衣物を着換るから出して置てお呉れ、と見ての往けあいといふと猶見たい覗いそのならんよ云ふと餘計覗き度くなるもので何んあ女屹度夫婦約束をした女が懷妊をしよから其相談よ違ひないと

疑ぐる心から廣のれ桂が高樓を服つて庭下駄を穿き音の仕ない様、石の上を踏まきよソツト忍んで来て横の方より覗くと生憎穴が明いて居りませんうら何處うら覗かうかと彼方此方廻つて考へて居りましたのが障子の處をソツト細目よこかしそコー覗くと後ろ姿でカンボヤツして居ります艶も何も抜けた女をございませすけれども夫婦約束をいへ美人でい無いかと思ふと何ぞか奇麗と思はるもれで色白之艶々しい毛が乱れと姿と見はますると胸がムカ〜とするがナニ色が白い處でい無い眞ッ黒だが疑ぐるから奇麗に見はます何うも後姿で顔が見えないが何かえと顔を見たいものと又ソツト戻つて來まえて煎茶を入れ菓子をつけて煙皿益々長烟管まで付て長四疊の方から上ツて襖を明けて 録「茶をね上りなさいまし、と茶托へ載せて出ましたうら桂の心附也 桂「有難う存じます、と見るとフサ〜して大島田は結つて立派な櫛笄を差し裾摸様の紋附を着て居りますから此家のね嬢様で有るうと思つて少しも看病女のね録とい知らず 桂「誠小恐れ入ります、と茶を受ける此方の茶を出しながら桂の顔を見てね録は驚いたの驚かぬのぢやアない何うして此處へ此嬢が助かつて來たかと思ふ餘りの驚きよサーンと氣息が閉ぢ詰めて仰のけさよ小廣のね

桂が倒れましたが是から何う相成りまするか一寸息繼ぎまして申上げます

第三十五回

備只今の廣のれ桂が餘りの驚きよ氣絶しましたしと事を申上げました人が人も酷く驚くと氣絶致えなす事があるもので又た酷く可笑くツツ笑ひが長ゆると其爲よ目を廻す事が有るとお醫者様が仰しやいます妙なもの、ね桂の至之大砲の爲に氣絶致しましたのを種々手當をしるも氣が付きませんから死んだ事と心得て居りました其ね桂が面のあたりよ乞食の姿を參つたのを見と何う致さうと存じました途方よ暮れてウーンと其儘倒れました此方のね桂の廣のれ桂とい存じません只奇麗な形をして居りますから此家の娘だか何處のね嬢様だか何故に倒れたか分りませんうら 桂「ア一ね前さんね病氣が起りました、と自分が癩持で思ひ遣りが有りますから何の薬がと思ふと丁度院長の榎原先生よ貰つた薬が有りますうら持合せの薬を取つて飲ませ様とすると手水鉢よ水が有るから其水を茶碗に汲んて參りまして丸薬を飲せやうと思ふと齒を喰ひソて居りますから齒で咬んでコー襟を抱へて飲せやうとすると此七月別れた看病女のね録をございませすから此時よる桂も驚いて 桂「ヤア此

の悪黨女能も、妾の証據物を盗んで来てノメ、伯母を騙して此家の娘となり終せて居たな巳の様な悪黨女があるものが、腹立まざれば警を取って小搦ぎ廻し逆上るほど腹が立ッたを見て其まゝ立てポン、と二つぱうり蹴りましと御婦人の常より優しいが怒れば矢張男子と同じ事で腹を立たた時の變つた事、無い常の優しくってアう畏いマア厭だナン、と云ひまきか、どうして亭主が浮氣をもしく少しチャン、の時、二つ三つも張飛されるとナニ、此間拔野郎といふ時分に男子も婦人も同じ事でございませう、今も桂が腹立まざれに蹴た機みは何處へ當つたかウーンと、餘が息を吹き返しく見ると目の前、小桂が居るので面目無くて顔を合せらまらず、ワ、と泣き伏し額を疊、附け頭を擡げる事が出来ません、此方でも腹が立つら何云って宜いか分りませんが段々、録より寄り寄り横髪を取て物をも云、ハ、二つ三つ小搦ぎ廻し又平手でビシ、リ頬面を打ちますると女の反ふ手で打られたから頬の跡が付いて、眞赤まあります、録、どうぞ御免なすって、御尤もで御坐いませ、御尤もございませ、どうぞ御免なすって下さいまし、桂、マア御免なさいで手前、ハ、濟むと思つて居るか此の畜生、穢多乞食、マア手前の様な奴で、無いと思ひ、迂濶身の上を明けたが、過り証據をも見せたのが、妾しの鑿定違ひどが、マア、手前、ハ、ヌ、と其証據を持て来て、妾の伯母を騙して其立派な姿のお嬢様、此家の娘と云って、能くも、ノ、と此處、居られ、義理かどふも、實、恐ろしい悪黨女だ、コレ、手前、ゆ、ハ、ナ、ア、命、と、つり、替、の、親、父、様、れ、手、紙、と、証、據、の、脇、差、を取られた、む、ッ、かり、ハ、斯、な、乞、食、の、姿、に、成、て、食、ふ、や、食、ハ、ず、よ、來、た、の、も、皆、な、手、前、ゆ、サ、ア、今、に、伯母さんが歸つて來れ、此事を明白に云て、直に手前を縛ッ、お役所へ出すか、仮令お役所へ出さぬ、も、乞食の手へ下げて、小屋の作法に行ひ、此、ま、で、助、け、て、置、ぬ、か、ら、さ、う、心、得、る、能、と、曰、れ、ハ、ノ、と、茶、な、ど、を、持、て、來、て、妾、逢、ひ、よ、來、た、な、ア、と、股、の、邊、り、を、捻、り、ま、ど、男、な、ら、歐、打、の、で、御、坐、い、ま、せ、が、此、の、捻、る、の、ハ、ッ、と、來、る、か、ら、却、つ、て、堪、へ、惡、う、ご、ざ、い、ま、す、録、ア、病、い、御、尤、も、さ、ま、お、嬢、様、ア、ノ、時、ハ、貴、婦、が、全、く、大、砲、れ、音、ハ、驚、い、て、御、壽、命、が、尽、き、た、事、と、存、じ、ま、せ、妾、ハ、其、時、種、々、と、御、介、抱、ハ、致、し、ま、せ、た、が、戰、争、中、で、お、醫、者、ハ、居、り、ま、せ、ん、か、ら、妾、一、人、で、ハ、お、手、當、を、さ、る、事、も、出、來、ま、せ、ん、ヒ、ョ、ット、お、持、合、せ、の、お、藥、が、有、る、か、と、存、じ、ま、し、て、貴、婦、の、お、懷、中、物、を、探、す、と、中、か、ら、出、ま、し、た、証、據、物、か、ね、て、お、話、に、此、山、田、村、の、伯、母、さ、ん、を、使、つ、て、往、くと、仰、し、や、る、の、を、承、ハ、ッ、て、居、ッ、の、が、妾、れ、惡、意、れ、起、る、初、め、で、御、坐、い、ま、し、て、何、ふ、せ、貴、婦、ハ、助、

の悪黨女能も、妾の証據物を盗んで来てノメ、伯母を騙して此家の娘となり終せて居たな巳の様な悪黨女があるものが、腹立まざれば警を取って小搦ぎ廻し逆上るほど腹が立ッたを見て其まゝ立てポン、と二つぱうり蹴りましと御婦人の常より優しいが怒れば矢張男子と同じ事で腹を立たた時の變つた事、無い常の優しくってアう畏いマア厭だナン、と云ひまきか、どうして亭主が浮氣をもしく少しチャン、の時、二つ三つも張飛されるとナニ、此間拔野郎といふ時分に男子も婦人も同じ事でございませう、今も桂が腹立まざれに蹴た機みは何處へ當つたかウーンと、餘が息を吹き返しく見ると目の前、小桂が居るので面目無くて顔を合せらまらず、ワ、と泣き伏し額を疊、附け頭を擡げる事が出来ません、此方でも腹が立つら何云って宜いか分りませんが段々、録より寄り寄り横髪を取て物をも云、ハ、二つ三つ小搦ぎ廻し又平手でビシ、リ頬面を打ちますると女の反ふ手で打られたから頬の跡が付いて、眞赤まあります、録、どうぞ御免なすって、御尤もで御坐いませ、御尤もございませ、どうぞ御免なさいで手前、ハ、濟むと思つて居るか此の畜生、穢多乞食、マア手前の様な奴で、無いと思ひ、迂濶身の上を明けたが、過り証據をも見せたのが、妾しの鑿定違ひどが、マア、手前、ハ、ヌ、と其証據を持て来て、妾の伯母を騙して其立派な姿のお嬢様、此家の娘と云って、能くも、ノ、と此處、居られ、義理かどふも、實、恐ろしい悪黨女だ、コレ、手前、ゆ、ハ、ナ、ア、命、と、つり、替、の、親、父、様、れ、手、紙、と、証、據、の、脇、差、を取られた、む、ッ、かり、ハ、斯、な、乞、食、の、姿、に、成、て、食、ふ、や、食、ハ、ず、よ、來、た、の、も、皆、な、手、前、ゆ、サ、ア、今、に、伯母さんが歸つて來れ、此事を明白に云て、直に手前を縛ッ、お役所へ出すか、仮令お役所へ出さぬ、も、乞食の手へ下げて、小屋の作法に行ひ、此、ま、で、助、け、て、置、ぬ、か、ら、さ、う、心、得、る、能、と、曰、れ、ハ、ノ、と、茶、な、ど、を、持、て、來、て、妾、逢、ひ、よ、來、た、な、ア、と、股、の、邊、り、を、捻、り、ま、ど、男、な、ら、歐、打、の、で、御、坐、い、ま、せ、が、此、の、捻、る、の、ハ、ッ、と、來、る、か、ら、却、つ、て、堪、へ、惡、う、ご、ざ、い、ま、す、録、ア、病、い、御、尤、も、さ、ま、お、嬢、様、ア、ノ、時、ハ、貴、婦、が、全、く、大、砲、れ、音、ハ、驚、い、て、御、壽、命、が、尽、き、た、事、と、存、じ、ま、せ、妾、ハ、其、時、種、々、と、御、介、抱、ハ、致、し、ま、せ、た、が、戰、争、中、で、お、醫、者、ハ、居、り、ま、せ、ん、か、ら、妾、一、人、で、ハ、お、手、當、を、さ、る、事、も、出、來、ま、せ、ん、ヒ、ョ、ット、お、持、合、せ、の、お、藥、が、有、る、か、と、存、じ、ま、し、て、貴、婦、の、お、懷、中、物、を、探、す、と、中、か、ら、出、ま、し、た、証、據、物、か、ね、て、お、話、に、此、山、田、村、の、伯、母、さ、ん、を、使、つ、て、往、くと、仰、し、や、る、の、を、承、ハ、ッ、て、居、ッ、の、が、妾、れ、惡、意、れ、起、る、初、め、で、御、坐、い、ま、し、て、何、ふ、せ、貴、婦、ハ、助、

からない御壽命又証據物も此れあり置ッばあしよなれど無駄なる事かねて貴婦の仰しや
 ッ事と思ふと此証據さへあれば妾が人中へ出て人並の交りの出来る身れ上よあらまよ
 是の妾の立身の瑞相かと只今考へれば全く妾の思ひ違ひる御坐いましたけれども妾が其
 証據を持つて此方様へ参りまして貴婦の名を騙り証據をお見せ申はせと伯母様の眞實と
 思召し妾を眞實の娘の様ふる目を掛けて下さいますから妾もまゝ眞實の伯母さんとも母
 とも思ッて孝行を盡して居まはせらうちコレハ貴婦に成り換ッて孝行をする因縁かと存じ
 て居りました又此の村の了義寺様へ参りまして心の内での貴婦の追善供養を致し口より出
 しませんが月々貴婦の命日は回向をして居ましたが只今貴婦が是へお出遊ばせの全
 妾は罰では本當は天命とて御坐いませうから妾は是から直元元妾に成りませとて此家
 を出て参りますと伯母様が歸りふりました後彼奴の騙りの看病女で妾は是
 くの目よ逢て乞食をして斯ういふ難儀と貴婦様から伯母様は仰しやッて下さいます伯母
 様が歸り成りましてうらふ目の前で妾が細目よ掛ッて引れて御當家の苗字を穢し伯
 母様の恥これまで一通りならぬ御恩を受けた伯母様は目よ掛ッて今よなりまして妾が眞
 のお桂どの何の顔下げて申されませうかどうか能くお考へを願ひます仮令妾が腹で御坐い
 ますと申しても今での伯母様が本當に遊ばささい位よ可愛がッて下さいますとぞお腹
 立の重々御尤も様で御打擲よなるとも何の様も遊ばしても決してお手向ひの致し様ハ御坐
 いません何とも申様ハ御坐いません只今貴婦の召し入ッしやるのハ病院で妾は着た單衣
 此の妾は着て居りますのハ伯母様から頂いた貴婦の召し物で御坐いますから貴婦が是と
 着換遊ばして妾にソレを下さいますればソレで元の木阿彌妾ハ罰が當ッて是から乞食にあ
 ッて難儀を致しますから好い氣味ぢや罰當りめ妾の報いで斯う成たと思召してお腹を癒
 して下さいた願ひで御坐いませとぞ伯母さん小達せず奉公人よも知れない様は裏口か
 ら妾をお出遊ばしと下されと涙ながらに詫言した

第三十六回

穴でもお掛のあり合點を致しません 桂 コレ手前ハナニか此着物を着換て此處を出れ
 ばソレで中譯が濟むと思ッて居るか、ナンだ空涙を灑して本當小病院でも優しそらよ見せ
 る空、 前の様な悪黨女と知らずに手前の猫撫聲は騙されて身の上を明えたばッかり、



で新んも難儀をしたのだ此ま、手前を逃してソレで腹が癒るう癒ないか考へて見る今も伯母が歸つて来るから表向繩は掛けて引かせず置くものか昨宵妾が來た時見張の百姓が騙だの乞食たの盜賊だのと云たのを皆手前が此處に斯うやって立派な居るから妾を偽物と思つて本當にしない其上己で小鉄で打殺されそうだから據ろなく逃たけれども往所のない身の上ゆへ野宿までするといふも皆是も手前ゆゑとサア今に綾川さんが歸つてお出なさるうら伯母さんと綾川さんの眼の前で繩を掛けて引かせるのだソレを見ない内腹が癒ない本當にマア涙を流さずを騙さずマア分疏をきる此の口で妾を騙したか、と口は邊を捻り股を捻り引摺廻して打擲致しませぬら録の少しも手出をせず只謝罪を泣くよと外に有りません 録 御尤もさま〜か嬢様誠は御尤もさまを御坐います、モ一是程御打擲遊ばされたからドーッ〜伯母さんね歸りにならぬ内にお出し遊をしてお下さい 妾が繩目よ掛る姿をお見せ中の誠は伯母様よ氣の毒で御坐いますからドーッお願ひ妾の小屋者よ引渡されても厭ひませんが只伯母様の妾を可憐がって下すつたる心根が誠におうも夫を考へますると妾はあなたを騙したと申すて此家を出る事が出来ませんどうか跡で

でお話を願ひます何うぞ願ひユレで御坐いますドーッ堪忍まで下さい、と手を合せて懇むと 桂「イ、エ聞かぬ〜ソんな事で腹が癒るか、と又次の間有合た煙管を取煙管の管の折まるほど力を入れて二つ三つ打つと煙管は頭首が當って鬚の處に傷が附いて血潮が頬へ流れるから 録「ア、お情けないは是程願つてもお聞入せが有りませんか、といふと猶れ掛が立上つて 桂「此儘宥して堪るものかマダ愚圖〜云ひ居るか、と足を舉げて乳の上の處をポンと蹴ると當り處が悪かつたか仰向よ録が倒れて少し氣が遠く成つたものか物をも云はずチャ〜と桂の顔を恨めしう見詰て居りましたが何と思つるか細袴の袖で涙を拭つてお録がスツと立上つて 録「此の大騙りの乞食め呆れた奴だ何を證據よ此家の姪だと云つて來た妾といふ本當の姪が來て居るのを知らせよ手前が來て、此家の田地畑もあり山も林もある人よ知られた豪家だから旨く手前が騙り終せよ此家の娘にならうといふ惡計でも神佛の信を點して本當の姪が先に來て居るのを知らせよ來よ此方の體うな證據が有る娘よな村中へ廣めをして有るのを知らせよ來て妾が誠のお桂とい何を證據よ云ふのだ女と思つて優しくすると附上つて無理無体に云ひ張り伯母を騙して妾を追出し手前が

此家の娘ふらうといふ了簡本當よア恐えぬ奴だ此節ハ斯んな奴ばかりで昨宵も手前
 が来た事を百姓から聞て居るがコンな奴こそ夜る夜中なら泥坊でも仕兼ないモ一此方から
 何處までも免さぬお役所まを出ろ何方が本當の姪だか役人れ調べを受けヨ一何を証據ふ姪
 と云つて来た呆また大騙りだ、と瞋んだ時よハ本當の桂が勢ひも吃驚えて後ろへ手を附
 いてれ録の顔を見て居りましたがワ一ツと啼き倒れる騒ぎで何方が本當れ桂か分らなく
 成て来ましたモ一此方の極度まで腹を立ち終せたら怒る力が無くなつて只啼く方になつ
 た處へ這入て来たのハ澤邊作彌と云ふ人で此人ハね鏝が蹄つたから其跡を追駈けて來た處
 が何だか家が混雜て八疊の座敷で知らぬ女が啼て居る其脇よね嬢様が腹を立て居ります
 と下女が申升から直よ參りませぬの 作「今一寸と何サ大井まで用が有て來たから昨夜の御挨拶
 授かたく御寄り申たが此騒ぎのどういふ事さげすへ 録「マア能く入らしつて下さいまし
 貴公マア恐しいぢやア有りませんか斯な乞食が參りまして妾が桂と以ふ者で伯母の姪
 だと申て妾が此家の娘よある手前ハ贖れた桂だから出ろと云つて私を打ち打擲して斯なよ
 傷を拵らへられました 作「ドウも未ハ怪からぬでハ無いか、コレ不埒な奴と何と心得て居

る當家よハ斯様を憐れた桂さまが有る事も知らず手前ハ乞食の身の上で騙りて此家の娘
 よ成らうといふ存心か不埒な奴だ此儘ふハ捨て置れぬうら左う心得ろ……、ナニ心配ハ人
 らぬ直よ同心を呼んで繩を掛け引くら決えて心配ハ入らぬ、エ一ツと男ハ何と云ふた
 か、コレ喜作か一寸來なアノ一同心所へ往つてなア宮原の鐵太郎に直よ參るやうよ大急ぎ
 で來いときさう云つて呉んナ、ナニモ一心配せんでも宜い、ドーモ不埒至極な奴だ、といハ
 れるお桂ハ只啼てぱり居る 録「本當よマア恐しいぢやア有りませんか 作「斯な奴がドー
 モ當家の娘よ成るなんぞとホ一ガへしが付かぬ氣も違つて居るだらう、と云い居る處へ
 信夫と伯母と同道して歸つて來ましたと此騒ぎを聞いて怒つたの怒らないの 伯「夫だらう
 妾が云ハ無い事ぢやア無い何でもお前が眞實よ受けるうら此な事が出来るのださうしと
 桂の額よ傷を付けたつてマア毛の中だから宜いけれども藥を付けた 信「ドーモ悪い事を、
 トンだ事よなつて 作「ドー……お前さんへ、ドーモ怪からぬ奴だ誠よ女の身で足蹴よ
 するおぢ、ハ甚だ宜く無ハ事だ 信「ドーモ、コレ重く濟みません不埒至極な事よ口で云
 つて分るのを打擲するのみならず足下にかねて面部よ傷を負はせるとハ女の爲すべき境界

で無い依命前が眞のお桂ふしても左様な事をして済むもたで無いソンの失禮な事が有るものか 伯「失禮だづともソンの奴をお前が連れて来るから悪いのだ 信「デモ何よしても致も方々無以トシた事よなッて仕舞ッて 録「本當よ妾の驚きまーたよ打擲される時よハ殺されるろと思ひままた 伯「コンな奴ハこんな事をやるかも知れない火でも附け兼ねないヨ 作「ナニモー今同心を呼び遣つたから直きよ来るだらうドーモ實よ怪からぬ奴とコンな奴ハ番太の手へ渡しても宜いのだ、とゴマノして居る内よ途中で使に逢ツとか又ドーして知れたか直よ村の捕方が繩取を二人連れて参りましてソレツといふので是から本當のお桂に繩を打ち高小手よ縛しめて引立よ掛ります是を見よ居ままた既に桂ハ今本當のお桂が繩よ掛ッて引かれるを見るよ流石よ堪へ兼ねましたと見はてソッとその場よ泣き倒れままた

第三十七回

伯母の容子を存じませんうら不審よ思ひましく 伯「何を前ハ泣くのとヨ 録「どうが暫くも待ち遊ばしう下さいまし少々中上げたい事がある坐います實ハ其方ハ本當のお桂様で妻れ方ハ廣のお桂様とございまして實ハ看病女のお録と申者で傍坐いませ 伯「エー……アノ看病女れお録だと 録「ハイ、ア一何うも傍役人様少しお待ちなッて下さいまし、ア一モ悪い事ハ出来ぬものも傍坐いませ此のお嬢様の仰しやる道りで傍坐いまして七月の六日又寺子原で瘧が起ッて苦しんで入ラッしやるのを見て妾ハ病院の看病女でございませ其處を通り掛ッてお助け申して傍介抱を致しませると誠よ親切なものを思召し妾ハコレノで伯母を使ッて行くのでコレノの証據が有るから顔ハ知らぬけれども實親の書と物を持て行けば娘よなられるから娘よなればお前さんを看病女にハさせて置かぬ直よ呼び戻して兄弟の縁を結び相當の處へ縁付て遣ると其証據物よ拜見致しませしてございませ、なまども其証據を見て妾が直よソレを盗んで騙りに参らうのナンのと以ふ心でハ傍坐いません三日たつ内よ戦争が高道祖村よ初まりまして大砲が飛ん來てお嬢様が氣絶を遊ばしたかちろろノ介抱を致しませたがドーしても助かり様がございませんコレハ御壽命が尽きぬを存じまして實ハ此のお桂様よなッて此方へ來て伯母さんよ孝行を盡しお桂様の退養を致したいと存念又ハドーか入交りが仕さいと云ふ妾の心から斯様な事に成りませ

た御當家様が 大尽でも是へ参りまして娘よなり生涯榮耀華ふ暮し好い着物を着て旨い物を食たいといふ積りでの御坐いませんでーか若い時分小心得違ひを致した事此の桂様よもて話を致しましたが妾も元ハ御用達の家の娘に生れた者で年の往かぬ時分よ心得違ひで小屋者と知らず密通して家出を致しモ一人並人交りの出来ぬ身の上になり夫から旅女郎よまで成り下りましたがドーか人交りが仕たいドーが世中よ出たいと存じませればこそ病院へ這入て看病女よなつて居りましたれで御坐います此方様へ來ましてららハお嬢様との姪御様と村の衆が云つて下さる一澤邊様のやうなる役柄の立派なる方までヤレコレ仰ーやるからア、勿体ない事と妾ハ是まで成れたが自分で心よ聞け誠と恥しい事と日々心の内で懺悔を致しましてハお嬢様の亡くなつた積りで追善供養を致し人知れず神佛を拜し居りました御壽命とハ申ながら何うして肚かッて入らッしやいましたかお桂様が此處へ出よなるのハ全く妾の見せしめで涉坐いまして悪い事ハあるなど云ふ神佛の教へを破つと罰か當つた事と存じ種々詫をして其儘立去らうと存じましたが何分お聞入れが無くサソソ打擲に逢ひ額に傷まで受け足蹴よされまーたからモ一是迄と存じまーて實ハ又た元の悪人に成りまして本當のお桂様を贖だど何處までも云ハ張らうとハ存じて見ましたれども罪も報いも無い眞のお嬢様が今細目よ掛つて引かれると何處へ出ても証據が無から其作法ハ行ハれる様な此上も無い妾がマア罪な事を思ひ謀まーた又た是も神佛へ對して恐れ多い事でございませ自分ハ賈のお桂様有りながら眞のお桂様の細目よ掛るのを見てドーも此儘でハ居られません夫ゆゑよ只今打明けて懺悔話を致しませる故よドーハお桂様よ罪ハございませんから私を細目よ掛け小屋者よハ引渡し遊ばせどもお上の淨刑を受け命を取られても私ハ元々罪の有りませる者で全く小屋者のお録で涉ざいませドーぞお桂様をお助け遊ばして下さい私ハモ一ハ顔を合せ事ハ出来ませんから早く細目を掛けて引遊ばして下さい、とスツかり懺悔を致しませ聲を惜ませ泣倒れるのを見て只皆々茫然とえて

信「ア、何うでせう綾川さん 信「ドーも誠小驚きましと子エ、ドーも思ひ事ハ出来ぬものでチへ 信「出來るつて出來んつてマア妾ハ肝が潰れたチへ、ドーハ些ども賈とハ思ハれませんだつたヨ私を能く大切よしと事チへ 信「ソレが素と悪人ハ無ハ今聞けば年の往かぬ折よ小屋者と密通を以て人交りれ出來ぬのを残念と思ひ人交りが仕

たい許りではへ騙りも成り終せただのソコで桂が来たから此儘出し下さいと云ふれも聞うれず打擲され傷を受けこの又悪人よ成たのだから伯「マア〜其繩を解て下さいまし、早々解て下さいヨ」作「ドーも驚き入りましたドーも怪からぬ事だ驚き入りまゑた子へ 信」伯母さん此女の仮令腹でも大騙りよせよ惜い女だ子へ容色といひ心達といひドーか人交はまが仕たいと云ふれで辛い事も厭はず病院へ參つて見ず知らその赤の他人の看病を致す其苦心といふもの實も容易ならん事で殊も通り掛つてお掛が癪氣で難儀をまて居るのを助けて病院まで連れて往つて手當を致し其介抱の仕方が親切を有たから實コレ〜と打明け兄弟も成らうとまで云ふ程よる録といふ女が看病をいたのだからコレドーも實も考へて見れお其の處の實も手堅い善さ子へ私の考へで見ると此女の悪い事をしたと云ふれれ先づ小屋者と密通して家出を致す親兄弟に心配を掛けた處の成程コレも悪黨だが悪い事をしたと懺悔し故に旅女郎から改心して病院へ這入て見せ知らぬ穢ない非人乞食の行く施樂院で寐る目も寐る人の手當をまるといふ事なかく普通の人出来ん事でモ一是で小屋者と家出をした不行跡の佛の目から見たら消けて居る、

だから騙りを仕やうと云ふ心は無かつた故よる桂が感心して伯母れ娘になれば兄弟に成る斯ういふ證據が有ると云つて見せたがマア夫れでも直に悪いならぬお掛が大砲の音に驚いと氣絶をし仕舞つて逆も助からんと思つたゆゑよ是を證據よ相州へ往つて娘にありお桂も成り換つて孝行を盡し追善供養も仕やうと思つて來たのでコレと同じ騙りでも悪い様には思われぬ全くお桂が死んだと思つたから來たので其騙りの念を授けこの兄弟も成らうと云つて證據を出し見せたのだから其騙りの念にお桂が授けた様なもの若し證據を見せなければ騙りをする心にならぬが今お桂が來たから宜い様なもれ、コ一助かつて來るの騙りを致す悪人を濟度する神佛が眞を照らす處で死んだと思ふ者が出て來るが萬一お桂が病院で死絶て仕舞へばお録の何處までもお掛の積りも成て此家を相續致し養子を取るともドーもまて跡から出て來た本當のお掛よりもモット孝行を尽すかも知れぬ又此家の爲めよなるかも知まんが天命逆れ難いと知て恐れ入て懺悔して元の身なぞ出して下さいと云ふのを面部に傷を拵らへたから又グット腹を立て自分が本當のお掛の積りも成てコノ大騙りめと云つのでそう云ふ心よしたも矢張お掛、マカラお掛とつて其んな打

ち打擲を仕なければ全く罰と心得て悪い着物を着て出るを云ふのだから遣せと云つたら着物を遣り伯母が歸つたら話をきるとして出し遣れば宜い、處がお録の頼む事を聞くやに打擲するからグット立腹して元の悪人は成つたので其惡念のお録が授けたれだチー、なれども証據が無からドーあるかも知れぬとお録が繩目掛つて引かせるのを見てアーコレハ濟まん事だ妾が腹のお掛でございませと懺悔をしたのハ感心佛説で云つても此處が實よ尊い處でコレが一番好い處だコレハ私まで善い修業を致しました有難い處でございませと頻りよ感じました

第三十八回

伯母の信夫に向ひまして 伯「お前ソンの有難いッて此儘も捨て置かれないうちやア有りませんろ 信「ダガお録が介抱を仕なければ松並木小伏倒れ居て兵士小でも擔がれて行くかも知れんソレを助けられたのたら實よ命の親といふ恩義が有るからドーか此女の繩を掛けよ此儘宿して出して遣て下さい今中通り罪ハ皆消え居ります 伯「ダけれども傷を付けて 信「ナニ宜うございません事ハ構はずよ、第一此家から繩附の罪人を出その

ハ宜くあらざる 伯「成程お前の云ふ通りお録が倒れて居る處を通り掛つて助けて呉れたからユーヤッて助かつて来る様な譯で左も無ければ倒れて居て玉なし小せる様な事が無いとも云ひませんチー 信「信實よ介抱をしたから優しい女と思つて兄弟も成ると云つたのでせう 伯「妾も此處から繩附の罪人を出したく無いから其れちやア小遣ひでもやつて勘忍して遣る事に致しませう 信「澤邊様どうでせう 作「至極御尤もと心得まするが併し此女の騙りでゲスナ 信「イヤ夫の只今中通り此方で惡念を授けたので此方からシロく惡念を授けたから惡心が起つたのでまドーか是の内々を併し此女の惜い者で生涯小屋者で枵ち果るのハ氣の毒ですなア 伯「澤邊様あなた此お録をお桂ごとと思召して養子よ來たいとか何とか大層滲意よ入た様で滲座いまーたが心掛の善い處ハ承知の通りで滲座いままから足を洗つて滲新造よあすつてハ…… 作「イヤ是ハ怪からぬ事と小屋者と知つたからハ滲免だ其んな話らぬ事を云ツちやアいなません 信「コレで小屋へ引渡せば小屋の作法で殺されるかどう云ふ事は成るか知れませんが伯母さんあなた正實よ免しよなりませか 伯「ハイ免しませヨそろして少しばかり小遣ひも與ませう 信「コレお録貴様ハ小屋へ引渡されるとどうな

ると思ふか 信「ハ、有難う存じます罪を免じ下をって小屋の手へお渡しはありますば
 何の様な作法へ行はしますか知れませんが小屋の方作法が厳しう汚座いしますから何れ殺
 されましか仮令殺されんまでも永い間牢へ這入る様を事までも成りませるか又の遠國の番太
 の手へ渡しませる命の助かつても因果として生涯人交りの出来ぬものも成りますコレも
 前世の約束で汚座いませう 信「其れはどうも氣の毒千萬如何にも惜い者だ、チャア斯う仕
 ませうドーか足を洗つて私の女房は仕ませう、綾川信夫が貰つて女房は致しませう 伯「ア
 マアお前止ヨ、そんな小屋者あどを 信「イ、エ小屋者も宜いコレも人への違ひ
 無い天子でも將軍も矢張天地間生れた人で有る一体小屋者どの穢多だれと云ふ隔てを
 付けたるの訝しな話だ、宜う御座います又小屋者を女房は仕たと云つて笑ひ、笑ひ私
 只心が惜いから女房は貰ひませう 作「コレは怪からん綾川氏お手前妙な事を仰しやるが
 貫公は何ぞグスナ好い女だから女房は仕やうと云ふれでせウどうも好い女の徳が有るも
 のですチー 信「イヤ是の思ひも寄らぬ事を仰しやる私仮令好い女でも心が悪ければ決し
 て…… 作「イヤさうさう有るまいに録が美人だから貫公が引摺り込んで御新造になされ

るのでせウ 信「私ハ顔容よの迷ひません 作「デモ若し此女の顔が悪かつたら貰ひな
 さいませまい 信「イヤ私の顔で貰ふのでハ無い是が今悉く懺悔をした其心は感心去て貰
 ふと云ふので貫公こそ顔は迷つて惚れたのをせう 作「ナニ手前決して顔よの迷ひません
 信「顔は迷ひなければ此家お身に迷つとかチー 作「是の怪からぬ身代は迷つとどの、ウ
 ーン 信「身代は迷ひんと云つても伯母の姪が此家の世取り娘だと云ふから養子よ来といと
 云ふので、殊に此賈れお桂を子一口説た事が有るさといふ事、今是が小屋者で有ると知てソ
 レハ免れだと仰しやるのハ即ち形ちよ迷ひ身代は迷つて養子よあり度いと仰しやつた証據
 で、其形ちが無くなつて仕舞つて全く心計りよ成と時よ何も仔細ないら私ハ心よ惚
 れて貰ひます貫公ハ屹度形ちに迷ひ身代は迷つたれた、左うでせウ 作「左うでせうと云つ
 たつて初めから小屋者と存じて居れば 信「ソレ其通り存じて居れを云ひないから形ちよ惚
 れのたで、私ハ今小屋者と知て録の形ちが無くなつて心一つは感心致したから其心どけ
 を女房は貰ひ度いと申のた 作「心ろだけでも 伯「マアお前ソんな者を貰つてどうなる
 へ 信「ナニ私ハ私の了簡が有りませ 伯「デモ其んな者を女房は貰つれば村に居ても誰も交

際人が有とませせんヨ 信 ソンな分らぬ處から此地ばかり日の照らぬから何處へも参りま
 せ 作 何處へ行ッても交際人が有りませぬ 信 交際人が無ければ無くッても構いません
 私ハ 私だけ稼ぎをして夫婦で飯を喰ッて生きて居ればソレを宜い 作 それぢやア……
 ウーン、ドーモ大層汚意入りましとチー 信 伯母さん私ハお録の足を洗ッて遣りたいと
 思ひます此お桂の命を助けた恩義を謝する爲め足洗ひ金を出してハ下さいませんかそう
 すれば、私と掛合て女房貰ひます、ソレあらツと云ふのそ伯母が幾許でも金を出さうと
 云ふ事は成ツたから其村の番太から小田原の番太へ話しを致して小田原の方から元の江戸
 へヨリを戻し重助といふ者へ話をするると重助の死んで今娘の代に爲ッて居るがモ一喜三
 郎も死んだら雑作もなく話が纏りましたのでお録は足を洗ッて夫婦もありました處が成
 り成たが別居る處とても無え又其話を聞いて誰も媒介をする人が有りませぬ田舎など
 での猶更斯う云ふ事が堅いから 田 トンでも無へマ一番太ナ一女ア女房貰ッて、と怖
 かないナ一、モ一彼の寺へ行くな、といふ風で御座います、此事を勸戒和尚と話を
 するソレハトンだ面白い事だ私が媒介を仕やうと飛龍山了義寺の勸戒和尚といふ大知識が媒

介と成ッて村の家を持つて處が前中上げさせる通りで誰も寄り附き人が無い然れども構
 ずふ夫婦中能く暮れて居ッたが或日信夫が考へを起してまだドーも此日本ハ開けぬ事
 り人々を輕蔑する實に殘念な事である併し人が交際なければ仕方が無いから二人を世に知
 れぬ國へ往ッてドーか山を開き畑を開き人の爲め成る事を志して生涯の分らぬ者を教へ
 悟り隱徳を積んで生涯を終らふで無いかと云ふとお録も貴公の心に従ひ何方へも参
 りませうト云ふ信夫の少々心當りが有りまして是から伯母に路銀を貰ッて二人で其
 處を出立致して北海道へ赴き峠下村と申處で開懇を致すといふお話でございますがまだ此
 跡の復稿のみで纏りかねて居りませうといづれ其うち拙作は取り掛る都合でございます

蝦夷錦古郷の家土産終

怪談乳房樓

三遊亭圓朝口述
松永魁南筆記

第一席

借當晩より引續きまして御機嫌を親ひます怪談乳房樓と申しますお話しは、江戸名所圖會にも載てをりますが高田砂利場村の大鏡山南藏院といふ眞言宗のね寺の天井へ雌龍雄龍と墨給て書ました菱川重信といふ人のお話して此重信は雄龍だけと彼天井へ書まえて非業な最期を遂げて終に望みと果しませんから死によしてから幽霊が書懸ました雌龍を又書たと申す事で末には赤塚村の乳房樓の前で七才に成ります重信の遺子眞與太郎が父の跡を討ちますといふ凄いな話してございすが、何家業でも人に名人だ上手だと稱れまます程な人は其致します事にも魂しひ、精心が這入と申事で、取分まして書師なをば書た物も魂をひが這入たといふ事は、聞ます所で、古法眼元信の描ました馬は夜あゝ、脱出まして萩を喰べたの誰か精心を籠めて書た龍は水を飲みに出かけた杯と古來から言傳へますが、其内

でも圓山派といふ一派を廣めました圓山應舉などといふ人の名人でございませうが此應舉先生が不斷飲みに出なされる京都の或る所に料理店がございましてが此内は老人夫婦に娘が獨りあるといふ極真面目に甘味物計りを喰せる随分流行見世でござりましたが物には盛衰があるもので近頃はさつぱりと客がない、應舉先生は大人でございませうら流行はやらな

い杯は順着あさいませんで「今日は何か甘味物があるかの一杯つけて呉れるナンカとれ出に成さず、寂れましたもんですから内の普請や繕ひも碌々に致しませんから根太が腐敗して内へ惣体曲りが出て襦袢や障子の開閉が思ふ様でない疊はといふと一昨年七月裏返したッ切で真黒に成つて所々へ未練に糞紙なんぞを櫻の花の形に切つて張つて破れを胡麻かしてある、先生は娘に酌をさせて酒を召上つて出で下から上つて参りました主人は手をつままして「先生様毎度御最負にお出下さいまして有難ふございませう斯様むさい所へ應「イヨ……誰かと思へば内の御亭主か今の造り身の例も手際じや一ツ呑んか、ナド、物に頓着なさらぬ應舉先生、主人の老人は盃を受まして見世に寂寞ました事を話しまして「どらか先生機元の様に繁昌致しまする御工風はございませぬかと水ッ鼻と涙を交せましてサ

ますと應「夫は氣の毒ぢや……が案事ぬがヨイツ己が今度来る時に元の通り見世が繁昌する様に何か認めて持つて来て遣はすッ亭「夫はマア有難ふございませう 應「今度参る時に急度持つて来るぞと其日はれ歸りに成つたが四五日置まして先生は風呂敷へ包んだ物をば持参で

れ出になつた 應「サア約束じやから認めて持つて来たぞと直に其懸物を床へ懸させまして其日も相變らと思ふて床へ懸る計りにして持つて来たゾヨと直に其懸物を床へ懸させまして其日も相變らず酒を飲でお歸りになつた、跡で主人夫婦は悦びましてどんな物を書いて下さつたかと件の軸の畫を見ますと幅の廣い絹地へ二十歳か十九計りな美人か病揚句と見なまして髪が亂れて斯ふ……顔へ懸つて立膝をして右の手で脱た髪を撫みまして左りの手で斯ふ……其毛を思はず絞つてをりますと其手へ血が滴つてをりまして傍にぼんやりした薄ッ暗い角行燈かあるといふ此傍に据つてをる美しいから如何にも凄いとトト四谷怪談のお岩が鬘梳場の形容でよくは出来てをりますすが潰れ懸つて今日は見世を付舞ふか翌日は戸を締やうかと思つてをります所へ思ひしい書でございませうら主人の爺さんはエ、延喜が悪いとんな物と眼をむき出してイヤ怒るやいとどか大層怒りよした

主人夫婦は怪ろしく怒つて居り升所へ、應舉先生が例毎の通り遣つて出なさいました應舉「どうだナ今日ハ珍らしい物があるカナ一杯飲してくりやとトン／＼二階へ上りに成ると昨日の軸が床に懸けてある、日頃最負にして下さる大切な客様だからいつもは婆さんと娘が飛出して来て世辞をいふのだが今日は如何したのり無相想で着さぐ悪い、頓て主人の爺さんが二階へ遣つて参りまして 亭主「旦那さま昨日は有難ふムい升と禮を言ます 應「イヤ是は亭主さまのふの懸物を早速かけて呉て悦ばしい何とよう出来たらうナと少し自慢氣で仰しやると主人は變なあんばいで……亭「へい………ですダ先生様昨日下さいました懸物の書がどうもハヤ少しと一日腹は立ましたが遣がに面と向つては言れませんでした口籠つてをり升のを早くも見て取つた先生應「ア、然うか何う………凄い所を書いて遣はしたから書柄が悪いと申すのじやナ 亭「へい何でムい升から何で、實はアノは存じの通り商賣が閑暇でこんな寂實ましたモンだから書を願ひましたので夫にアノナ女の病人なんすの延喜の悪ひ淋しい書では愈々客さまが來なく成り升からあれはマツ眞平は免下さい升と

額へ汗を滴して手拭ひで拭ながら申す先生はお笑ひなすつて應「ハ、ハ、如何にも亭主手前が氣に懸るのは尤もじやヨハ無理ではない己が今参つた時にいつもと違つて入らッしやいとも何共申さないから如何致した儀かと存じをつた所じやコレ拙者がナす事をよく承はるがよいダ、酒を持って参れ、コレ然う眞面目で居てはイカンナ、困るよ………アレは斯ふいふ譯じや陰は陽に歸るといつてノ何事も極度迄参れば又元へ戻るのが物の道理で其方の家も左様じや簡様にサヒレ果て今日にも廢業休業やうとまで決心いたすのは是即ち陰の極度まで参つたので此上は元の陽に歸するより道がない、己れが昨日認めて遣はした書も其通りじや、女が病ひに苦しんで死ナン／＼と致しをる思はしい圖じやダ是陰の極度で最う爰まで参つては是から徐々陽氣に歸るより仕方がないもので、其方の商賣連も斯うサヒレて陰氣になつたから是からは昔しの陽氣に赴くのが順道じや陰氣の書ではあらふが己も身不肖ながら圓山應舉じや意に思ふ處があつて認めたらノ軸外さず懸て置け陰も陽にかへる時節があるすと毎例の通り酒を召上つて先生はお歸りになりました、跡で爺さんや婆さんは額を集めまして相談をいたしましたダマア最負の先生がアレ程仰しやつた

事恰度懸物は皆んな賣却て仕舞つてない所ですから其儘懸ッ放しにいたして置ました、然
 ん致しますと忽ち此評判が京都中へ弘まりまして「お前彼處の幽霊の書を見ればれたか應
 舉はエライ者じゃアノ女が斯う……遣つてゐる髪毛から血がヌラ／＼滴つてをる凄
 さ私し杯の夜サリ寐たら夢に見てウナサレました「イヤ私また見に行くん二朱計り遣ふて
 飲にいつて其軸を見て來ませう」ホンニ見て來やしやれエライもんじやサカイとワイ／＼
 と市中で噂さを致します、サア繁昌を致しましたのは此料理屋で一年ばかりの間に此懸物
 の書を見たいといつて來る客で思ひ懸なく商賣があつて二年目の春に毀れ懸つてをり升
 た普請迄致し元の通り立派な見世に成つたといふ、また應舉先生の腕前の勝れた所も諸
 人が知りまして高名の上にもまた高名な先生に成遊をして、諸大名より幽霊の極楽の所を
 絹地へ書てくれまた此方からは「唐紙半切でい、から一寸と小粋な幽的をナンツと山の様
 に御注文があつて唯今もつて應舉の幽霊の書と申しますと高價な物だろうにムい升、此應
 舉先生の幽霊の書はあながら魂しひが這入て動き出したといふ譯ではムいませんが名人上
 手と成り升と随分不思議な事があり升もので高田砂利場村の大鏡山南藏院の天井へ雌龍雄

龍を墨繪て書れました菱川重信といふ書書の先生は、此れ方は元秋元越中守様のは家中で
 二百五十石を取んなすつた間與嶋伊惣次といふ人てムい升たが生得書がね好きで土佐狩
 野はいふに及ばず應舉、光淋の風をよく香込でちよつと浮世繪の方で又平から師宣、宮
 川長春など、いふ所を見破つて其上へ一蝶の艶のある所をよく味はつていかにもね筆先
 が器用で一寸書く書が活て居る様だといふ高名を慕ひまして書を書いて下さいと頼み人が大
 ろうあり升、家中では頻りに此事の噂さが高くなりまして間與嶋は書をよく書くさうだ書
 の禮計りでも樂に暮される羨やましいなと、ヤツカム族が澤山あり升、其頃は世が開けま
 せんから少し利口だとか學者だとかいひ升と直に公儀かられ糺しがあり唯今さら探索が
 あり升から間與嶋は自然とお上のね首尾が悪く成り升て何も是といふ落度はムりませんが
 終に永のね暇に成りまして柳嶋の或る大商人がをり升た寮を求めまして是へ引移りました
 が二百五十石も取てた出のお人だから何不自由なくれ好きな書を書いてお暮しなさい升たが
 れ年は三十七といふのでよい男ではないが元がお武家ながら何となく立派で品のよい人
 だて此または家内のおきせ様といふのが頗る美婦でいらッしやる年は二十四でムい升が

容貌がいひせへか廿歳位に見えませんが、役者の瀬川路考にどてやら髭が似てゐるからといふので……誰いふとなく柳嶋路考とどてやします

第三席

間與島伊惣次様の内家内ねさせさすは前もつて申上り通し柳嶋路考といふ噂をされる程お顔ふる美婦であり升が却つて是が其身に災ひを及ぼす種と後ちに思ひ當ります、夫婦中は至つて睦まじいが満れば餓るゝやらでれ子さんがない、よく譬へに金のある方を祿人といひ子のある人の事を福人とかやしますが此重信先生にはれ子がない故どうか一人はしいものだと神へ願込なを致して居り升たが人の一心は貫くものでねさせ様か懐妊にれ成りなすつて酸ばいものぐ喰たいといふ重信先生は大悦びで、何でもなさらないがお醫者にかけて薬を飲せる、高い所をへは必らず手を上げてはならんツと大事になされ升、十月満ちして寶曆二年の正月元日に出産がムり升た然もか生れになつたのは男の子だといふので重信先生はコロコロ悦ばれまして名を眞與太郎と號けまして蝶よ花よと慈愛んで育てられ成人をするのを待兼てお出なさる、恰度其年の三月の事で向島の櫻が眞盛りで取

わけ今日は十五日故梅若でムり升から花見がてら参詣しやうとおきさせさまは丸岳に結び交してまだ元半服で下女と五十一に成り升正助といふ親仁を供に連れて重信先生は細身の太小黒の羽織、淺黄博多の帯雪駄ばきで眞與太郎を下女に背負ましてコロコロ雑沓の中を梅若へお参りなすつて歸りにれ寄になり升たのり小梅の茶屋でムり升たか、此茶屋の婆さんは柳島近所のもので馴染でムり升から重信先生は門口から重「どふした婆さんいろがしいかのと聲を懸け婆「チャママ誰方さまかど存じ升たら柳島の先生さまは新造様チャ坊ちやんを連れなさい升て……ね花見でムり升か夫はママよくれ出で……チャ是は正介さん、ね花どんもれ供デは苦勞さま、今日は梅若さまの涙雨ツテ昔しからいひまして雨が降るモンでムい升がママ降りませんでよいは都合で、モウれ子様方をお運遊ばして道でお降れなすつては覽遊はせ夫ころ大變でムい升、チャママまだお禮をやしませんで、先達ては誠に結構なれ菓子と澤山下さいまして有難ムり升内のあなた爺いなんがは生てからアンナ結構なれ菓子は見た事はないとやして悦びましてサあなた、有難ふムり升た、サアお茶を一ツ、モウイケない濃茶でムい升と獨りで饒舌てをり升、重信先生を初め皆床机へ腰をれ



懣なつて眞與太郎に小便なを遣つてをられましたが重信先生は隅の方に腰を懸て後ろ
 向に成つて辨當を遣つてをり升三十計りの色の黒い男に聲を懸てして重「チイ〜其處に
 居るのは竹六ヒやなアいか、此竹六ヒや升人は淺草田原町にをり升る地紙折でムリ升が、
 只今は其様ものはいムせんが此頃は地紙折と申して扇の地紙と骨を箱へ入れて包んで脊
 負ましては花見なんの場所へ商ひに持つて参りますので、是はよく人が即席又盡や書、
 詩歌あを扇へ書き升事が流行せしたから夫を直に其座で折まして骨をさして出すといふ
 夫は手際なものださうにムリ升、竹六は重信でムい升から「イヨ……是はどなたかぞ存じ
 升たら柳嶋のれ先生さま、ね新造さま、坊ちやんをね連遊はして花見、さうも誠に奇
 麗で、イエ存外無沙汰をいたし升た、イヨ是は正介さん、お花さんいつもお美しいね
 今日ばね新造さんのね供で白粉とれつけさると平常とは違ふよ容貌がすつと上るからを
 かしい……」エは無沙汰を致し升たのは此三四月頃はあなた書齋會が多ふムい升ので何か
 席上へ参つて慾張筋で傍から地紙が買れますもんですから終〜無沙汰に相成りまして
 ども恐れ入升、正介さんアノ節はどもや譯がない大層酔ましたもんだからサツパリ道

を忘れて、さう〜お前さんに送り出されるナンテ、夫と私はちつとも知らない位な物
 はない杯と如才ないうら下女下男に迄世辭を振替てをり升 重「イヤ眞様を事いよいよアレ
 限り来んから如何したかと思つてをつたよ少々頼み度事があるから一寸来てくれんか 竹
 へイ早速上り升、エ、明後日はきつと上り升 重「お前が来るといふのは當にならんがまた
 待ぼうけはいかんよ 竹「イエども致して今度は大丈夫デ、ナニ大丈夫デムい升……エ、夫
 に先日願ひ置ましたアノ金地の細物はまだエ、お認め下さいませんかナ 重「チ、あれかあ
 れはまだ認めんよ 竹「大方まだとは存じ升たか、先方でも急には出来んが其替り出来れば
 先生様のだから大した事だと申してをり升た、さうも定例は新造様のね美しくい事此砂ッ
 ぼこりのなかをお歩行なすつてもちつとも汚れをいくらゐるものはない、エ、坊ちやんエ
 、私くしてござりますよ竹六で、たけ六爺やアサ、エ、先生によく似て入らッしやるツテ
 瓜をニツテ、一ツお笑ひなさいままと眞與太郎とあやしてをり升 重「夫ヒやア竹六明後日
 は急度で有らふなよいか待つてとるよ、コレ大きに世話であつたと茶代を幾等々遣はしま
 して重信主従は出てゆきました 竹「エ急度明後日上り升、は新造様お氣を付けていらつし

やいまし、ソレ石が有り升、から危ねへお花どん鹿々々かしいからいけねへ坊ちゃんを香負だから氣を注ぎくつちやアいけませんへエお静かにと重信の影の見えなく成る迄見送つてをり升 一竹六さんアノは新造はいつ見ても美くしい子 竹「美くしいナンカンテあのは新造ナンツは美くしいを通り越たのだねと譽てをり升たが最前から後ろの方に腰を懸て休んでをり升た浪人体の立派な人がこちらへ出て参り升て「ニ、一寸承はりたい

第四席

出しぬけに詞を懸られ升たから竹六は吃驚致し竹六「へエ是は誰方さまで少しも後ろにね出なさいますのを存じませんもんだから失禮を致し升た何か鹿想を致しましたら免下さいましと何で詞を懸られたのだから知れませんか頻りに誤まつてをり升、彼侍は深い入丈の笠を冠つてをつたを紐を解て脱ました、年の頃は廿八九位で鼻筋の通つた色の淺黒い疲さすなれ人て此頃ハ流行ましたとか申升五分代といふ奴で小鬘に結て少し刷毛を反したといふ七子か杯の紋付に納戸獻上の帯短かい大小をさしまして「ね前に承はり度と申したのは今彼處へ行れたれ方は何とやう書書の先生じやナ竹「へい左様で、へい何あれは

菱川重信先生とおつしやるね方ではんのね内職同様になさるのでお氣に向なければ書なさいません、夫といふも内福でいらしつやるからテ柳嶋に立派なれ住居で書はまづ探幽を習ひなすつたのですが土佐もよい浮世書もよいと諸流にね渡りなすつたから一派の風で師宣を慕ひなさるもんですから自分て菱川重信とれ付あさい升たが随分は銘人でありしやい升「ハハ左様で有たか實は手前至つて書を好むゆゑよき師をとつて習ひ度と存じをるがどうも所謂長し短かしてまだ師匠と頼む人を見當らぬのじやが只今の重信先生とやらは就れりの浪人と見えて威あつて猛うらず中々は分別が有りさふちね人に見受た我師と頼むは重信殿じやと最前から容態を伺つて居つた……とよか手前アノれ方の弟子に成りたい物じやが如何で有らふナ、竹六は人品のよい人て第一金錢に困りさうもない立派な侍ですから世話をして置たら始終宜らふと思ひますうら如才なく直に承知しまして竹「へエ夫じやア貴君は書がれ好で重信さまへ門入がなさり度ツテ、夫はよいね心懸で、ナニ私しが昨今で斯様事をやしては變てムり升がアノれ方を師匠にお取んささらふナンツは凄しいよ、貴君はお目が強いヨ、毎度重信先生もどうか片腕になる様な弟子をほしい物

だどれつしやつて、夫には都合はよし、は新造はれ美しくしい、貴君は門入なさい先
 生も急度れ悦びでせうと余慶な事を喋々ます、然し内弟子では如何でせうか「イヤ、
 内弟子に参るのでない手前通ッて習ひたいのじやせううれ世話下さるまいかな、竹
 夫は安い事で雑作ムいません譯なしてムい升チ「夫は早速の承知で恭けない、今是に
 て承つたには明後日は貴公が先生方へお出のよしじやが相成べくは其節に身共を同
 道下さるまいかと彼待ひは懐中から紙入を出し升て金入の中から「と幾等か小粒
 を出し升て紙に包み、是は甚だ些少じやが禮の印じや、竹「イエ是は忍入ました子、是
 はどふも痛み入り升た譯合デ、まだ世話を仕ない前からの禮を頂くとは……イヤ切
 角の思召しですから、頂戴致して置ます「どふか納めて下されば手前も重疊じやと
 竹六へ悦びまして金の包みを懐ろへモッく遣つて仕舞まして、シテあなな様のを宅はど
 ちらですか手前が明後日参る出懸に一寸とれ寄りやして直に柳島へれ供を「イヤ、必ら
 ずお出には及ばん手前が尊公の宅へ伺ふからいよ、手前が家は爰に手札がふるから差上
 て置ふか手札を出しますから竹六は「へ、是はれ手札を、エ、成程、本所撞木橋機貝浪

江、様よろしふムり升、磯貝浪江さま、へ、宜しふムり升是で分り升て、急度明後日は
 同道致し升ら「夫では何分れ願みやす、世話であつたナと茶代を置まして浪江は立出此日
 は互ひに別れました、竹六は意の内先づ此人を世話をして置けば地紙は賣れる稽古の爲
 だといつてドウサ引の美濃紙の外に書帖が賣れるシ書齋會などにも一人でも書書の殖ふた
 方が商ひが有ていゝ兎角氏子繁昌だとは是から約束を致し升た其日に此浪江を同道しよして
 弟子入を致し升た所か重信も殊の外悦びまして早速書手本を興へなごしましたか浪江は少
 しは下地があり升から一寸と器用な質で此月より毎日通ひます、くどくしい所は省客ま
 してヤ上ますが此浪江の以前は谷出羽守様の藩中で百五十石を頂戴した侍ひの果で當時仔
 細あつて浪人はしてをり升が身成を崩しませんで前ヤ上り升た通り年は二十九でちよつと若
 み走つた男で諸事如才なく立廻りまして先師匠を大事にするの不思議です、夫に眞與太
 郎を頼りと可愛がりまして彼川柳にも「子ばんのう親ぼんのうの下心」など、ヤして誰も
 我子の愛には溺れますものヲ自然と此れさせもア、浪江さんは深切お人だと思つてをり升
 夫に下女のお菊なんぢへも折々簪や前垂を不と買て遣り升からイヤ浪江を譽め升事「は

新造さまはんどろに浪江様の様なよいれた方はいませんナカと評判がよろしふムリ升、此年も三月四月と暮まして恰度五月五日の事で存じの通り端午の節句といふので方々へ吹流しの鯉などが上つてをり升、玄關へ二人建でやつて来た男は、小石川原町の萬屋新兵衛といふ人て今一人は、手織じまの單物に小倉の一本獨鈷の帯を帯ぢやらしの襟にびまして夫て伊勢の壺屋の紙烟草入をさしてをり升が紐かゆるんでをり升から歩行たんびに取れ掛つた金物がバク／＼いつて烟草の粉が出るといふ極質柿の人で玄關へ來まして新兵衛「へお頼み申升、たのもう

第五席

どうれ……と下女のれ花が取次又出まして敷臺の所へ手を就きましてれ花「どちらかられ出なさい升た新兵衛「へい私しは小石川原町の萬屋新兵衛と申升者でどうか先生様へチトお願ひや度事が有つて参り升たが御在宿でムリ升ならお目に懸り度とれ取次あすつて下さい升と丁寧にやし升お花は「へい新兵衛様とれつしやい升か暫らくれ待下さい升と奥へは入り升て重信の前へ参り是くだどや升、重信はまだ聞た事はない名前だが大方齋の事

で来た人と思ひ升から此方へお通せやせ、而して奇麗な烟草盆を持って来いよ花「ハイと玄關へ参り升て此よしを二人へチ升から新「左様なら御免下さいと敷臺の處で雪駄を脱ぎ埃杯拂ひましてれ花の案内に通升て重信の居間へ通り升た、重信は敷てをり升たアンペラと唐更紗と片々宛刺合せた坐布團を取除ながら重「イヨ是はれ出で、只今チト急ぎ物を認めてるので取散して御免なさい、ア、危ない繪の具皿をろちらへ片付テ、エナニ夫でヨイ、アンペラの、敷物を上る、むさい處でサア爰へれ出なさい、夫では御挨拶が出来ません新「イエもう其儘で、決して構ひ下さい升な重「イエ何も構ひやさぬ、扱是はれ初らに、ハイ私しが重信で、小石川からダツテ、御遠方うられ出では艱途中が暑かつたらう、ハイ新「是は始めてお目に懸り升た私事は小石川原町で酒を商ひをり升る萬屋新兵衛と申ものデ又是にれり升るは高田砂利場村のれ百姓で茂左衛門「へエ私しは茂左衛門と申升る者デ重「左様でムつたり私しが重信デ……何ぞ御用でお出に成つたか新「へー早速乍ら申上升が先生さまの御高名をれ慕ひ申まして願ひ度と申升るは手前が壇那寺で高田砂利場村の大鏡山南藏院といひ升眞言宗の寺がムリ升るが今度本堂から庫裏は申すに及びません

が薬師堂迄普請出来に成り升たが手前共は皆世話人てムリ升テ、イエね構ひ下さい升な、
 「イ是は結構な茶で、イ是は……其天井や又は杉戸襖杯へ書を掛けて頂度と夫を願
 に兩人の者が揃升て願に出ましてム升、モシ茂左衛門さんよくお前さんうらも先生へ願
 申たら宜らふ 茂「ア、エ、私しノからも願ふたア、イ是は先生様、今度普請がタマゲて
 立派に出来たに付イ升て何でもハア杉戸や襖へ書……掛けて貰へ申してへ、成寸書は賤や
 カナ物がエヘツテ私しイ思ふには、櫻が一面に咲て居る所へ虎が威勢よく飛んで居る所を
 彩色てコウウ派に掛けて下せへな、重信は是を聞升て變な事をいふ人だと思ひ升から 重「櫻
 が花盛りの所へ虎が飛んで居るとは面白い取合せテ櫻なら駒とか、イヤ、それはマアヨイが
 れ頼みの專は承知仕升た、寺の合天井なとへは手前遠より掛けて見たいと常から心懸て置た
 物もあるが、大ていの書師の墨書で飛龍とか又は一疋の龍とかエテ認むるモントやが拙
 者は雌龍雄龍と二疋を墨書で掛けて見たいと思つてとる所トやから其雌雄の龍を掛けて見たい
 物で有る 新「成程よく堂宮の天井には八方白眼とかいひ升龍が定まりで掛けてムい升が先
 生のは雌龍雄龍を二疋掛けて下さるとは夫は珍らしい 茂「何イ描くツテ 新「ナニサ雌龍雄

龍を墨書で掛けて遣らふと仰しやるのサ 茂「タマゲタテ夫りやアお角力取の名ケへ 新「分ら
 ない角力の事トやアない龍の事だヨ 茂「何龍の事トしたツテ、私しイ考へトやア襖をどへは
 墨書トやア淋しいからナンでも彩色して此方へ兩國橋を掛けて彼方には殿が大方う出て夫で
 花火がボン／＼と上つて居る所の書が宜ンベエと又とろしい事を言ひ升から 重「ハ、ハ、ハ、
 まさか寺方ナンツの襖へ左様なものは描レンがマア宜しい又何う趣向もムらふかられた受合
 やさふ、早速明後日送りうら取懸ると致さふ 新「夫では早速に取懸り下さい升か……イエ
 夫に付升て先生へお願ひダ……エ、ソレ高田から此柳島まで襖や杉戸などは兎も角も天井
 を掛けて参るといふ譯にも参りませんから甚だ恐れ入り升がどうか出来上り升迄、本堂も至
 つて廣ふムリ升かられた泊り懸にいらッしやつて認め下さい申すさいウナ 重「成程尤も
 じや、イエ宜しふる却つて宅より氣が散んでヨイ、夫では下男を一人連れて泊つて居て描
 て進ませせうかな 新「夫ハハヤお開濟テ有難ふムい升と新兵衛は懐中の胸巻より紙に包ん
 である二十兩出し升て、是のお手付といふ譯では座り升ぬかほんの世話人から預かりま
 した二十金どうかれ預かり下さいまし 重「イヤ是は金子デ、ナニ二十金トへ、何こんな心

配に及ばん跡でよろしいに然し折角だらけ預り申して置升ふ 新「左様ならば明後日は待受申してをり升る 茂「先生様また明後出逢ひますべし 重「マアよいではナイカ只今何か、冷凄を然う申し付たと申からマアよいでは、一寸泡盛でも、到来致した物があるから新「イエ道が遠ふムり升うられ暇をと新兵衛と茂左衛門は暇を告げて高田へ歸りまた、重信先生は兼て寺などの天井か杉戸へ丹精を籠めた書を揃て後世へ残し度といふ了解ゆる内々悦び升て翌日より支度を致し升て正介といふ家來に繪の具箱と着替の衣類などを包みにいたし是を背負せよして五月七日の朝柳嶋の宅を立出で高田の南藏院へ赴ひました、此留守中に大變が出来致すといふ小口に成り升れ話しで一寸と一息吐まして又申上ませう

第六席

扱菱川重信は下男の正介を連まして高田の南藏院へ赴ふきよした跡はたきせと子供の眞與太郎とお花(前號にお菊とせしは誤りなり)といふ下女斗りてムい升から爰ろと思ひましてお淋しからふといふので磯貝浪江が毎日缺さず留守を見舞ひます夫に地折紙の竹六も参りましてはいろくへ機嫌を取りましてワウワといつてはたきせやれ花を笑はせすから晝

の内は随分賑やかですか皆夕方には「また明日伺ひ升坊ちやんあしたはよい物をお土産に上げ升左様ならお花殿お氣をね着けよといつては歸り升ので夜は入つてはひつろりと致し升殊に柳島邊りてムい升から田畑が多く唯今のやうに家並にはなりませんくら淋しふムり升ト或日の事でムい升たがいつもの通り浪江と竹六が來まして暑氣拂ひだと泡盛などを出升たが果ては酒がたまはして飲む口だから竹六はすふるくに酔ました其内日が暮懸り升て灯ともし頃浪江は歸らふと致しまして 浪江「コウ竹六けふは大分酔たね、灯りがつくよ最ふよからふお暇にいたさふではないかコレサあふない、左様酔ちや困るノ 竹六「ハイ歸り升是からスーウトは歸宅と致し升ふダかどうも今日は大ろう頂戴したモンだから大酩酊コレは強い……ア、コレはエライ、どうも名代の本所丈ひとい蚊だコレは殿しい、先刻ツから方々喰れ升た、後新造様が竹六羽織をぬけくどおつしやつて下さるが私しやア熊どぬきません、ぬがぬのはコウ是を足へ冠せて置くど少しは足へ蚊が留らぬ、即席に足丈の纏を拵らへるといふはエライ竹六は智者者だ……こんあ強い蚊の中へ此れ美くしいは漸進を残して旦那様は高田へいらつしやるナンテお可愛さうマヨ……私しやア此中へれ

獨りた置やすのは可愛さらで成りません 浪「ナンでもよいからお暇を致さふ、竹六モウ
 灯りがつくヨ、先生がね出ならよいがね留守の事なり餘貴公の様に物がくといと新造が
 ね嫌り遊す、サア一所に歸ふと云ば おきせ」イエ 浪江様「ア宜ふムい升直實にいつも面白
 竹六さんでムい升子へ 浪「イエ夫でも餘り遅ふ成り升ては濟ませんサア竹六一所に懸や
 うと急ぎ立ますが酒飲の常で中々立ませんテ落付き腐つてをり 竹六「何一所に私ごと歸る
 ららツテ、イエは一所に歸ると仰しやつたツテ貴君は撞木橋わたくしは淺草田原町だから
 道が違ひ升私しやア押上の土手を真直に行ますエ、イ、のだから免を蒙り升、左様あら
 ね暇、ね花どん大きにね世話ドツコイシヨに成り升たハ、、、、とよい機嫌でヒヨロ／＼と
 立上がり内玄關の所から雪駄を突うけまじして「左様ならまた明日伺ひますは機嫌よふ
 せ「アレ危ない花やろて迄見てね上申しな 浪「イエね構ひなさい升な打捨てお置遊ばせ構
 ふと限がムり升の竹「ア、眞暗に成つたエイと一杯さげんゆゑ急いで参ります、浪江は少
 し跡へ残りまして 浪「イヤ困つた奴でムり升酒を頂くと平常とはガラリと變りまして
 ツコク成り升から誠に、イエ私しもね暇をいたし升ふ 浪「マア貴君よいではムいません

かね歸りに成り升と跡は女計りてムい升から誠に淋しふムり升テ 浪「ね淋しふはムり升ふ
 が其代り眞與太郎さまが入らつしやるからお暇やかで 浪「ナニ坊みむづかられ升と誠に
 賑やか過ぎて困り升オホ、、、、と愛敬がこぼれる様だ 浪「ナンに致せね暇いたし升ふお花
 どん跡をよく締りをなさいヨ、左様なれを機嫌よふ 浪「誠に今日は失禮を、花やソノ
 ね手燭を、イエなけれを籠ぼんぼりでもよいヨ、ね送り申して 浪「イエお構ひ下さい升な
 と浪江ハ禮義正しく立出ました夕門を出たかと思ふ頃アイタ、、、、、ねさせは籠ぼんぼりを
 上げまして 浪「おゐた如何かなさいましたか 浪「アイタ、、、、、強く差込ぐと横腹を押
 へたなり小良りを致し升て、ウーンといつて玄關の敷臺の所へ顔の色を變へて倒れました
 れさせもね花も胸りいたして 花「浪江さまどうなされ升た 浪「貴君ね彌でも 浪「ム、苦
 しいわ……………私しはを……………折節かやうな事が、手前の藥人の中に熊膽がイエ能の膽ガム
 り升からどうぞね湯を一ツ頂戴 ね早くク、、、、下さいと男の積と見えて見る間顔の色が
 青くなり齒を喰ひしめまして苦しむンといつて反ますうら 花「浪江さましつかりあさい
 きせ「貴君確り遊ばせ只今お湯を上げ升から 花「私しは押ておけませうとテソ／＼と肥

濡た下女のれ花力が三人力もあるといふ眞赤な手を出し升て、私しが押して上ませう、爰
 てムい升か 浪「有難ふ是の憚り、其處デ花「最ふ少つと下デ 浪「よろしい、ア、是は苦し
 いウンムー、本所に蚊がなくなれば大晦日といふ川柳がムい升が五月といふのだからひと
 ふムり升ウンくど蚊が群り升くら ムいせ「ア、是は強い蚊であんまり端近だし爰て蚊が
 喰ふから奥へれ連れ申しな 浪「イエ是でよろしふムり升決して心配を今直に納り升から
 是で宜しふ 花「イエあなたは遠慮遊を志升あヨ斯ういふ時は仕方有りません

第七席

浪江は汗をかいて余程苦しい容子でムい升うらおさせと花が氣の毒でなりません 花
 「サアあなたれ奥へれ出遊ませよ 浪江「イエ是でよろしふムり升ア、苦しいドウモ痛い……
 ……イエ先生がお出ならこちらへ一泊願ひたいと存じ升がお留守ゆるえやはり是で、今直
 に、暫時落付ますまでれ置下さいれさせ 「アレれ物堅いそんな遠慮はいりませんヨあなた
 た花 「ほんとうでムい升ヨお差込なんぞの時は堪らない物デア、是は強い蚊でムい升させ
 「夫では斯ふ遊ませ爰では冷ますといけませんから花や客間へれ連申してアノ蚊帳を釣

てれ上やしな、あなた少し横になつてゆつくり遊せバ 浪「イエ決してアイタ………れ適
 ひ遊ばすな矢張爰でお花殿に押してれ貰ひやすと余程堪へよふムり升 花「アレまだ其様事
 をれつしやい升ヨ新造様があんなにれつしやり升からあなた入らッしやいヨ ムいせ「サア
 せめて貴君客間へ 浪「夫でいどうも心が濟ませんダ花「サアいらつしやい、サヤ私に確
 かりれつかまり遊ばせ、不斷鼻薬が飼てあるから其心切な事は、おさせも俱に介抱いたし
 まして辭退をいたす浪江を奥の客間へ漸く運てまゐり花はまめくして蚊帳を出し升
 て釣りちよつと郡内編かナツの小夜着を出して枕元への烟草盆に盆へ素湯を汲でもつてゆ
 くよくれ手當が行届き升、此客間といふのは八疊で花月床といふやつて爰から四尺程の梅
 の柱で張ました廊下を隔てまえてれさせが寝てをり升六疊の座敷で、やはり花は浪江の
 胸を擦つてをり升、浪江は暫時苦しんでをり升たが大きな落付たと見えて癪の癖で少し
 落付くとスヤく眠るものて花はさすつてをり升たが浪江が寐た様子でムい升くら花「
 アン新造さま落付ました様でスヤく眠りなさい升たヨと小聲でいひ升させ 「夫はマ
 宜つた、うつとしてお置ましたれ目が覺めでもして差込といけない、れ前ろつと蚊屋を出

て表をへておまへもね寐病人がいらつしやるからいつもの様に寐坊をしては困るよう
予眼さどくえてれ呉れ花「ナニあなた今晚はほんとうに寐は致しませんと目の覺ぬ様にろ
つと蚊帳から出ました是うら方々の戸締りをいたして、左様なられた休み遊をせ用があつ
たら直にれ起し遊ばしてどお花は一間隔てました己れか部屋へまゐりました、ねさせも先
へ寝かし升た眞與太郎が今夜は大人しふい升からは是も起すまいと蚊帳の中へそつと這入
り、サア坊やほんとうに寐ねをれしと眞與太郎を抱てスヤ／＼と眠りに就きました、下
女は一日立働らいて勞れてをり升から床へ這入るが否哉グウ／＼と高麗をかいて寐てしま
ひ升……………松井町の鐘は空へ雨氣をもつてゐるせい加十間川の流れへ響ひてポーン、
、押上提の露の含んでをり升千草の中ではいろ／＼な虫が啼きつれまして何となく物淋し
い……………彼浪江は時分をはりましてかむつくりと起上りましたが瀬の差込と申したのも元
より作病で日頃から惚切てをり升師匠重信の妻のおさせをどうり口説落さふと思ふので、
先生は留守あり今夜ころはと枕元に置きました脇差を一本さし升てそつと蚊帳を這ひ出し
ましてれさせの寐てゐる蚊帳の内を覗ひて見升と有明の行燈の灯が薄くさして眞與太郎を

欠

MISSING

九浪江が少し可愛く成つてまゐるのが所謂悪縁で此頃ではれさせも満更浪江が憎くなくなりました成程浪江だつてまんざらな男振では無いとせん色こそ少し淺黒いが鼻筋の通つた眼のぱつちりした苦味はしつた只今の俳優ならトント左團次の様で、仕舞ひには「あなた明晩も急度いらっしやいよ其積りでお花をよろへ使ひに遣はし升からなど、れさせの方からいふ様になる、浪江は心中に思ひ升にはおさせと斯ういふ譯に成つたもの、師匠が高田から書を書上て歸つて來れば夫れ切逢事が出來ぬ、どうか歸つて來ぬ様に仕たいものだと考へました元より大膽の浪江で無い升うらフト悪心が起りまして、是はいつら重信を亡きものにしてれさせと天下晴れて樂しまふといふので、五月も過ぎまして六月も成り升た、或日の事てムい升たが浪江は黒の紗の五所紋の羽織に何か縮の帷子を着まして細身の大小、菓子折と風呂敷へ包んで提げまして署い中を高田の砂利場村の大鏡山南藏院へやつて参りました、アノ寺は御案内の通り八門寺と申して上様が鷹野にお成のムり升た時れ等しの鷹ダツテ此寺内へは入つたといふ名高い舊幕様の頃にはやかましい寺で無いし、たが浪江の折を提げて玄關へ参り升て「ね頼みやすうたのむ」と案内を致し升と奥から十



二三に成り升小坊主が取次に出まして「へいどちらかられ出で 浪「手前は先達てより御堂
 山へれ出になつてをる菱川重信の門人磯貝浪江と申もので師匠の見舞にまゐつたのでさう
 うれ取次を願ひたいと懇懇に述べます、小坊主は「はいといつて奥へは入りましたがり引違へ
 て出てまゐつたのは重信の所の下男で正介と申す當年五十一に成る正直もので 正介「ヤア
 是りやア誰かと思つたら浪江さまアよく尋ねてござらじやつたサアこちらへ 浪「イヤ正
 介殿か誠に池無沙汰を疾うにも伺はなければならぬのじやが終何や彼や蟹多て存外は疎遠
 をいたした、先生はれ替りはないかナ、誠に今日も暑いな 正「イヤ途中はさうお暑かつた
 らう此寺などはダ、ッ廣いから風はエラッ道入が夫でせへ暑ッくるしいマアよくたづね
 てお出なすつたダ、サアこちらへ今しつたも先生さまが前さまの噂さアしてた出だつた
 浪「夫では免ト玄關の脇の方うら上りました浪江、天地金の平骨の扇へ何か書が書いて
 あるのを取出しまして暑いからあふいで居る 正「サアズツとこちらへ奥の方が涼しいあつ
 ちへお出なさい 浪「夫では免をうふむつて奥へト件の包みを持まして座敷へ通ります 正
 「一日那樣浪江さまがお出なさい升たト立出ました重信「ヨウウ是は珍らしいヨクマア此暑

さにエ歩行でれ出で……夫はよくお尋ね下された 浪「是は先生誠にはやく無沙汰を疾に
 も伺はんければ相成りませんがツイ此暑さでイエ、暑いと申しては濟ませんが誠にはヤト
 菓子折を包みました包みを出し升て、正介と申は誠に輕少だが先生へ 正「へエ是は何
 んでふい升かど解まして中から折を出し升 浪「イエ召上る様な品ではふい升んが先生は下
 戸でいらつしやるから金玉糖を詰めて腐らん様に致して持て参り升たさうか召上つてト折
 を出し升た

第十席

重信は悦び升て 重信「是は誠に忝けかい私しは下戸だから菓子を喰べたいと思ふても爰
 等は邊鄙ゆゑ菓子といつては毎朝本堂へ上つた落雁などのトント甲子の七色菓子のやうな
 物バウリ茶受に出るので實に弱つておつた所ぢやそこへ金玉糖とは忝けない早速頂戴いた
 さふ 正介「浪江さま茶を上げました少しぬるい、今直に熱いのを入れて上げべい 浪江「イエ
 モウれ構ひなさるな 正「だが子浪江さま、誠に先生さまア長の間だが今度は御自分好た
 仕事ダツテ、此暑いのには夜なべエかけて書を習て居るでれ内へもエンツウ不通だから、已

ちよつと内へめへッて御新造さまや坊ちやんノウ安否を聞いて来い〜といつても、ナ
 打捨て置け沙汰アねへのが變りがねへのだツテ、イヤ書に懸つちやアね可愛坊ちやま
 の事せへ忘れてゐる、マガねめへ様ぐね内へひ度〜見舞つて下さるツテ有難ムヘヤス
 、先生様も浪江が見舞はつて呉れいから安心ダツテ浪「イエ先生のね留守へは折節伺ひ
 まして……然しおまりお氣をな詰め遊ばしてハ却つてお身のお毒には成りませぬヲト御
 精が出過は致しませぬカナ重「ハ、イヤモウ私しも凝性アいけんが、兼て生涯に一度
 は何かと思ふてをつた所ゆる此寺などの天井などは後世に残る者だらうら精心を入れて書ん
 ければならぬが夫に杉戸や襖へも、コレ爰にある標な花鳥かまたは四季の耕作あつて書く
 つもりヒヤこれは皆彩色を仕なければならぬから先へと存じて墨書に取懸ると、世話人だ
 の何のと申百姓衆が来てはイヤ先生夫より兩國の花火の所がよいのヤレ役者の似顔がエ、
 杯とくだらぬ事をやすので蒼蠅ツてならぬから、彩色ものは皆んな跡廻しにいたしてまづ
 是はと思ふ天井に取懸つたのぢや、チ、是は茶か、ヨイ〜まづ浪江殿に浪「イエどう致
 してマツ〜た先へ重「イヤ是は中〜上製久し振て味を覺えました……、イヤ天井の

畫は大ていどの書師が書ても丸龍とか但し一正の龍を認めるのが通例ヒヤグ面倒でも私は
 雄龍雌龍の二正の書わけをいたさふとイヤ拙ない腕でとんだ望みを起してマア漸々の事で
 雄龍だけは出来いたしたタが、只今の雌龍の右れ手を書てをる所ヒヤテマアお前見て下さい
 ト重信も一生懸命に腕を磨いて書ましたから少し自慢氣で見せます浪「イエ是は成程活て
 をり升様で……重「所が開いて下さい畫の内は講中が見てをつていかぬから氣の散ぬ様に
 二三日跡から夜分晝いが本堂の廣いチウ廣い所へ障子や屏風なすを立廻して夜あべにやつ
 てをるのサ、マア是を書上れば直に彩色ものに取懸るつもりだから前もちつと其時は来
 てどうか畫の具でも解ておくれか浪「イエモウ修行の爲てムリ升から其時は是非れ手傳に
 參んじ升積りで、然しどうも大した御精の出ました事で……私しも先生のね側で拜見をい
 たしても幾等か稽古のタツンに成り升から遠より上りましてお手傳をぞ存じてをり升が何
 がハヤ繁多ゆる御無沙汰を……夫に今日は少々無據用事もムリますればね暇致し、また
 近日お邪魔でもれ手傳ひに罹り出ますのでムリ升ラト天井の畫を見まして悪人の浪江でム
 い升がよく出来たのは存じてをり升から、此雄龍のコウやつた活組は……ドウも凄いで

頁に忍入ましたナ重「是はマア出来ん乍らも精心を入れて習た積りテト重信は傍らにムリ
 升園子へは入つてをり升佛像へ指とさし升て、浪江さん此薬師如來の御像を御らんヨ、何
 か是は聖徳太子のね作だともいひまた縁の小角の作だともいふが活てれ出なざる様で、實
 に靈驗あらたの薬師佛で、私しも此た傍に朝夕をるのも何かの因縁と思へバ信仰いたし
 てをるヨ浪「イカさまナル、是ハ有難い實にお顔の容態御柔和で、南無薬師瑠璃光如來
 南無……なと、横着ものサ、殊勝らしく拜みなどいたしてをり升たが急に身支度をい
 たし升て、先生左様ならば今日は少く早稲田の親族の所へ寄り升約束もムリ升からは
 ね暇と重「マアよい浪「イエ遠方でムい升からは是でお暇を、イヤ先生へお願ひ升が正介
 どのへナト上たいものがムリ升うら一寸ね借りヤしても宜しふムリ升うか重「よい所では
 ない連ていつても宜しいが然し一泊いたしては如何ヤ浪「へエ願ひたいの山くでム
 り升が今日は唯今の譯ゆゑ一ト先ね暇を、また出直し升て重「ア、左様かへ夫でい是非が
 ない御隨意に、コレ正介ヤ正「へエ何の御用で重「コレ何か浪江殿がうちに上げ度ものが
 あると言るところから御一所に參るがよいッ正「エ浪江さま、私し上げべエ物があるッテ浪

「夫故只今願つたからさうか一所に正「へエとて迄も行くべし重「何の事とや行くべエ杯
 と困つた親仁じや浪「左様ならば何れ又近日にト浪江ハ暇を告げまして正介を連よして臨
 藏院を出立て馬場下町の花屋とよい料理屋へ這入ました

第十一席

いらッしやいよしか二階といふので兩人は二階へ上り升た正介「浪江さま爰は煮賣酒屋だ
 アね浪江「煮賣酒屋といふがあるものか爰は此邊では名代の是でも料理屋デ正「料理屋ダ
 ッテ魚ナンカア煮て客へ出して左様して酒賣るから煮賣酒屋マンベい浪「さういへバ其様
 物だがさう利屈詰にしてはいかん正「ダガエ、二階だ浪「正介さんお前を爰へ連れて來たの
 は外でもないが田舎同様な所に暫らく泊つてれ出遊ばすうら定した魚なごに御不自由で
 ねた寺ではあり先生へさうかね魚を上げたいから何か焼魚か照焼にして腐らない様だいた
 し折へ詰めてもつていつて貰はふと思つて夫でれ前をれ借りヤして來たが夫にれ前も飲る
 口だから今日はゆつくり一杯遣つてれ出よ正「エ先生へれ魚ア上げたいッテ、夫エは奇特
 奇事だ、また私しにいつばい吞すッテそいつは有難へ浪「夫だから遠慮せずは何でもよい

ものをさういつてエ、正「エ、有難へ、長へ間だ私しも先生も魚ア喰ませぬ、私しなんす
 はろりやア喰つても構はねへが偶さう鯛ッ子の五疋も買つて喰ふべいと思ふと坊さま達が
 羨やましいいモンだうら魚ア焼くなら村の講中の内へいつて焼いて来てくれろなすといふの
 で久しく魚ア喰ひまじねへノサ浪「夫はさうであらふれ寺方では内証は兎もあれ表面は精
 進じやうら夫は當然の事だ定めしお魚を上るまいと思ふから先生へ上げ度とやすので、姉
 さんや、ア、何か吸物に刺身、跡ハ撒焼く照焼なうが宜らふ夫は折へ詰めてちよつと附合
 せ物も成丈腐らぬものをよいか、夫は土産ダヨ下女「へい畏りました浪「チイ〜夫か
 ら爰へも跡で飯の菜に成りさふを物を見立てよいか、チ、夫にちよと話しがあるから用が
 あれハ呼ぶから座敷へ来ずにね出ヨト内々の話しがあり升から来あい様と女に云つけます
 正介はそんな事に一向気がつきませんデ正「ダガ浪江さまね前さまはまた年イ若いガ信切
 なれ人ダツテ、浪江さま見た様な信切な人はねへツテ毎度先生がいふだ、己し馳走になる
 からツテ響るじやアねへヨ浪「イエ夫はなれ前ガ世辭をやすとは聞かない、ダガ師匠と成り
 弟子となれば夫が通例で何も肝心をする所はない當然な事じや正「まだ〜先生ダ、夫に

柳島の内へも時々見廻つてくれるといふ事だから安心ダツテ、私し柳島のお宅へもちよ
 く〜行て安否聞てへのだが、先生一人置いてゆくわけにもナンテ〜から終無沙汰に成つた
 がは新造坊ちやまにはは變りばねへか浪「ないヨれ變りはないた達者じや正「ハア達者だ
 つて夫は、エ、ダガ浪江さま、己らが先生の様な妙な人はねへ、齋師といふものは何でも
 書く物に精心込ねへトヤアナンテ〜から此方へ来て居る内は何事も忘れてゐねへければナ
 ンテヘツテ、夫だから留守にどんな災難があつても夫迄よ、内の事には念慮とか、有ては
 イカねへといつて此方へ来てからまだ手紙一本出さねへのサ浪「ハア左様かサアこんあま
 づいものだがね上りヨ、サヤ一ツ頂くからト猪口をさし升正「イヤまづお前さまから浪「
 マア今日はお前が上客だからまづ……夫では各盃に致さう正「エ各盃とはなんだ浪「成
 程各盃ナンドハお知りであるからふマアそんな事いよいよから一ツ重ねて正「ヤア是は刺身だ
 浪「爰等のものは河岸が遠いからどふいたしても魚か古いからをいしくない正「イヤない
 しくない所か……滅方甘味ア、久し振のせいかうまい浪「是サよく久し振〜といふが
 何か魚を喰はん様で人に聞れると見どつともナイ正「ハア久しぶりといつては悪いか、ハ

イクへます、程能酔せて置いて云出さふと思ひ升から浪江を酌をいたし升ては正介に飲せる
 浪「イヤ正介どんやいろく、れ世話にあるうら遠よりれ前に何かれ禮をしたと思つてを
 つたが是はナあまり少したぐ單物でも買てくれなト紙入の内りら金入を出を升て額を紙
 へ包みまして出し升から正「エ、飛んだ事ツタ、エ、どうして、今日は馳走に成つた計り
 で澤山ナのに此上へそんな物を賞つては罰イ當るだ浪「マアそんな事を云ないでもよし、
 ほんの少しだヨたつた五兩だヨ正「二何五兩何てへ、マアタマケタア、大概一分も賞やア
 澤山でガンスに五兩テツエ、夫に已らが先生さま物堅い變届だアから人さまから故なく物
 を賞ふては濟ねへテナンカと小言をいはるから是はよしにさつせいマシ浪「イエ是はよい
 私しが上るのだからそんな事を云はないて納めてお置正「イエいけねへれ前さまに賞つた
 といふと直に先生に叱られるダ浪「イエ夫なら私しに賞つたと云なければよい正「イエ、ヤ
 夫は直に考づくから浪「是は困つた子と少考へてをり升たが浪「ア、夫じやアテ斯う致
 さふ正「どう仕べい……浪「此お金をれ前に上たいといふ譯を話さふから宜らふ正「ろ
 んなら呉れる譯を浪「話したらよかるふと邊りを見ましたがちよつと一間を隔ててして座
 敷だから安心しよして

第十二席

浪江「正介どん實は今日わざく、れ前を爰に招いたのはト話しがある事サ正介「エ私し
 に話しがあるツて、夫てこんなに馳走をさつしやるのタテ、れめへ様よしなさればエ、
 に今大めへの金賞つた揚句に刺身に煮ざかなのおまへさま勿体ねへワナ浪「イエ折入て
 願みたい事もあるし、マアよい遠慮せず最つと飲みなドレれ酌を仕様……正「ナツ、
 、モツトこぼれ升くア、勿体ねへ一粒萬倍たてばれたもの、再ひ元へは歸らねへツテ……
 ……浪「ダガノ正介どんけふ爰へれ前を招待したも外しやアないよ、どうもれ前は正直な
 人で折くは主人様の先生へさへ間違つた事だツケく小言をいふ、面白い氣前で、ど
 うもアレは出来んヨ、れ前の様な物堅い人と斯ふやつて一杯も快く飲み合ふといふのもコ
 リヤ何うの縁で、夫だうら私しはれ前の様な人と縁を組たいと思つて爰へよんで來たが何
 と此所で私しと伯父甥の盃をして親類に成つてはくれんう如何だね正「何れめへさま私し
 が様な百姓とアンタと伯父甥の盃するどね夫はマアほんとうかね浪「何の虚言はいはず決

してろんな空言ではない、何を隠さふ此浪江は谷田羽守の家來で少々は祿も頂いてをつた
 香じやが生得わが儘ものでどうも窮屈な武家の勤めが嫌ひでならんから暇を貰ひ浪人いた
 してれ前も知つての通り撞木橋に獨身で住つてをるが夫は少くは金子の貯へもあるし何
 もアッセクするにも及ばぬから遊んでをるに就いては需道でも嗜んで世の中を喜樂に送
 りたにつもりてをるが叔親戚、身寄のないの何かにつけて心細いものでならんから此後
 はれ前を父伯と頼みでうか相談相手に成つて貰いたいのじやが正「エ私しおめへ様の親類
 になれッテ、そりやアれ前様ナブツチャアいけません浪「何ッンナなふる杯といふ事はサ
 さね正「イエいけぬへヨ、正介爺い今日馳走して酒エ飲せ伯父になれッテいつたら爺は
 ほんまに受けて、成るべいといつた杯とれめへ様笑はふと思つてカ浪「イエ夫はれ前の當
 推量といふ物で、決して左様なわけではない正「夫ダツテれめへ様士百姓の己なを浪人
 なすつたッテ立派ダ、やつぱり武士ダ、其れ武家様が伯父にしたッテ何にもならぬへから
 嘘だ浪「成程假初にも武士の片端の私しが百姓のれ前を親類にしても話しが合ぬといふ所
 ろへ氣が付たなとは感心ダヨ、只數から棒に成つてれくとやしたのは私しが悪い、届かな

かつたヨ正「エ夫じやア夫にも隠があるのかね浪「サア隠といふのは、今もやした通り少
 々金子の貯へもあるから座して食へを山をも空して、今年はい、來年はい、とペン／＼遊
 んで遣ひあくしてはつまらんくら今の内その貯への金子で田地を買つて其利得でコッ喜樂
 にいたしたいと思ふのだが弓馬槍劍の道と違つて田地の事は知らんも夫を前を伯父に
 頼み相談相手に成つて貰ひたいのじやヨ正「アム……夫じやア貯への金で田舎へ田地を
 買つて引込てへといはッしやるかな浪「さうさ田地をお前に任して置てもよいが其處は親
 類にあらんければ互ひに心に隔があつてイケン物で、夫故伯父と成り甥となり往々私に
 悪い事があつたら腹藏なく意見をして貰ひたいからさ、また只今お頼み申した事を叶へて
 下さればれ前の死水はわたしが取つて上るつもり、何と私しの様も届くものでもよいと
 思うならさう不縁を組んで貰ひ度と夫で先生へ暫時の暇をねがつて茲までれ出を願つた
 のださう正介さん伯父甥の義を結んで下さいナト和らかにいひ升から正介は感心し申し
 て正「イヤエレへ、おめへさまエレへ、タマゲタナ、今の若へ者は是れへ所へ……田舎
 へ田地を買ふといふ所へ氣付といふのはエレへヨ、れめへ様のいふ事か定説からエ、私

し骨折て運るべし、憚りながら剣術の柔術だのといつては知んねへが田地畑の事なら夫りやア目利だ、草深へ所でマヤット生れて五十一に成るまで鎌鋤かついて泥ボケに成つて功つんだ已だ、そりやア茲の田地はハア年貢は安いが出水の時此川くらコウ水が来てぶん流すから茲は地位は高へぐ其割に行ねへ、また茲の田地は早稲ぐい、どう晩稲ぐい、とか中手ぐい、とり其機見分なら雑作ねへ人にやア負ねへつもりだ、遣るべいはんどうやら私し受引て急度遣るべし、よふごさへ升浪「成程田地の目利なら人に負まいるこそ思ふから伯父に成つてくれと頼んだのじや正「エ、ヨ己れもおめへ様の様な氣が付甥をもて心安心だヨ、エ、遣るべし」

第十三席

傍で浪江が酒をす、め升から正介は段々酔つて少し呂律があやしく成り變に調子も張つて参りまして正介「マア浪江さま安心なせへ、わし今の事やら引受るヨ、ダが私しも續馬の赤塚の生れだが親類執寄は皆んな死絶てしまつて今じやア木くら落た犬、ナニ犬じやアなうつた猿だが、其佛さまの今年の秋の年回に調度當るだからさうか旦那寺へ付届けエ

して法事を仕やうと思つた所だ、有難へおめへ様が呉た此金で法事して村の人をよんで御馳走をしてもまだ餘る、から残りてまた單物ぐらゐは着られムヨ、有がてへ、私しまだ内の先生様ぐ秋元さまの御藩中で二百四十石とつた眞與島伊惣次といつた時から奉公して今年で調度九年勤めるマ、先生は風流が好きでれ屋敷を出てから柳嶋へ引込み書エ書いてムるが、アレでもまだれ年は三十七だヨ、アノンエ、人はねへ誠にやさしげな先生で、われは身寄も何にもねへが縁あつて己が様なもんでも主人家來になつたのは深へ縁だ、己が所に長く九年もをつたから生涯内へ飼殺にして遣るツテ、手めへが煩つたら己れが看病して死水は取つて遣ると、ナンと浪江さま有難へでは手へか、夫に眼のよる所へは玉でアノ御新造さまがエ、お人だ、年は先生から見るとよつぽどお若へが氣イ付の何のツテ、あなたも弟子に成つたが毎度先生が、浪江さんぐらゐ氣の付弟子はねへアレハ弟子に取替つたつておんたを娶てゐ升ダガ浪江さまほんとうに伯父甥となれをあなたに悪い事かあれバ私し小言をいふケガから其時腹ア立ッてなしたヨ 浪江「夫は大丈夫じや何で腹をたつものかヨ、夫ではいよく頼みを聞いてくれるかト浪江は前にありました猪口を盃洗てゆすぎまし

て、サア是が改ためて伯父甥の固めだと正介へさし升から正「有難へマ、頂くべしチット
 またてぼれる様についではいけねへト正介は快く飲干ますから浪江は得たりと思ひま
 て浪「イヤ早速の承知で忝けないヨウ新類になれば何も彼も互ひに物を隠したてを致して
 いけんから正介さん私しは腹藏なく何も彼もいふヨ正「ア、夫がい、云ッしやい何でも
 云ッしやい己れ聞くヨ浪「マガこん事をやすのは面目ないノ……正「ナニ面目ねヘッ
 マ何がサ浪「イヤ何でもないが……面目ない、實はナ、先生のね留守の内には、面目な
 いが、柳嶋のお宅の新造に手前くつ、いたテ正「エ内の新造にくつ、いたッテ何が
 つ、いたミ浪「分らん奴じや實は面目ないが先生の目を忍んで新造れさせ殿に密通いた
 したヨ正「エ密通とはどうしたマ浪「是ハ分らん奴じや……間男を致したのじや正「エ
 、内の新造とあんたと間男をしたとエ、浪江さま笑はしちやアいけねへ、嘘をあんた云
 てはいけねへ、アノ新造があんたに喰付ナンテそんな事は仕ねへ、ろりやア私しが九年
 も勤めたから新造の氣質も能く知つて居らアおめへさまの様な唐瓜に、ナニアノおめへ
 さまの様な色の黒い人は嫌ひだヨ、そんな事をいつて已またおげさせ様ッテ夫は己知つて

居るからマメマヨ浪「イヤ夫は手まへがいふ通り、新造が手前も惚たのではない正「さ
 ふだらうヨね前様のやうな青ッ髭はさらひだ、ナニこつちの事ッテ浪「イヤ先方では中々
 承知する景色はなかつたが手前をういふ悪縁か存懇惚れたゆゑ命にかけて迫つて終に口説
 落したのじや正「エ夫じやアおめへさまはんどりに密會たか……マメゲタナ、マアおれへ
 事をしたト正介も驚ろきました、根が正直を正介てムい升うら膝を進めまして正「マア浪
 江さまおめへ様おれへ事を遣つ、けタナ間男をするナンテ、私したまげたヨ、ダガ仕て仕
 廻つたら最ふ取返しが出来ねへマ、爰が伯父甥の中だからいふが悪い事はいはねへ決して
 跡ねだリイ杯しねへでタッダ一度てよせヨ浪「夫は手前が云ないでも悪い事とは存してを
 るが命に懸てもと思つたれさせ殿マッダ一度では心が濟ぬ故また参つては口説泊つてい追
 つたので一度が二度三度と相成り段々枕をかはす程深く相成るのが此道で、此せつでは
 新造もこんなものでも可愛いとやされて……就ては南藏院の天井の書を書いて仕まへへ歸
 宅さる、先生、其先生が歸つては互ひに楽しむ事も出来ないとおさせ殿も心配してとるの
 だが正介頼みといふは爰だ正「どこだナ浪「イヤサ頼みといふは外ではないが先生をけふ

運出して此浪江が人知れず殺すから何と其手引をしてはくれまいかと聞まじや
くまい事か酒の酔ひもさめよしてブル／＼震へ出し升た、愈／＼正介を無理に
ひまして重信を落合の盤狩に運出すといふ、ちよつと一息つさましてや上す

第十四席

思ひ懸なく浪江に心腹を明されました正介は齒の根も合ひませぬ程で飲んだ酒も醒まして
體中か戦慄／＼してまいり升たが逃げ升わけにもいさませぬから唯恐ろしい人だと浪江の
顔を見つめてをり升、浪江は平氣で酒をのみ、盃を下へ置きよして 浪江「今はなした露だ
からけふ私しは爰から直ぐに歸つた積りにして置いて實は隠れてをつて待伏せをしてをるか
らお前は爰から南藏院へ歸り、此頃は落合の田甫の盤が大ううよいさうでふい升から見物
にいらつしては如何でムリ升幸ひ浪江さまから土産に下すつたお肴もあれを瓢箪へは
酒を入れてぶら／＼た出懸なさいとよいあんべいに勧めて運出してくれ左様すれば私しは
道に待つてをつて出しぬけに切懸るから手前も後ろから助太刀をして木刀で先生の頭を
むやみにぶつてくれれば忽ち落命は知れたことじや、よいう、どうかないものにしては呉れ

まいか、どふじやナ 正介「浪江さまめへ様はチツカナイ人だ怖い人だ貰つた金返し升 浪
「コリヤ／＼何も一旦遣はしたナニか前に上げた物を歸すとは失禮ではないか 正「イヤ已
金貰ひますまい……マア浪江さまよく物を積つてはらんませへ、大恩のある九年も奉
公した旦那さまを殺すなんテへ恐ろしい事が勿体なくつて出来へイカ、ア、こんなおめへ
様の心いさならは馳走にならなきやアよかつたナレ爰で物と喰つたり酒ニ飲だりしたが一
生の過りゾア、ア、情けねへトベツ／＼泣出しよした浪江は弱身を見せまいと思ひ升から
浪「コレ正介手前に計り一大事を明させて其様な事は出来ませぬと、は不埒千万じや不
、ヨイ一大事を口外致させて開入れんければ是非がないろちを差殺して置て手前其場を去
らず切腹いたして相果る、ヨイカ、覺期をいたさせト刀を引よせ升から 正「ア、おめへ様
待なさへ、ペラボウに氣の短い人だ 浪「左様なら得心いたしてくれるか 正「ダツテ勿体ね
へろんな事が 浪「矢張得心いたさねば差殺すぶんの事ヨイナ 正「ア、待なせへ 浪「然らば
承知か 正「ダツテ見す／＼は主人さまを 浪「夫では頼まぬ箇程の一大事を明したのは拙者
の見込違ひヨイ夫へ出いト刀の鯉口をくつろげ升から 正「待ヨ、さてといつたら待ッーや

「浪」左様なら得心するう正「ア、否だといへば殺すツテいふレ、ウントいへば主人様を殺さなければ成らぬわ、情けねへコンマ浪「其代り是を仕遂げてくれ、ば骨は偷まぬ澤山禮は遣はずから遣つてくりやれ正「仕方がねへ遣るべい、遣り升ヨ浪「然らばヨイカ正「よふムへ升といふに私し仕方がねへ遣るよマカ、浪江さま先生は素ばらしい劍術の名人だヨ浪「イヤ劍道に勝れてをるといふ事はおきせ殿うら聞てをるからヨイ、譬へ名人でもまた此方には計略があるコレ一寸と耳を貸せ正「エなんマツテ、ア、くすくすつてへ浪「よいかど何か暫らく囁きまして正「ろんなら私イ供としてゆくのか浪「私しはナ落合の田島橋のなだれに小坂がある其左り手は一面の薄で赤楊が所々にある小高い丘だから其生茂つた薄の中に隠れてをつて先生と遣り過して竹槍でたゞ一突にいたす、左様いたしたら貴様も後ろから真鍮巻の木刀で力に任せて頭をなぐれ左様すれば幾等手利だといつても不意を討ては遅れを取るものじやヨイカ、其代りに只今もやした通りに褒美として二十兩其方に遣らす正「何金いりましねへ五兩貰つて人を殺せといふ物二十兩へイ貰はふもんなら何殺せといふか知ンねへ浪「たわけた事をやすな金子を遣はしたつて先生の外に誰を殺す

ものか正「何い、が子、マカ間違へておめへ様私し竹槍で突てはいかねへ挑灯を持ってバ私し旦那より先だから浪「イヤく燈を見物にゆくのに挑灯をもつて参るものがある物か正「ハア夫じやア黒暗かね浪「今夜は臍月であらふと思ふから詠へ向だ正「ヨイ仕方がねへ、否だといやア殺すといふから仕方がねへ勿体ねへ遣つ、けべい浪「然し手前此場は受合つて寺へ歸つてから裏歸りをいたして萬一手違ひにでも成る時は致し方がないから最早悪事も露顯いたせば本堂へ踏込んで貴様を初め切つて切つて切死を致すから左様思へ正「エ、又切ころすツテ、ヨイヨ案事ねへがい、大丈夫だ己れ九年も奉公して忠義を盡したのもムダにして遣るべいと受合からは案事ねへがエ、浪「左様いふ心なら安心じやサア最う夫でよいから一杯のまんか正「モウモウ酒も咽へは通らねへ、夫じやア此五兩は貰つて置くよト威され升た正介は金子を懐中して土産の折詰を貰ひまゝてろんなら斯々斯々いふ計略だど示し合せまして此花屋を立出南藏院へ歸つて参り升た

第十五席

人間は餘り不正直過ぎましてもいけません、が輪を懸た正直でも困り升もので惡漢の浪江に

腹の中まで見透されました下男の正介は受合の受合たが心にす、みが有とせんがとどいつ
 たら切れ様かど命の惜しいのが先に立ますから濟ない事とは思ひ升が落合へ主人重信を運
 れだす一件を斯うくせよと悪智恵を教へられて土産の折詰を提まして南藏院へ歸つて來
 升た 正介「先生さま今歸り升た、重信はあまり暑さで殿しいから奈良團扇をもつて縁奥に
 涼んでをり升たか此方へ参り升て 重信「チ、正介、浪江はいか、致したナ 正「へいあの浪
 江さまはアノ急に御用が出来て歸り升から此着を先生へ土産だといつて上てくれッテ急い
 で歸られました嘘じやアねへ歸つた振きて道に待伏 重「何じやと 正「イエ宜しくといつ
 て歸らつしやい升た 重「チ、左様で有つたか、何か是は馬馳走しやナ、是は氣の毒千萬ナ
 、ハア、馬場下町の花屋か、貴様も馳走になつたど見ゆる 正「ハア私しイも大ろう馳走
 に成り升たマ 重「夫にいたしてはさつはり酔んナ 正「酔ましチへどうして酔れる物か 重「
 いつも手前は一台も飲ど大分元氣が出るのにナせ今日は酔ん 正「酔たければ覺テ、イエ已
 けふは心持が變痴氣でいつもの様に酔ましチへ 重「夫へいかなナ、あの浪江くらゐな氣の
 付く男はないの、私しが菓子好きゆえ何か口に合様なものといつて先刻金玉糖を澤山、

れたかまた魚か不自由であらふと思つて何か焼肴に付合せどうも深切な男だのウ正介「
 へエ誠に深切てムへ升……アノ先生浪江さまが然うやしダツケがあんまり先生が凝て夜な
 べ迄なすつては却つてお體の毒になり升ダカラ偶には保養をなせへッテ、已に何でも先生
 さまア運出せッテヤし升た 重「ナニ夫ではあまり疑て書を書いては毒だからテトぶらく歩
 行でも致せとヤしたのか 正「左様サ、夫だから已に運出せ、ナニサ、先生さま今夜當りは
 めつぼう暑くッて蒸し升からどうだらふ落合へ螢を見物にお出なすつては如何でムい升已
 お供しベイト浪江に教はつた通りにいひ升から 重「いかさまトト失念いたしてをつた兼
 落合の螢狩がよいとヤす事は朋友からも聞及んでをるが、夫は餘程見事ださうじや、
 俺の螢と違つて大粒にして其飛かふさまは明星の空を亂れ飛ぶかと思ふ計りまた地に伏す
 所はキラ／＼として草葉の露と怪しまれ恐らく江戸近在又は箇様な螢狩はないと申す事
 じや三ツ子に淺瀬と聞いたと同じ事じや貴様に云れたので思ひ出したヨ、最う日暮に間も
 ないから幸ひ浪江から貰つた折を先へ参つて開くとして宅から持つて來てをる瓢へ少々酒
 を入れて出懸やう正介支度をしてくりやト重信は着物なぞ着替まして身支度をいたし升、